

同時代ライブラリー 137

岩波書店

ある台湾 知識人の

悲劇

楊威理 著

中国と日本のはざままで 葉盛吉伝



葉盛吉(1923-1950)

民主化運動に倒れし人々に捧ぐ

目次

プロローグ 3

第一章 植民地台湾に育つ

14

出身 14

台湾での公学校時代 20

台湾での中学校時代 23

日本への憧憬 35

第二章 日本留学の日々

39

浪人二年 39

二高時代 50

入学後の苦悩 50 民族の文化と伝統 61

同郷人 67 一寮の庶務幹事となる 74

特別志願兵 79 着物と羽織 84

全寮弁論大会 86 明善寮の庶務幹事となる 88

ユダヤ問題と神ながらの道 94 右傾 104

国分大尉の侮辱 109 再起 112

私との論争 113 二高生徒大会 117

八紘一字批判とユダヤ問題批判 131

中国への関心 146 第一海軍火薬廠で 152

敗戦前の世相 158 二高——奥深き学び舎 164

東北は我が故郷 170

東大進学と日本の敗戦 177

敗戦前の東京で 177 敗戦後の東京で 185

プロレタリア尾行 191 女性と 195

帰国 202

第三章 台湾で生きる……………205

幾重もの苦難 205

失望 205 思想の左傾 214

台湾大学での活躍 218 私との再会 224

大陸旅行 226 H女史と 232

入党 235 二人のヒューマニスト 238

台湾大学を卒業して 241 結婚 244

赤狩り 247

逮捕 247 獄中で 251

転向せず 254 遺書と自叙伝 256

判決 262

千古風流の人物 265

処刑 265 その後 273

エピローグ 277

葉盛吉資料目録 285

あとがき 289

ある台湾知識人の悲劇

——中国と日本のはざまて・葉盛吉伝——

プロローグ

葉盛吉ようせいきちの一生は短い。彼は二十七歳で台北刑場の露と消えた。一九五〇（昭和二十五）年のことである。

日本の植民地・台湾で生まれた葉は、第二次世界大戦の終りまで日本の教育を受け、しかもエリート・コースを歩んだ。台湾で中学校を卒業した彼は、一九四三（昭和十八）年四月に仙台の旧制第二高等学校に入学した。

時、戦雲急を告げ、旧制高校は三年から二年に短縮された。葉は一九四五年三月には二高を卒業、四月に東京帝国大学医学部に入学している。

八月十五日の日本の敗戦をきっかけに、葉は一九四六年の初めに台湾に帰り、台湾大学（元の台北帝大）医学部に転校した。しかし、卒業後間もなく蒋介石政府の「赤狩り」で投獄され、銃殺の刑に処せられたのである。

葉は日本留学時代でも、台湾の国民党統治時代でも、人としていかに正しく生きていくべき

かを、真剣に考えていた。短い一生ではあったが、真理の追究に、彼は命をかけて取り組んできた。彼の求道精神は幻想的なものではなく、知行合一であった。認識されたものは実践に移すという堅い意志が、彼の肺肝に底流していた。

この求道の過程で、彼は悩みに悩んだ。日中戦争のはざまで、台湾人は、日本人になるべきか、中国人になるべきか——この二者択一は彼を懊悩の極みに追いやった。それは民族問題の葛藤であった。

台湾に戻ってからは、今度は蒋介石の国民党に身を投ずるのか、または毛沢東の共産党を選ぶのか、彼は新たな二者択一を迫られた。当時、国民党は中国の地主階級と官僚資本家階級の政党と見なされていた。共産党は、その綱領によると、労働階級の党であった。国共両党の選択は階級の選択ともいえた。

この民族問題と階級問題のほかに、葉盛吉には母性愛と家庭愛の欠乏という沈鬱がのしかかっていた。

それのみでない。彼はまた異性との愛情でも悩み悶えた。

純情な彼に対して、運命の神は峻厳であった。そして最後に二十七歳の若さで、死神は彼を呼び寄せたのである。

葉盛吉は有名人ではない。が、彼の短い一生に、日中両国の現代史のある側面が見られる。

また戦後の国共両党闘争史の局部も垣間見ることができる。彼の一生は植民地知識人の苦悩の歴史であった。

葉と私とは、旧制二高で同級生、同寮生、しかも同郷であった。運命を同じくしていた彼と私は、二高入学後間もなく、無二の親友となった。葉が処刑される数週間前に獄中で記した「自叙伝」では、私たちの交わりを《肝胆相照らす仲》と書いている。

戦後、二人が台湾大学に転校して間もなく、私は北京に赴き、大陸で四十三年もの長い滞在をすることとなった。彼は台北に止まり、大学卒業後いくばくもなくして命を落としたのである。

大陸と台湾は数年前まで、往來の自由が全くなく、私が彼の死を耳にしたのは、落命後実に三十年もたった一九八〇年であった。それも直接台湾からの情報でなく、日本の友達からの又聞きである。友の死は私には大きなショックであった。

銃殺されたのは確かであるが、いつ、どこで、どういう理由で処刑されたのか。私は何としても確実なことが知りたかった。十年この方、私は八方手を尽くしてその事情を問いただしたが、中国大陸で台湾の情報をつかむのは至難のわざであった。当時は手紙ですら、外国経由でないと北京から台北に届かなかったのである。

一九八九年六月四日、天安門事件が発生した。イギリスにいた私の娘は「シビル・ウォー（内乱）が起きたら大変よ！」と国際電話をかけてきて、ロンドンで航空券を買ってくれた。六月十一日に、私たち夫婦は北京を離れて、閑静なイギリスで半年を送ることになった。

幼い日より日本の教育を受けてきた私にとっては、日本は第二の故郷である。イギリスも住みよいが、二高時代のような友達がいらない。日本に戻ろうと、私はこの意向を二高の友垣に伝えた。

郡山市の尚志学園長・佐藤信先輩は、すぐさま招聘書をロンドンに送ってきて「本校で貴兄のために中国語学科を設けます」と絶大の好意を寄せてくださった。

二高の同窓生の赤石健一、中島穰、古川清などの諸兄は、私の雇用ビザの取得、職業の斡旋、住居の提供などに全力投球すること四カ月、ついに一九八九年十二月二十六日、私は再び日本の土を踏むことができた。

東京では、中島兄が早々と新しいマンションを用意して待ってくれていた。テレビからクラー、冷蔵庫から布団、鍋から釜にいたるまで、ありとあらゆる生活必需品が整えられていた。友の暖かい思いやりで、私は四十三年ぶりに「帰省」することができたのである。

日本に着いてからなすべきことは沢山あったが、なかでも葉盛吉のことは、私の脳裏から離れることはなかった。

日本と台湾とは距離的にも近い。今度こそは葉の情報がキャッチできそうな気がしてならない。私の弟・陳博仁が台北にいたので、彼に頼めば何とかなりそうだと。私が来日して間もなく、彼が東京に来た機会に、葉のことを調査してくれるよう相談した。

私は弟に葉の原籍・台南県新営郡（現新営市）の住所を手渡した。これは私が持っている唯一の手掛かりである。台北に戻った弟は、まず新営市の市役所に何回も電話で照会した。ところが、私が渡したのは半世紀前の戦前の住所である。日本統治時代のものでどうにもならないとの市役所の返答であった。

途方に暮れていた弟に、思いがけない人が助け船を出してくれた。一九九〇年の秋、弟が台北から北京へ旅行したとき、たまたま台湾大学医学部のYという教授と機中で同席した。Y教授のお話では「葉盛吉という名前は聞いたことがある。新営駅の近くに小さい慈善病院があるが、その内科に顔世鴻先生がいる。顔先生なら葉盛吉を良く知っているはずだ」と。

北京から台北に戻った弟は、旅の疲れをものともせず、すぐさま新営に駆けで行った。ところが、何時間探しても、新営駅付近には慈善病院らしきものはない、日も暮れてきた。後で分



葉盛吉の墓とご子息・葉光毅教授、
1991年1月8日

かったことであるが、Y教授は台南駅を新
宮駅と間違えて記憶されていた。

この時、弟は「葉盛吉の父が長年、新宮
の製糖会社に勤めていた」と私が話してい
たことを思い出した。彼は製糖会社に赴き、
付近の雑貨店で、とある老人に尋ねたところ、
昔たしかに製糖会社の宿舎に「葉」と
いう人が住んでいた、と話してくれた。こ

れに元気づけられて、弟は製糖会社の宿舎に足を運んだ。ここにはまだ日本時代の古い建物が
幾らか残っていた。

辺りはもう暗かったが、二人の老人が散歩しているのに出くわした。昔の事を尋ねるのは、
年寄りに限ると、葉家のことを聞いたところ、よく知っているとの返事である。葉盛吉の父は
もう亡くなったが、その親戚が冷菓店を開いていると言う。弟はその店に駆け付けた。夜の十
時近くであった。

この親戚は六十五歳前後の人で、つまびらかに葉家の話をしてくれた。葉盛吉には葉光毅と
いう息子がいて、台南の成功大学の教授を勤めていることが分かった。もう深夜なので、弟は

自分の住所と電話番号を残して台北に戻った。

「兄さん、やつとのことで、葉盛吉先生の息子さんが台南にいたことが分かりましたよ！」

——一九九〇年十一月二十日の深夜、台北の弟から私への国際電話である。

ところが、一カ月過ぎても葉光毅さんから弟への連絡がない。私から葉光毅さんへ出した手
紙も着いているはずなのに。たまりかねた弟は成功大学に電話して、葉光毅さんと面会の約束
を取りつけて台南に向かった。一九九一年一月八日のことである。

葉光毅さんが弟に連絡してこなかったのは、白色テロ犠牲者の遺族には、第三者の窺い知れ
ぬ思惑があったのであろうか。しかし、弟との対面で葉光毅さんは来意がよく分かったに違
いない。葉盛吉夫人ともお会いすることができ、また葉盛吉が残した膨大な資料をも見せてい
ただいた。

葉光毅さんはさらに弟を顔世鴻先生に紹介してくれて、三人で台南郊外にある葉盛吉の墓地
にお参りした。弟は兄に代わって畏友・葉盛吉君の霊前に初めて焼香することができたのであ
る。

顔先生は葉の台湾大学の後輩で、二人とも同時に投獄されたのであった。後述するが、顔先
生はその後、私に大量の貴重な資料を提供してくださった。

その後、葉光毅さんは私に国際電話を掛けてきた。流暢な日本語と北京語、閩南語(福建、

台湾の方言をチャンポンに使った通話であった。彼は電話で二高校歌を歌って、父親に思いを馳せていた。

前述の葉の残した資料とは、日記、手記などで、息子さんによって計二十五冊に整理された膨大なものである。中学時代から死に至るまでのこの貴重な記録は、葉盛吉の一生を知るには無くてはならぬ資料である。私も葉がこんなに多くのものを書いていたとは知らなかった。これらの資料は、戦後日本から持ち帰ったものの、台湾大学時代のもの、獄中で書いたものが含まれている。

彼の死後、葉夫人はこれらの資料を家宝として保存してこられた。白色テロの時代に、こんなものを手元に置いておくことは、よほどの勇氣がいる。御主人の遺物を大事に保存してこられた夫人の執念には頭が下がる。

これらの資料は半世紀の歳月を経て、湿気に侵された所もあり、しかも戦時中の紙は質が悪く、虫に食われた箇所も少しはあるが、総じて言えば、良く保存されている。夫人は、葉光毅さんが成人されてから、父親のこの掛け替えのない遺産を息子に手渡されたのである。

葉の資料はほとんどが日本語で書かれている。日本語の分からない葉光毅さんは父親の資料を解読したい一念に駆られて日本語を勉強した。アメリカに留学する機会もあったが、彼は

8月15日(水) 皇
葉光毅さん 日記 昭和二十年八月十五日
① 天皇陛下の御下命の御旨を奉読し、
放送あり。
日本帝國政府は、
受諾し、此處に先發、
條件降伏せり。
かく戦争は終つた。此の日、
遂に終結せしむるなり。

戦争は終つた。然し、
解決されたわけでは無い。我々は、
限りある目的を達成し得ない。然しなから、
と目的達成は、
即ち一時のものとせよ。或は、
は、
日本の、
は、

葉盛吉の日本敗戦の日の日記

日本を選び、一九七五年から一九八三年まで大阪大学に留学した。

一九八八年、葉光毅さんはこれらの資料を分類整理し、また万が一のことに備えて、二部のコピーを取って保存した。

葉光毅さんの許しを得て、私の弟は台南からこの二十五冊の資料のコピーを台北に持ち帰り、すぐさま二部りコピーした。

一九九一年三月十九日、大きな航空便小包が台北から届いた。待ちに待った二十五冊の葉盛吉の資料である。

この膨大な資料のすべてが、

彼の持ち前の几帳面な字で書かれている。日記は一九四〇年(中学五年の時)から、一九五〇年五月二十九日、台湾政府に逮捕される前日まで、ほとんど毎日記されている。簡単な箇条書きもあるが、詳述したところもある。

手記は二高時代に書いたのが多い。ここには彼のものの考え方がよく現れている。惜しいことに、台湾に帰ってから手記はほとんど書かれていない。

読書手記もある。その中には矢内原忠雄の『マルクス主義と基督教』の詳細な抜粋もあれば、トルストイの『戦争と平和』の登場人物の関係図も綿密に描いている。医学生手記には解剖の正確な絵が沢山描かれている。

台湾大学の卒業論文は、サマリーは中国語で書いているが、本文は日本語である。中学、二高の卒業証書、東京帝大から台湾大学への転校証明書、台湾大学の卒業証書など、全部揃っている。

その他いろいろな証明書も彼は残している。中学の成績表と人物性行調書、二高校長阿刀田令造先生の印鑑が押されている学生身分証書、明善寮時代の男子体力検定証、二高理乙の成績席次証明、種痘証明書、東京都が昭和二十年に発行した「家庭用米穀通帳」など——いろいろな証書が保存されている。

それにまた、彼の描いた漫画が一冊に集められている。漫画はちよつと素人ばなれた腕前

である。コミカルなものもあれば、自然を描いた美しいものもある。

彼は短編小説も書いた。詩も折にふれて作っていた。とくに日本時代にそれが多い。

獄中で書かれた手紙などが二冊の書簡集に集められているが、その最後に死刑判決書の写しが付されている。

彼は処刑される一カ月前に美しい日本語で「自叙伝」を書いた。二万字に近いもので、終戦までのことを回想している。

葉盛吉はもう人間にいない。が、これらの資料を読むたびに、彼の姿が彷彿としてくる。彼は今でも学生時代のように我々に語り続けているのである。

旧制高校、帝大の出身者にはいろいろな人がいるが、葉盛吉のように中国の民主化運動に若き命を捧げた人は特に記念されるべきであろう。この書をわが友へのレクイエムとして彼の霊前に捧げたい。

第一章 殖民地台湾に育つ

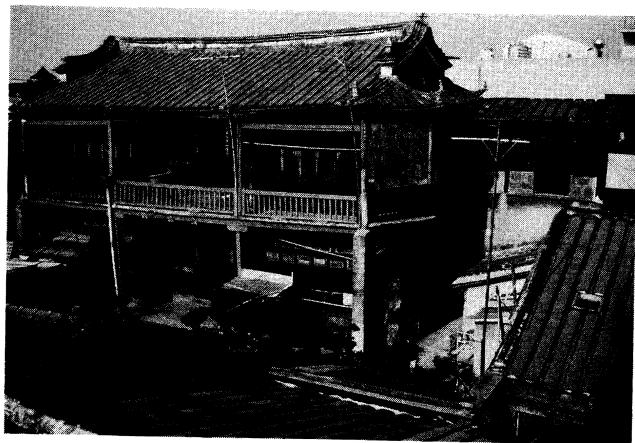
出身

葉盛吉は一九二三（大正十二年）十月二十五日に台北で生まれた。

彼は漢民族の出身である。日本人が今なお「高砂族」と呼んでいる台湾の先住少数民族とは違う。福建、広東あたりにいた漢民族は、数百年前から続々と、台湾海峡の荒波を乗り越えて、台湾に渡って来た。彼らは中国大陸の出身地と方言の違いで、閩南系と客家系に分かれる。葉は閩南系に属する。

乳飲み子のころに、母親が熱病で亡くなったので、葉は子供のなかった叔父・葉聡に貰われて育てられた。叔父は台南県新営郡の人で、爾後、葉盛吉の原籍はこととなる。

そもそも、葉家は大家族で、葉盛吉の祖父の時代は榮華を極めていた。祖父が建てた「八角楼」は八つの角を持っている珍しい建物で、今でも新営の塩水港に残っているが、この建築は



葉盛吉の祖父が建てた「八角楼」。所在地、台湾塩水港

葉家の当時の隆昌を物語っている。

その庭先に大きな石碑が見え、

「伏見宮貞愛親王 御遺跡 塩水港御舍営所」

と刻まれている。

親王は日清戦争終了後、近衛師団を統帥し、この辺りまで来たときに、「八角楼」に泊まったのである。石碑の裏には

「明治二十八年十月自十二日至十八日 御舍営 昭和十八年三月三十日建立」

の字が見える。

榮枯盛衰は世の常か。葉家は葉盛吉の父の時代から没落し始め、みな散り散りに分家した。

葉盛吉の養父の葉聡も二十歳から新営塩水港製糖株式会社本社に職を求めた。この会社で、彼は六十五歳まで人事課に勤務して、課長にま



伏見宮貞愛親王の「八角楼」舎宮記念石碑

でなった。台湾人で人事の仕事を任されていたとは、会社には相当信用されていたに違いない。《その辛苦は実に涙ぐましいものがあつた。実に彼の一生こそは台湾製糖の歴史でもあつた。勤勉着実、石橋を叩いて渡るといったような処世振りであつた》(自叙伝)と葉盛吉は回顧している。

養父母の慈愛の下ですくすくと育つた葉盛吉は、茶目つ氣たつぷりであつた。

《私が三つ位のときだったか、私と同年の従姉が部屋の上で午睡していたところを、私が近寄つてその頬つぺたにキスして、それを伯母に見つけられたことがある。後になってよく冷やかされた》(自叙伝)

幼年時代から、葉の生活には日本的なものと台湾的なものが混合していた。これは彼の父の環境がしからしめたのであつた。製糖会社はもちろん日本人が経営していたもので、父の周りには日本人が多かつた。父・葉聡は植民地統治の第二世代の台湾人に属し、台北師範を卒業して、相当な日本の教育を受けてきた。製糖会社の社宅に住んでいた父は、幼い葉を日本風の環境で育て上げたのである。

社宅では、琴の音、尺八の響きが絶えることはなかった。秋の静かな夜、虫の音とともに聞こえてくる日本色ゆたかな音色は、子守歌のごとく、幼い葉の心の奥底にこだました。社宅はもちろん日本家屋である。それで、葉は乳飲み子のときから、畳の上で育てられた。

《ハンモックに寝ていた私が、ドスンと大きな音をたてて、ヤモリのように畳の上に落ちたことがあつたとも父はよく言う》(自叙伝)

彼にはまた、日本人の子供と全く同じようなこんな記憶がある。

《年の暮れになると、社宅で畳替えのあるころだ。子供のころ、じつと職人のそばで畳なおしの仕事を見るのが好きであつた。ござの切れ端は、よく遊び道具に使つたものだ。青い畳の新鮮な香りをかぐころ、正月がやってくる》(手記、昭和十八年九月二十二日)

同じ台湾人でも、私には葉のような日本的なものの思い出はない。恐らく、多くの台湾人もないであろう。私は十一歳の時に台湾を離れて大連に行ったが、そこで日本人の家に下宿して

初めて畳の生活が始まったのである。

住居は日本風であったが、葉はここで台湾の団子を食べている。台湾古来の習慣によって、年の暮れに、米を挽いて作った紅白の団子を、彼は畳の上で食べていたのである。

《寒い冬空に、冷えた身体を温めてくれる、あの甘い柔らかい団子を、ふうふういつて食べる》(同上)

正月になると

《晴れ着を着て、美しく門松たてて、日の丸の旗たなびく社宅の通りは何となく明るい感じ》(同上)

しかし一方では

《砂糖をころがした落花生、冬瓜の砂糖漬、……爆竹の音、田舎に行けば門ごとに見られる赤い対聯〔対句を書いた掛軸〕(同上)と回想する。幼い葉の正月にも、日本的なものもあれば、台湾的なものもあった。

幼年の葉盛吉には、既に二つの故郷があったのだ。旧制二高に入って間もなく、彼はこう回顧している。

《自分の心には一つの故郷がある。社宅に幼時を過ごし、中学校で寮生活をやった自分は、

教科書の上からと共に知り得た内地「日本」の風俗習慣が、そこに一つの故郷を植えた。

幼いころ、暗いじめじめした建物、親類の家に結婚やら、葬式などで行き、その生活、その行事に接したり、或は田舎の廟の祭りの光景、人の山、物売り、騒がしい芝居、仮装行列、花車等を見た幼き日の印象が、更に一つの故郷を心の中につくって来た。

前者は社会の生活から、後者は血統、伝統から来た故郷である。それがさほど矛盾を感じることなく、自分の心の中に存在していることは全く不可思議と言うほかはない。

今でも、どらや、ラッパの音、美しい刺繍に包まれたかに見える結婚式の様子、豪華な会食、更に故郷の風景を見ると、往時をしのぶ情にかられ、この上なく懐かしくなる一方、笛の音、夕焼け小焼けの童謡、佐渡おけき、おけき節などを耳にすると、母の膝に抱かれたような、うっとりした気持ちになるのである。

極端に生活様式を異にした二つの故郷を心の中に畳んで、折に触れて、そのいずれかを適当に引っぱり出しては、懐古の情に耽ることの出来る心理作用には驚かざるを得ない。この気持ちは恐らく南方からの留学生も持ち合わせていると思う》(手記、昭和十八年九月十二日)

このような日台混合の幼年時代は、葉盛吉の一生に大きな影響を与えたのであった。

台湾での公学校時代

昭和五年、梅檀^{せんたん}の花の落ちるころに、満七歳の葉は新宮公学校に入った。植民地の台湾では、台湾人児童が入る小学校を「公学校」と称していた。

その前の年に、葉の父が紙にきれいな字で「アイウエオ」を書いてくれたほかには、彼は日本語については何も知らなかった。

彼は入学当時の様子をこう回顧している。

《校庭中央の大きな榕樹の下に、小さい腰掛けが並べられ、我々はそこに座り、父兄がその周りをぐるりと取り囲んでいた。

先生が「皆さん、将来偉い人になりたいと思うものは手を挙げなさい」と言って皆を見渡したが、私には何のことやら分からなかった。後ろを見ると父兄たちが、盛んに手を挙げる合図をしていたので私もその真似をした》(自叙伝)

公学校での成績は良くて、毎学年の終業式には優等賞など沢山の賞品を貰った。日本語も上手になって、「国語」演習会には、選ばれて台南にまで出かけた。絵が特に得意であったが、運動と音楽はからつき駄目で、運動会を見るのは楽しかったが、帰りに賞品が貰えないことを淋しがった。

彼の楽しい思い出の一つに日本の少年雑誌がある。日本語が上達したのも雑誌『幼年倶楽部』『少年倶楽部』のおかげだった。

《正月前後に、よく布団にもぐって、内地より注文して着いたばかりの少年雑誌のインクの香りをかぎつつ、蜜柑やら菓子やらをかじりつつ見た思い出は、今から考えても楽しい思い出である》(手記、昭和十八年九月二十二日)

グリコも記憶に残っている。

《家の庭の大きな木犀^{ももせ}の木陰(母は木犀の花が好きであつた)にござを並べて、グリコを食べたのもこのころだったろう。あのハート型のグリコが印象に残る》(自叙伝)

昭和三年の御大典記念祝賀会の記憶は実に鮮明であった。

《赤白の布で巻いた祝賀のアーチ、戸毎に鳳凰を描いた大きな提灯、道にひらひら落ちかかる、紙でつくった桜の花、子供の目に映った美しい明るい提灯の並びは、自分にえも言われぬ華やかな夢の国のような印象を植えた》(手記、昭和十八年九月二十二日)

公学校に入ってから、彼はこのように日本の影響を受け続けてきたが、友達の中には日本人はいなかった。

公学校には日本人生徒はいない。社宅の隣近所は日本人の子供ばかりだったが、付き合いは

できなかった。目に見えない民族の壁がもう既にこのころにあったのだ。友達ほとんどが親類の台湾人の子供たちであったが、これも数える程しかなかった。

彼は独り子で、兄弟もいない。孤独な性格が既に公学校時代に芽生えている。

こんなに幼い子であったが、公学校時代に早くも植民地の統治者と非統治者の差別を感じ始めていた。後年、彼は天才文学少女・黄氏鳳姿の『台湾の少女』を読んだが、その中に書かれている「国語」というパラグラフに共感を覚えている。黄氏はこう書いていた。

「公学校に入った時、級の中に内地式に育った人が一人いたが、私はその友達を見て、台湾語を全然知らないということは、どんなに幸福だろうかと思った。台湾語を全然知らない人は、それだけ内地人に近いと考え、ただそれだけのことで、組中の尊敬の的となり、組の大將となることができた」

この一段を読んだ葉はこう書いている。

《「これは」誰も一度は抱き、一度は悩んだ問題であろう。……我もかつてはかかる気持ちを抱いていた》(手記、昭和十八年十二月二十六日)

さりながらも、この時の彼はまだ幼い生徒で、彼が接触した日本人は幾人かの公学校の先生のみであった。全クラスが台湾人生徒である公学校では、民族の対立は日本人教師と台湾人生

徒の間に起きるだけで、これはさほど表面化しない。

甘んじて日本人に同化されるのか、それとも同化に抵抗もしくは反抗するのか、葉は中学校に入ってから初めてこの問題にぶつかったのである。

台湾での中学校時代

昭和十一年に、葉は公学校を卒業し《台湾南部の雄で、高き誇りを持つ》台南一中に合格した。新営のような片田舎から、この中学に入れた台湾人生徒は、ただの四名であった。

彼は親元を離れて学寮に入った。

《学寮で蚊帳に差し込む朝日と、雀が木にむらがつてチュウチュウと鳴くのを聞く初夏の朝は、特に中学生としての喜びを満喫したのだった。俺は実に立派な学校に入った。もう俺は偉くなれるのだと思った》(手記、昭和十八年十一月十一日)

台南一中は日本人向けの学校で、台湾人は一クラスに三、四人しかいなかった。寮生は全部日本人である。彼はこんな環境の中で、日本語を鍛えられ、日本的な驍を身に付けさせられ、更に日本的な性格をも植え付けられた。植民地支配には、台湾人子弟中心の中学も必要であった。台南二中、台北二中、台中一中などがこの種の学校である。葉の父が自分の子を日本人子

だった。彼は父親の教えに従った。この「身の程」とは、言うまでもなく、統治されている植民地人の身分である。こうして、植民地人特有の、地味な、暗い性格が、だんだんと葉の身の上に育まれてきた。

彼は二高に入ってから、中学時代のこの間の事情を次のように分析している。

《男たる俺が、なぜに自分の思うことを平気でやっていけないのであろうか。

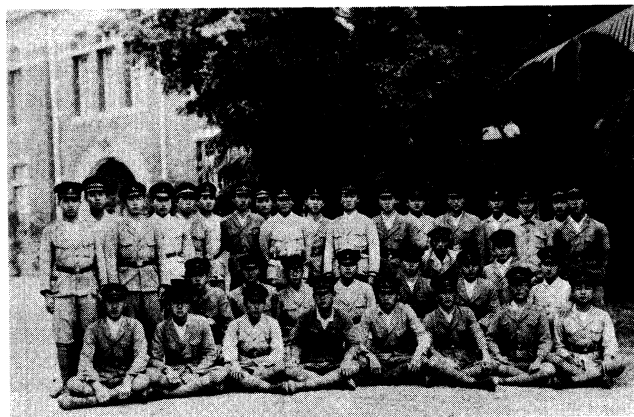
まず第一に、自分を取り巻く周囲の社会の状態を見るに、そこにはただ屈服の生活あるのみだったからである。

俺の気兼ねは、すでにこの幼時からの生活に淵源している。思うこと、信ずることを言うことは、自己の生存に一大脅威を感じるからである。言ってはならぬ。これは小さい時から親によく言われた言葉である。

それから、内地の人々から、割合に輕蔑された生活の中に育ったものだから、生活程度の高い彼らの生活とともに、彼らは自分にとっては、頭の上がらないものであるような先入観と印象が、強く脳裏に刻まれている。

そのうえ、彼らに接する機会が多いには多いが、まだ生活と生活との融合にまで進む程度には付き合っていない。

最初に接するときは、誰でもおとなしいものである。まして、内地式の作法やら習慣やらを



台南一中時代の葉盛吉(2列目左から4人目)

弟中心の台南一中に入れたのは、それが息子の将来の発展に有利になると考えたからであろう。

この日本化の過程で、葉は民族の矛盾に直面する。公学校時代と違って、今や彼は被支配民族の一員として、支配民族の集団に飛び込んだのである。いや、飛び込め、と父親に言われたのである。かつての葉盛吉は、日本的なものを独りぼっちで享受してきた。グリコを食べるのも、『幼年俱樂部』を読むのも、彼一人で行ってきた。今まで、非社会的な環境で日本のものに接してきたのだ。

中学校は全く違う。ここは日本人生徒が主体で、日本人社会の縮図である。彼は植民地という社会の中で、自分の位置付けをせざるを得なくなった。「身の程を知れ」と父は盛吉をよく戒めたもの

よく知っていない自分にとっては、人の家上がることは、一度ごとに新たな経験でもあるのである。それで恥をかくまいと思う。

この気持ちは本島人「台湾人」を軽蔑されないようにと、本能的に出る気持ちであるが、恥をかかないようにという気持ちで一杯だから、自由奔放になり得ないのは当然である。動作も小さく、気兼ねしつやる。おとなしくやる。穏やかにやる。この気持ちの下に育まれし自分の二十年の生活は、一朝一夕に直るものではない。

またそうたやすく直つて大いに快適にやつたら、それは身の程知らずの浮かれ者たるのそれは免れない。自分の現状に満足して、浮かれて、自己の境遇を忘れることほど恐ろしいことはない。端から見ると何と笑止なことであることがな。

更に次の理由として自分に兄弟がない。されば人と交わることが下手であるとともに、意思の発表も思う通りにでき兼ねる。

自分が内地の人ばかりに取り囲まれた宿舎に育つたことは、俺をして国語「日本語」を上手ならしめ、内地の生活を理解する上に大なる力があつたにもせよ、他の友人たちとほとんど遊ばなかつたことは、公学校時代という人生の出発において、兄弟のないことと共に内気な、悪くいえば臆病な性格を築き上げてしまった。

更にもう一つは、父の性格がそれほどに奔放でなく、几帳面だったので自分もその性格にな

つてしまった（手記、昭和十八年十一月十日）

植民地人として、葉も日本人からいろいろな侮辱を受けた。

彼が中学の下級生のころ、初めて日本人の家に上がった時、あるいは下宿した時、その日本人たちが、彼の動作を台湾人の習慣、性格からくると直ちに評して、日本人の優越を誇つたことがしばしばあつた。

葉は二高の時に中学時代を回顧して、こう書いている。

《俺はかかる時、何時も自己の惨めな姿を悲しく思うと同時に、堪えざる侮辱を受けたという憤りで一杯になる。

豚を、くさい豚肉を好んでよく食い、顔を洗うときに、顔をくるくる回して洗うとか、あるいは、茶瓶一つ買うのに、何度も何度も隅から隅まで見て、よいのでなければ買わないとか、あるいは、金に対する執着が強くて、ケチだとかを、いかにも本島人のすべての性格であるがごとく言ったのを、自分はどれだけ過去において耳にし、悲憤の悩みに打たれたことであるう。

もちろん、そういう状態の性格が、我々にあることは事実であろう。しかし、かかる性格に至つたゆえんをよく考えていただきたい。しかも、かかる性格は我々のみ有する性格である、と速断されては困る。かかる性格は内地において、とくに田舎において、我々のしばしば接す

るところである。

台湾では、無学の、極めて生活程度の低い人々が、それを悪いと知らずに、道にたんづばを吐くことを、導くことを考えずに、ただ本島人の悪い習慣として責める。

しかるに、内地では都会の道で平気でつばも吐き、小便をするのに至っては、初めて見たとき、正直のところ啞然とさせられたのである。

我々は己と違うものをごとく悪いものだ、と見るような偏狭な気持ちになつてはならぬ。責めたり、批評したりする前に、今一度、相手の立場と、そうならざるを得ざりし過程とを考えてやるくらいの「繋矩の道」[思ひやり]があつても良いと思う。己と違うもの、いまだ必ずしも悪きものにあらざることを知るべきである(手記、昭和十八年十一月十一日)

この日本人との対立と二重生活の矛盾を、葉は中学時代にどう解決したのであろうか。

《私の中学生生活の大半は中日事変の最中であつた。それは生活の上のみならず、思想の上にもいろいろな影響を印した。日本人との対立、二重生活の矛盾は、私を駆つて民族意識に目覚めさせたというよりは、むしろ、それからの逃避という型を取つた。私が民族意識を強く持つに至つたのは日本に行つてからであつた》(自叙伝)

逃避の道は二つあつた。一つは同化であり、もう一つは、周囲を振り向きもせずに学業に専

心することである。

彼は自ら良き日本人になるよう努力した。台湾人が日本人になれば、同一民族となり、民族問題は自然と解消してしまふ。これは現存する民族問題を正視せずに、それから逃避しようとする試みである。

葉は五年間の中学生生活で、日本の同化政策に沿つて前進した。彼自身の言うことを聞いてみよう。

《自分は中学時代、すべてに対して忠実であつた。されば、内地人の友の家を訪うて、その生活に憧れたことはあつても、大して悩みはなかつた。同化ということを感じていた。やがて我々も彼らと同じレベルに達し得る日が来ることを夢見ていた。少なくとも自分は必ず実現する希望に輝いていた》(手記、昭和十八年九月十二日)

彼はわりと素直に日本の皇民化教育を受け入れた。この五年間は中国侵略戦争の最中であつたが、彼の思想は日本的であつた。

中学五年生の時の日記が残っているが、こういう記載がある。

《振り返り見ますれば、昭和十五年は実に我が輝く皇紀二千六百年に当たり、誇りと感激とを以て終始した一年だつた。

紀元節に吾々は盛大なる建国祭を迎え、市内行進に潑刺とこの年のトップを切ったのである。

……

新たな感激にひたつたのは高雄で長門〔旧日本海軍の戦艦〕を見学してからであった。……

十二月二十三、四日、「台南」州下学徒連合演習。ああ！ かくてこの意義ある歴史的年も過ぎ去り行かんとす。我々の卒業も近い。上級学校必突破を以て高らかに皇紀二十七世紀の第一日を迎えんとす（昭和十五年十二月二十九日）

《図書館週間の行事として図書室で、去る皇紀二千六百年にちなみ、歴代天皇の御聖徳を仰ぐ展覧会が今日及び明日の二日にわたり行われる。……展覧会に偲び奉る皇室の御事共、思わず襟を正しむ》（昭和十六年一月十七日と十八日）

以上は個人の日記であって、他の人に見せるために書いたものではない。この内容から見ても、葉の当時の考え方は、日本の学生と何ら変わりはない。一方では、台湾人を同化しようとした日本政府、もう一方では、日本人に同化しようとした台湾青年——この両者の統合の試みがここに見られる。そして、葉自身は同化に対して自信満々であった。

学業への専心は、現実問題からの逃避に役立つ。人生問題や政治問題で頭を悩ますことなく、学課に全力を上げる。学徒として、万難を排しても上級学校に進学すべし、と彼は堅い意思を

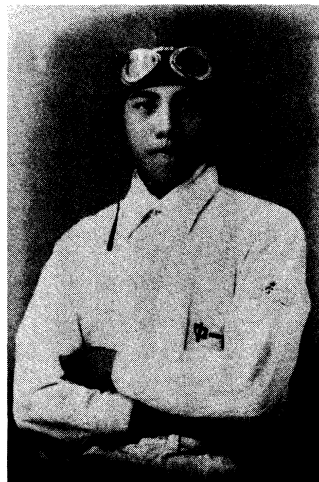
持っていた。

彼の成績は拔群だった。台南一中板垣四十六郎校長の印鑑が押されている成績証明書と「人物性行調査」が、今でも彼のご子息・葉光毅さんの手元に保存されている。それによると、ほとんどの学課が九〇点以上である。席次はこうなっている。

第一学年	一六〇名の内	第四番
第二学年	一四四名の内	第十七番
第三学年	一二八名の内	第二番
第四学年	一一一名の内	第五番
第五学年	一一二名の内	第二番

卒業の時、第一番は北白川宮殿下奨学資金賞を授与され、第二番の葉は台南州知事記念賞を授与された。葉は旧制六高の受験で岡山に行っており、卒業式に参加できなかったため、彼の父が代わりに出席した。知事賞やら、精勤賞やらを沢山貰って、父は涙を流さんばかりに喜んだそうである。帰りにあまり賞品が多いので、新宮駅から社宅まで人力車を雇い、家に着いてから子供のように狂喜したという。

このような父親であったが、盛吉はよい成績を取っても、期待したほどには褒めてもらえなかった。これは息子に慢心させないためであった。



台南一中時代の葉盛吉、二級滑空士

葉は寮では常に下級生の指導に当たっていた。五年生の時の日記にはこう書いている。

《純な無邪気な一年生に接して、私は受験勉強よりも学校の方に力をいれた》昭和十五年十二月二十九日

彼はエンジンに憧れ、『子供の科学』を愛読し、模型制作に興味を持っていた。

その影響であろうか、二年生の時から、夏休みには日曜ごとに台南飛行場でグライダーの訓練を受けた。四年生のころにもう三六〇度旋回をやり、セコンダリー（中級滑空機で数時間も空を飛ぶことができた。五年生の夏には二級滑空士の免許を貰っている。

台南一中の「人物性行調査」を見てみよう。

人物性行調査

葉盛吉

大正十二年十月二十五日生

性行

着実、真摯、温良

思想

中正

言語

明瞭（本島人ナレド訛ハ全クナシ）

才幹

文才及実行力豊富

長所

進取的ニシテ確実ナリ

短所

特ニ認ムルモノナシ

趣味

文学及スケッチ

運動競技

柔道及グライダー

体力

旺盛

健康

佳良（入学以来病欠一日モナシ）

賞罰

卒業ニ際シ成績優秀ニツキ知事賞ヲ受ク

任命

第五年ニオイテ科学部委員

備考

ナシ

右ノ通ニ候也

昭和十六年三月一日

一口で言えば、葉は台湾出身でありながら、日本的な優秀な中学生であった。

台南一中時代は、彼自身が言うように

《与えられただけを立派にすればよいころは、大して深く自己の事を考える必要もなく、従って悩みとか、人生に対する疑問とかも少なかったのである》(手記、昭和十八年十一月十一日)
 このような彼にとっては、民族問題は、中学時代ではある意味では存在していなかったと思われる。

中学時代に、葉はほとんど寮と下宿で過ごしたが、ホームシックに堪えきれず、一時、家から汽車で通学した。老いゆく父母を考えると、何とはなしに物悲しくなってくるのであった。中学二年のころから、母は病気がちであった。四年の春、彼が日本へ修学旅行に行く前には一時回復して、彼のリュックサックを縫ってくれたりしたのだが、旅行から帰ると再び悪化していた。そして、とうとう中学卒業の年の初夏に亡くなった。彼はその電報を化学の階段教室で受けとった。

彼は「自叙伝」でこう書いている。

《生前にさんざん我がままをしてきた私は、私の成長を見ることの出来なかった母のことを思うと、ひとりでに涙が出るのだった。後年、私が日本に行つてからも、しばしば夜中に思い出しては涙することがあった》

昭和十六年一月二十五日の日記(台南にて)

《昨夜、夢で母の事を思い出し、知らず識らずに涙を落とした》

昭和十六年三月二日の日記(岡山にて)

《夜、亡き母を思い出し、涙、袖をぬらす》

昭和十八年九月十二日の手記(仙台にて)

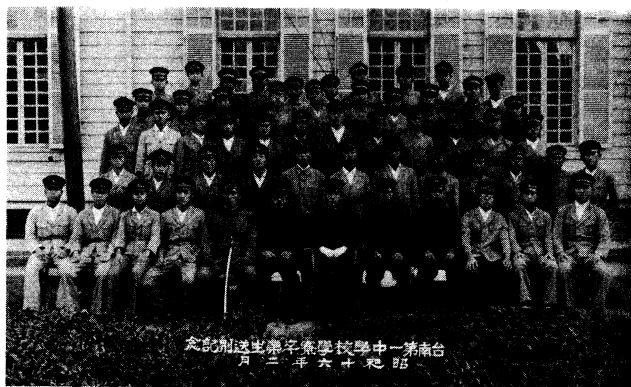
《昨夜、久しぶりで故郷の夢を見た。多少とんちんかんな組み合わせであったが、亡き母も出てきた》

昭和二十年五月一日の日記(東京にて)

《近頃、故郷の夢ばかり見る。……若かりしころの母の姿がしょっちゅう夢に出る》

日本への憧憬

葉盛吉は中学四年(昭和十四年)の夏、日本へ修学旅行に行った。



台南一中學寮卒業生送別記念，前列左端が葉盛吉

日本については、幼い時からさまざまなことを聞かされてきた。そして、日本の教育を受けてから、もう十年になる。日本語は既に「母国語」並みである。日本人の先生と日本人の同窓生は沢山いる。日本の歴史と地理、日本の文学と芸術、日本の風俗と習慣……これらの方面でも、葉はもう日本人学生に劣らない。そして、彼は日本に憧れていた。

こういう台湾の青年が、今回、自分の目で日本を見にきたのだ。彼は当時数え年十七歳である。感受性の強い若者に、日本という国が与えた影響は絶大であった。片田舎の台南から出てきた彼の目に映った輝くネオン・サインと、大都会の美しい家並みは、すっかり彼の心を躍動せしめた。「自叙伝」で彼はこう回顧している。

《初めてみる日本の美しさと賑華とは、私にもものすごい日本憧憬を植えた。恐らくまた一生で一番好奇心を満足させ、その楽しさとその感激において、一生の最たるものがあつた。それは十七歳という年頃のしからしむるものかも知れない。事実、後年、上海旅行をしたときも、初めての地とはいえ、新しく目につくものに対する好奇の念は、もうずっと薄れていた。若き日の好奇心を十分に満足させた旅行であつたのである。》

京都、奈良の名所旧跡、東京、大阪の繁華は、そしてそのネオンライトの色とりどりのまぶしさは、私の脳裏に焼きついて、帰りの船上において、思い出しては旅愁をしみじみと引き起こした》

葉が一年後、日本にきて高等学校を受験したのも、この日本憧憬と関わりないとは言えない。

もちろん、台湾での差別待遇も、台湾人学生を日本に赴かせた原因の一つであつた。植民地の台湾では、不公平な、厳しい受験合格率の内規があつた。例えば、昭和になってからは、台北帝大予科の医類と台北高校の理乙に合格できる台湾人学生は定員の二五%、その他の学部は五%に限られていた。どんなに成績が良くても、これ以上の台湾人学生は絶対に合格させない。そのため、暮らしにさほど困っていない台湾人学生は、ほとんどが日本に行って高等学校を受験したのであつた。

葉は岡山の六高理科を受けることにした。なぜ彼が六高を選んだのか、残された資料には何も書かれていない。

母校を離れる前に、彼はこう書いている。

《もう卒業と思うと、過ぎ去りし五年も短いことのように思われ、感慨無量なるものがある。……赤き瓦の校舎や木々に映ゆる赤き夕日は、ひとしお感深きものあり。……野菜畑には綺麗なうす緑のなつばが、黒い土と対照になって、こよなく美しい。食堂の西側に映ずる赤き夕日、輝く西の空、浮べる羊雲に、私は遠い入学の往時、夏休み帰省の前日の夕方の光景を思い出して、懐かしく思われてならない。虫の音が日の暮るるとともにかしましさを増して来る》日記、昭和十六年二月四日と二月六日

昭和十六年二月二十日、葉盛吉は大望を抱いて台湾の基隆港から船出した。雨のしぶく淋しい夕暮れだった。

ところで、懺れの白線帽は？ 二月二日の日記で彼は激戦を予想している。

《内地官立高校志望者発表あり。去年に比して二割六分の激増とは。競争率十以上の学校少なからず。ナンバースクール各科とも千人を越したり。懺れの白線。されどその門たるや窄し》

第二章 日本留学の日々

浪人二年

春先の岡山はそぞろ寒く、熱帯生まれの葉には不慣れであったが、《夏休みには白線帽の自分の姿を両親や親友に見せたいものだ》と彼は闘志満々であった。

ところが、六高の一次試験には合格したものの、惜しいことに二次で失敗。図らずも、葉はこれから灰色の浪人生活を余儀なくされることになった。

山紫水明の岡山から、彼は直ぐ東京に向かった。ここで予備校に入る積もりであったが、住宅難と食料難に悩まされた。一日中、何軒ものアパートを探しても、全部満員。それにちように、外食券制が始められて、代用食か、少しのパンと芋があるだけで、仕方なく葉は台湾に帰ることにした。

昭和十六年四月十五日、彼は故郷に戻った。

《父の出迎えに、久し振りに踏む新営の地、ああ我敗れたり。父にすまぬ》(日記、昭和十六年四月十五日)

浪人になって家で勉強しても能率は上がらない。前途は心細い。陰鬱と焦慮が彼の心に覆いかぶさる。五月上旬に、葉は新設の台北帝大予科を受けるべく台北に立った。

《浪人長髪たるべけれど、台大予科を受けんがため、心ならずも坊主となれり》(日記、四月二十八日)

が、ここでも彼は失敗した。

台南一中の同窓に郭朝三(日本姓、賀来という人がいたが、葉は彼と相談して、再度日本に行くことにした。八年後に、郭氏の妹・郭淑姿^{かくしき}さんが葉の妻となるのだが、そのようなことは当時だれも予測していなかった。

五月二十八日、葉は《学もしならずんば死すとも帰らず》の決意を持って、再び台湾を離れた。郭朝三は少し遅れて出発した。

浪人一年、高校三年、大学三年、この七年間は、いかにしても故郷の地を踏むまいと、彼は悲壮な心持ちで日本に向かった。実際、彼が台湾に帰ったのは、日本敗戦の翌年、昭和二十一年で、この間五年、日本に留まっていたことになる。

先般、東京での不自由と不快が身に染みて、葉は京都で勉強することにした。ここの印象は悪くなかった。

《京はなかなか住みよい所。第一自然に近いのが何ともいえなく頼もしい。夕方、久しぶりの散歩。賀茂川をつたつての歩みは楽しい。夕風涼しく、川柳^{かわやなぎ}は風になびき、行き交う人は華やかなり》(日記、六月一日)

ところが、葉が入学した平安高等予備校は《インチキ学校》であった。彼は会費、授業料、本代、その他多くの費用をうんとしぼりとられ、ここに集まっている浪人の質も悪く、これでは来年は大丈夫だろうか、心細い限りであった。彼は一足遅れて東京に着いた郭朝三に呼ばれて上京した。

彼は夜汽車の中の様子を日記にこう書いている。

《午後七時四十四分発。超満員である。蒸すようでとても暑い。水兵さんや傷兵や兵隊さんに席とて譲る者なきは遺憾だった。見よ、傲慢なさまを!》

彼はまた汽車の中でこんな感想も書いている。

《やるんだ。英雄ヒットラー。見ろ、あと十年、我^{わが}はやる。……ほとんど立ち通して徹夜だ。意気天をつく》(七月一日)

東京に着いてからは、例のように住宅難にぶつかった。どれだけ足を棒にして下宿を探したとか。ある時は省線電車の線路ぎわの貧民長屋に住んで、夜な夜な列車の通るガタンゴットンに目を覚ますこともあった。

西大久保の市場を改造した所に引っ越したが、窓が小さく、空気は悪く、おまけに水を飲みに行けば、ポリスに調べられる。

《Lodging〔下宿〕を探しに出る。また、ポリスに止められる。さんざんだ》(日記、七月五日)

この七月一カ月で、彼は何回もポリスに身体検査された。戦前の警察は遠慮なしである。《ポリスに大分身体検査をやられたことは不愉快中の不愉快として特記すべきであろう》(日記、八月三十一日)

そのうちの一回は詳しく書いてある。

《夕方、張君の所に行つて語り、十一時ごろ、猛雨の中を帰りかけると、またポリスに呼び止められて身体検査。どうも近頃 *swelling*〔閩南語、不運の意〕続きである。面の皮も厚くなりそうだ。……

翌日朝刊を見ると、昨夜七時半、杉並区で女切り事件があり、犯人捜査中なので、俺がポリスに呼び止められたのも無理はない。犯人は二十四、五歳の男で、身長五尺三寸、傘、国民服に下駄履きとあつては、俺そっくりじゃ》(日記、七月二十一日と二十二日)

今年は六高に落ちたし、ポリスには止められるし、二、三日前には橋から落ちて怪我をするし、《どうも十九歳という年は厄年だ、自重せねば危ない》(日記、八月二十三日)

食の方は毎日食堂探し。外食券の手続きも大変である。

《午後、外食券の申請をす。自分の印、世帯主の印、隣組長の印、交番の印、町会の印、配給所の印など、何と煩わしきことよ》(日記、八月二十五日)

外食には金が掛かる。十月にはだいたい節約したのに五十円余り掛かった。彼の父も無理をして送金してくれているが、それでもきつい。

辛苦と奔走とが、肝心の受験勉強よりも時間が掛かるくらいであつたが、ここまで来たら、ひるむわけにはいかない、もう後に下がるにも下がれない。彼は東京府立一中の補習科に入つて猛勉強した。

受験校の選択で葉は揺れ動いた。選んだ学校は二十校以上に及び、昨日はA校だ、と決めたのに、今日はB校だ、とまた意を変える。こんな状態が受験願書提出寸前まで続いた。

旧制高校では、六高、二高、四高、八高、成蹊、浦和、旅順、富山、福岡、静岡、姫路など。その他に、京都帝大臨時医専、岡山医大医専、仙台医専などもあれば、東京高等師範や千葉薬専までもある。

昭和十六年には、葉にとって重要なことが何件か起きている。

葉は中国名を日本名に変えたのである。日本政府は「皇民化」の一策として、昭和十五年に改姓名規則を公布した。台湾人に日本式の姓名を使わせることである。

当時、この規則に反対した日本人もいた。祖先から頂いた貴い日本の姓名を卑賤な台湾人に与えるとは何ごとぞや、と言うのである。台湾人にも強烈な反対があった。祖先から頂いている貴い姓名を捨てるとは「背祖」(親不孝者)である、と言うのである。

この制度は半強制的に実施された。改姓しなくても命に関わることはなかったが、改姓した方が何かと有利であった。

葉は昭和十六年五月十五日に台湾で、《姓名変更願を出したが、書類が多すぎたまっついているとこのことで受け付けられなかった》(日記)

これから見ると、願いを出した人はかなりいたようである。彼は同月二十四日に再提出し、受理されている。同年九月十五日に、葉は東京で父から「改姓名許可通知あり」との便りを貰

っている。十九日に葉は新しい印鑑「葉山」を作り、二十五日に予備校と交番に姓名変更届を出した。葉の日本名は「葉山達雄」である。

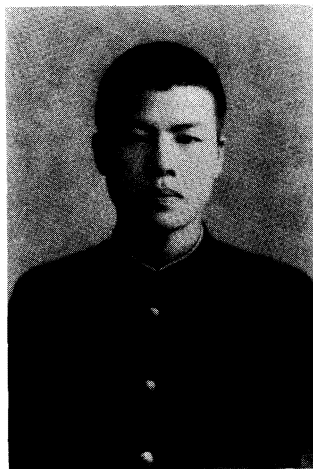
面白いことに台湾人が使った姓には「山」の字が多い。例えば、大山、徳山などである。台湾にはこういう言い伝えがある。台湾人はもともと中国大陆から渡ってきたもので、祖先の地を「唐山」(お山さん)と懐かしみを込めて呼んでいる。それで、「大山」「徳山」とは「大きいわが中国」「徳の備わっているわが中国」という意味で、「小さいお前ら日本」「徳の足らぬお前ら日本」と暗暗裏に見くびつているという。中国を愛していながら、改姓せざるを得なかった台湾人の心境が、この言い伝えに現れているのであろうか。

葉がなぜ改姓したのか、詳しいことは分からない。同化を信じていた彼からすると、改姓は自然の成り行きであったのだろう。

ところが、まさに日本に留学したこの時期に、彼の民族意識が目覚めてきたのである。これは改姓と矛盾する。当時の台湾人には、このような矛盾した心理を持っていた人が、少なからず存在していたのである。

「自叙伝」にはこう書かれている。

《このころ「昭和十六年の秋」、私は台湾の学生の最も多く住んでいる高円寺に住んでいたが、そこで偶然の機会に、中国の一留学生から民族意識を鼓吹された。その印象は深刻で、ために



浪人時代の葉盛吉，昭和17年8月

一時、高校の文科を受けようという気になった。民族意識の目覚めの出発であった。その日から私の心中の葛藤は止まなかった。

この事は彼にとっては衝撃的であった。

いかに民族意識を鼓吹されたかは、記録に残っていないが、彼の、これまで二十年近く歩いてきた道は、この中国人留学生の言

で否定されたのであった。これは、彼の従来の信念を否定するものであった。良き日本人になるようにと、あれだけ努力してきたのに、それは間違っていたのか。

俺は日本人なのか、中国人なのか、葉は苦悩の奈落に突き落とされた。二年後、二高に入った彼はこう書いている。

《浪人時代、さる人の言を聞いてより、俺の目標、希望は一時に失われたかの感があつた。

俺は今まで信じていたことを疑わずにはいらなかった。いや、むしろ今まで強く信じ、希望として戴いてきたことを否定せねばならなくなった。それから俺の生活は暗い疑いに明け、疑いに暮れた懊悩の連続だった。そして何もすることが嫌になり、ただ漠然と受験の道をたどり

つつ、その日その日を送った》手記、昭和十八年十月三十日

この過去の否定から、新しい信念の獲得までに、葉は四、五年もの歳月を要した。素直な人ほど悩むのである。彼は素直に皇民化の概念を受け入れた。それを素直に否定することは難事であった。

この民族問題は、浪人時代には心の底に秘されていた。というのは、この時期の現実問題は受験であつたからである。受験に合格して、その重荷が下ろされたときから、すなわち、二高に入ってから、民族問題は浮上してくるのである。

葉の二高の先輩・角田秀雄さんは東京府立一中で葉と同じ補習科にいたが、彼より一年早く二高に入った。角田さんの印象では、葉は受験勉強に没頭していた真面目な予備校生であつた。お互いに言葉交わしたことは余りなかったが、次の一件が今でも記憶に残っているという。予備校のある教師が自分の体験談として、中国人捕虜をいかにして虐殺したかの話をした。この時、角田さんの目が葉と合った。彼は真つ青になっていた。この悲しみと憤りの表情が角田さんの脳裏に刻まれて、今でも忘れられないそうである。

日本で接した日本人の中で良い印象を与えてくれた人々を、葉はこう記録していた。

《夕方、また下宿の小母さんのごちそうになり、長々と語った。こういう和やかな中にいると、とても自分が内地にいるなどという気は起こらない》(日記、昭和十六年十月九日)

《子供をおんぶした小母さんが傘の中に入れてくれるという珍異なことがあった》(日記、昭和十七年十一月十四日)

《東京へ来て三度目の愉快なことに出会った。昼食に行く途中、下駄の鼻緒が切れて困っていたところへ、よその小母さんが革の鼻緒をくれたことだ。有り難い》(日記、昭和十八年一月十九日)

時局は日々に厳しくなり、戦争はますます日本に不利になってきた。若い人の徴用が大々的に行われ、浪人の肩身が狭く感じられるようになった。東京の生活は日一日と心細く、荒涼たるものとなっていた。葉は郭朝三たちと日曜日によく和泉多摩川に会して、浪人の身を嘆じたり、泳いで鬱憤を晴らしたりしていた。

昭和十七年の春、葉は再び六高を受けたが、前の年と同じく一次試験には合格したものの、二次でまた落ちてしまった。予備校でも成績の良かった彼にしては、二年とも二次で失敗したとは、少しおかしいことである。

悲惨な浪人生活は二年目に入った。いずこも同じ秋の風で、郭朝三も失敗して「城北高等予備校」に通うことになった。ここは日本でもっとも権威ある予備校で合格率も良く、将来を約束されているような所である。葉もそこに入り、郭君と同じ下宿に移った。二階の下宿部屋は暗く、陰気で、日は入らず寒かった。ここで彼は浪人最後の冬を送ったのであった。

葉は六高に三回も挑むようなことはしなかった。昭和十八年の春、彼は二高理科を受験した。《朝、ゆつくり出発。試験場入場は八時五十分。その時、先輩の声援「城北蹴張れ」。数学、全部解いたが、他人も出来たらしい。歴史はあまりよく出来なかった。帰り落雪紛々たり》(日記、三月六日)

《物象「物理学、化学、鉱物学などを包括した教科の名称」、大体できた。国漢文、大したことなし。作文「わが母」。二高は受験生に親切でスチームが通っており、試験官一名に助手(女)一名なり》(日記、三月七日)

三月二十一日、仙台より「ゴウカク」の電報が届いた。

《この荒涼とした浪人の二階にほのかに、ほのぼのとした旭が一瞬だけでも射し込むようになった一九四三年の春に、私は幸いに二高合格の電報を手にすることができた》(自叙伝)

彼はこの半年、時折、郭朝三と一緒に市ヶ谷の八幡神社の境内を掃除していた。今日はもう最後のお参りだ。この境内で、彼は二年の浪人生活を清算し、人生の新たな首途^{めど}に立つ感激に浸った。

三月二十四日の日記には数行ではあるが、合格発表後の様子が生き生きと書かれている。

《正午、神保町に行き、白線帽を買い、ドイツ語の本を買う。やるんだと。今日より白線帽をかぶって歩く》

葉はこの年に同時に旅順工大予科と慶応医学部予科にも合格している。彼は言う。

《今年の入試は奇跡だらけだ。出来なくては入り、出来ては落ちる》(日記、三月二十日)

親友・郭朝三は一高に失敗し、本意にも物理学校に入った。その後、彼は海軍に入り、間もなくしてサイパン島で戦死した。台湾の遺族に渡されたのは、遺骨ではなく、白い小石十数個であった。

二高時代

入学後の苦悩

葉は二高の理科乙類(理乙)に入った。理乙ではドイツ語が第一外国語で、卒業後、帝国大学の医学部に入る者が大多数を占めていた。

植民地台湾の知識人には医学の道を選んだ人が多かった。なぜなら、文科を出て、官僚になっても、植民地人には出世の道が開けていなかったからである。台湾人の勅任官は皆無に等しく、奏任官すら数えるほどしかいなかった。弁護士にはなれたが、一流会社の就職は無理であった。

医者になって開業すれば、日本統治者の鼻息をうかがわずに、一生暮らしていける。一時、文科か理科かに迷った葉も、最後に理科を選んだので、理乙に入ったのは自然の成り行きであった。

二高では一年生は全寮制で、下宿や自宅からの通学は許されていなかった。どの寮に入るかは、課外活動の種別によって決められていて、当時、明善寮の一寮は課外でグライダー訓練をやる寮生が集まっていた。中学で既に四年もグライダーに乗っていた葉は、一寮に入った。

他の新入生と違って、葉には高校入学の欣喜と感激はなかった。それどころか、入学後の半年の生活を彼はこう書いている。

《世に生を享けて二十年、俺は今ほど生活に対する息詰まりを感じたことはない。……俺に



二高昭和20年卒理科6組のクラス会、前列中央がクラス担任の
平野孝一先生、後列左から5人目が葉盛吉、前列左端が私

とつては毎日毎日の生活が暗い》(手記、昭和十八年八月二十三日)

戦前は、旧制中学の四年修了で、高校受験の資格があった。それで、五年卒業までに二年間、受験勉強をしたことになる。葉にはさらに二年の浪人生活がこれに加わり、前後四年もの歳月を重ねて、やっと白線帽を手に入れた。それなのに、なぜ歓喜の情が沸き上がってこないのだろうか。彼は言う。

《あまり払った努力が大に過ぎたために、高校入学が期待はずれの明けてびっくり失望のものとなって目に映じたのであろう。……

高校入学に四年の大なる代価を払った自分には、年も人生を深く考えざるを得ない時期に達し、自分の周囲についても多少は知り、境涯の恵まれざる、更に前途に茨の道の多きを

も見ることの出来た今となつては、単なる高校入学の喜びぐらいに陶醉することを許さなかつた》(手記、昭和十八年十一月十一日)

もちろん、課外のグライダー訓練に興味がなかったのも原因の一つであろう。二級滑空士の彼が初級のグライダーの索引きを、放課後、毎回数時間やられるのは、確かに無意味で時間の浪費であつた。彼は航空班に入つて、二高のスタートを誤つたと後悔した。葉はフランス語研究会や教練の剣術講習会に参加した。土曜日の動物の実験が夕方まで伸びて、グライダー訓練がサボれたのも嬉しかつた。

しかし、葉の当時の苦悩と沈鬱は、これで解消されたものではなかつた。なぜなら、彼の煩悶は、ただ単に寮生活に順応できないという、そんな単純なものではなかつたのだ。彼が悩んでいたのは、家庭愛の欠乏と民族感情の縛れであつた。

彼のこの悩みは、実は台湾にいた十数年間と日本に来てからの二年間に、心の奥底に潜められていたのだ。これが、二高に入つて表面化したのである。高校入学という目的が達せられた。それが家庭生活の寂しさを誘い出し、堰を切つたように迫ってきたのである。

《目標目指して突き進むときは、外的生活に夢中になるが、目標に達すると内的生活の寂しさに耐えられないものである》(手記、昭和十八年九月十二日)

葉は母性愛、父性愛、兄弟愛、親類愛——一切合切の家庭的な愛に飢えていたのだ。

この年の夏休みに、彼は仙台市の寮生・藤本達郎君の家に遊びに行つて、友の母と姉から歓待された。二日間泊まり、立派な寝具の中に寝て、和やかな生活をした。寮に帰り、裸で蚊の来襲を受けて寝られぬにつけて、寂しさはかえって切なるものになる。

《二、三日間は友の姉の顔がちらついて困った。自分の求むるものは何か。それはよく分からないが、空虚を満たすに何か必要であることは事実だ。自分を思ってくれる肉親に乏しいことは確かに苦痛である》(手記、昭和十八年九月十二日)

その後、彼は寮生・鈴木英世君を清水市に訪れたが、その時の印象をこう回顧している。

《彼の母の人なつこい、朗らかさは印象深く、嬉しかった。家庭的な暖さに欠けた私には、それがどれほど羨ましかったことか。私の心は母を求めていたのである》(自叙伝)

母性愛の欠如に悶えていた彼に、もう一つの悩みが押し掛かってきた。民族問題である。前述のように、浪人時代の昭和十六年の秋に、葉は偶然の機会に東京の高円寺で、ある中国人留学生から民族意識を鼓吹された。

《この民族的なことが、自分の大きな苦悩となつたのは二年前の秋だった。あれ以来、自分はどれだけこの問題に苦しんで来たか分からない。そして今でも現に苦しんでいる。

一切の快活と一切の感激とは、かかる二重の苦悶の中に日々薄らいで行くを感じずにおられない。

俺は家庭的に淋しいから、他人とだべつても、楽しそうに遊ぶにしても、何となくごちなのは確かであるが、家庭の問題とともに、この民族的な事が重なって、いよいよ自分を孤独の谷に突き落として行くことを否定することは出来ない。されば、過去一学期の高校生活は苦痛だった》(手記、昭和十八年九月十二日)

彼は中学時代を回顧して、慙愧の念に打たれている。あの時期は一途に同化の道をたどり、日本的なもののみに心を引かれて、台湾的なものを無視していた。この道は誤りであることに気がついた。

それでは今後どうすべきなのであろうか。

《「俺は」一方に忠実ならんとして、一方に不忠実だった。なぜ俺は両方の生活を共にやつて行けなかったのであろうか。ただただ済まない》(手記、昭和十八年九月二十六日)

これからは日本と台湾の双方に対して、共に忠実なる道を歩むことだ。両立の道を歩むのだ。これは過去から一歩前進したことを意味する。かつて彼は同化を是認していた。同化は一方の肯定と一方の否定によって初めて実現される。今や、彼は日本と台湾を同等の地位に置こうとしたのである。日本と台湾とを同時に肯定する道はないのか。「良き日本人」になれると同時

に「良き台湾人」になれる可能性はないのか。

彼はまず過去を反省した。この間違った道を歩んできたのは、植民地という周囲の事情と社会の事情があつたとはいえ、やはり自分の不徳がそうしからしめたのだ。

《中学時代を思えば、全く両親に濟まない。……素直になれ。恩に感じることなくてはならぬ。俺は独りで生まれてきたものではない……一方を不体裁だとさげすむことは断じていけない》(同上)

この両立の道を、葉はこの時点で「天地の公道」と言っていた。この抽象的な表現は一体何を意味しているのか、なかなかつかまえていく。恐らく彼自身もはつきりしていなかったと思う。

葉の思考は、このようにとにかく抽象的になる。ドイツ語で *Gedankengang* といわれているが、葉はドイツ人のように論理の筋道を次々に立てて、ものを深く考えていく傾向がある。ここに彼の強みと弱みがある。

強みは思索の論理性にある。推理の力が相当強い。後で見られるように、彼のユダヤ問題に対する批判は、非常に論理的である。

弱みも顕著である。例えば、民族問題を論ずるに、彼はほとんど社会科学、とくに経済学、政治学を参考にしないままに、ただ単に哲学的思考で組み立てていく。それ故に、彼の思想の

進歩は緩慢で、基盤も弱い。しかも、一時は神がかり的な、靈魂学的なものの虜(とりこ)になってしまった。

ところで、この「天地の公道」、すなわち両立の道を歩むには苦痛が伴う、と彼も予測していた。この道には二重思考と二重生活が付き纏う。

《二重生活は苦しい。……苦しさを耐えて両方の生活を両立させねばならぬ。それには忍耐が肝要である。一方の生活を見捨て、不要なものや唾棄するは卑怯な意地地のない者のすることである。……天地の公道、いや大道は踏んで少しも苦痛のないものではない。……己を苦しめ、苦しめ、苦しみ抜かねばならぬ。人を責めず、



南郷村でアルバイト、右より2人目が葉盛吉、昭和18年10月12日

天を恨まず、ただ己の足らざるを思え》(同上)

ここに葉の苦行僧に似た姿が見える。この態度は彼の死まで続く。
両立に苦しむ二重生活で、葉の心が晴れるはずがない。彼は二高の一学期をこう回顧している。

《されば、過去一学期の高校生活は苦痛だった。感激に生きる高校生活は自分の耐え得るところではなかった。信に生きる雄大剛健の明善寮生活は、自分にとっては重荷だった。

独り立つ。自然、自分はそうならざるを得なくなった。勿論、寮生活の間には感激も喜びも全然ないではなかったが、ない感激、ない喜びを無理につくろう苦痛は、遥かに遥かに大であった。表面は笑って、心の中は悶々の情で鬱積されている》(手記、昭和十八年九月十二日)

彼のこの沈鬱に、寮の先輩と同輩は関心を寄せていた。そして彼も努めて快活になろうとしていた。

《昨日の「グライダー」の訓練で、旧寮生の阿部「政次」さんに年寄り臭いと言われた。もっとフライトを出さねばならぬ》(手記、昭和十八年十月二十九日)

彼の手記にはこんな事も記載されている。

《夜、布団にもぐり、中目^{なかめ}「私のこと」とrace「人種、民族」の問題につき語る。俺は彼からも注意されたように老衰の感があるらしい。早く目標を見出して進むに限る》(手記、昭和十八年

十一月十五日)

前述の角田秀雄さんは、一寮で葉の先輩であった。角田さんの学徒出陣の前夜に、葉は彼といろいろ話をして、非常に感激させられた。

《事実とか、現実とか、或いは未来の幾多の難事とか、悩みとか、自分に暗い陰を投げて、生活を明るく朗らかにやっていかねばならぬ。

角田秀雄兄が常に微笑を持ってやれ、と言ってくれた言葉は実によく自分の性格の弱点を見抜いてくれた有り難い言葉である。俺が今日まで自ら意識しなかったのかも知れないが、動作、言語ににじみ出る明るさの少なきを見て、そう言ってくれたのであろう。

有り難い言葉だ。共に府立一中の補習科に学んだ因縁からばかりではない》(手記、昭和十八年十一月十一日)

この悩みを和らげる術を、時には彼は天然への陶醉と往時への回顧とに見出した。宮城の萩は秋にうす紫の花を咲かせる。この花が二高の校庭に、東北の野山に咲き乱れるころは、吹く風肌寒き初秋となる。自然が、山川草木が、夏の鮮やかな緑から、落ち着いた寂びた緑色に掩われる。そして、澄み切った高い秋空を雲がすうすう風に運ばれ、露を宿した草葉の陰に、こおろぎがコロコロ鳴くころとなる。

葉はこの静寂の自然に独り浸り、限らない懐旧の情に耽る。故郷・台湾での幼きころの思い出は、彼の心を躍らせる。時間は一切を美化するのである。

《懐古の情に馳せる時ほど快適になり、ファイトの出る時はない。

どんなに蒸し暑くて授業中眠たい時、昔の、いや半年前ぐらいの一寸した記事を書き留めて置いた日記帳を見ても、非常に懐かしい情で一杯なり、眠たさもふっ飛んでしまう。

昔をしのぶと胸が躍る》(手記、昭和十八年九月十三日)

この時期の日記と手記には、往時の思い出が沢山書かれている。台湾の正月、親族や親友、郷里の山川、台南の路地や横町、庭に植えられていたナツメの木、父と夜道を歩みながら見た夏の星——みな懐かしい思い出ばかりである。

幸いにして、このような懐古は、彼の意気を消沈させたのではなく、かえって未来に対する勇気を奮い起こさせたのであった。彼は向上心に富み、たゆまず前進しないと生きていけない性格の持ち主である。故郷の懐古は、彼に「良き日本人」になるのみならず、「良き台湾人」にもなる勇気を与えたのである。

昭和十八年の十一月、慶応大学塾長小泉信三先生が学徒出陣のはなむけの言葉でこう言っておられた。

「昔の人は、一度戦場に出れば生還を期せず、親兄弟もすべてを忘れて戦う、と言った。しかし、私は諸君に、戦陣の時折、父母弟妹のことを思い出してほしいと望む。そして何よりも諸君の母校が諸君を見守っていることを忘れてくれるな。懐郷の情は人の心を一層強く、清くするからである」と。

『朝日新聞』に載ったこの送辞を読んで、葉は感激した。

《塾長の言、僕の共鳴するところが多い。

最後の一句など、僕の常日頃思っている気持ちを言い尽くしてくれている。確かに懐郷懐旧の情は人の心を奮い立たせる》(手記、昭和十八年十二月一日)

さて、彼が目指して歩み行こうとした日台両立の「天地の公道」とは何であろうか。「八紘一字」の「理想」とつながっていくのであろうか。

民族の文化と伝統

明善寮一寮の一年生の弁論大会が、昭和十八年の十一月十九日と二十四日に開かれた。

数日後、葉は例の健筆で、この二回の大会を詳細に記述した。弁論の内容や旧寮生二年生と三年生の批評など、今読み返してみると、四十八年前の雰囲気が彷彿としてくる。日本敗戦

の二年前に、二高の寮生が、一体何を考えていたか、この記述は多くのものを残してくれている。弁論大会のテーマは自由選択であった。どんな人がどんなテーマを選んだか、これもなかなか興味深い。

一寮には、植民地から来た寮生が三人いた。台湾出身の葉と私、それに朝鮮人の国方元鳳君であるが、この三人は例外なく政治問題をテーマに選び、民族問題に触れていた。三人の植民地の学生が、自分の心の奥底で、始終この問題でいかに悩んでいたか、その一端がここに窺われる。このことは日本人寮生には分かり得なかったことであろう。

日本人学生が選んだのは、現実の政治から遊離したテーマばかりであった。仏教、日本文化、科学、読書、芸術、風俗、寮生活、アルバイト（農村勤労奉仕）などである。

時まさに皇道大発揚の昭和十八年であるのに、「大和魂」「八紘一字」「神ながらの道」「ユダヤ問題」を論ずる人は一人もいなかった。一寮の伝統がここにも顔を出している。

私は「東洋の悲劇」という題目で、「支那事変」の原因を探ろうとした。「日本は侵略者である」と言いたかったのであるが、私にはその勇気がなく、過去の事実を羅列するに止まった。葉は手記の中で私の弁論をこう批判していた。

《なかなか良くまとまっていたものの、本を写したというだけで、主観というものが、ほと



青葉城へ夜行軍、後列右より2人目が葉盛吉、昭和18年

んど入っていないかったので、迫力に乏しかった（手記、昭和十八年十一月十九日）

この批判は当たっている。が、葉の言うように、もっと迫力と深みがあったら、私の弁論は反日演説となっていたに違いない。

国方君のテーマは「意識について、苦悩の意識」であった。彼は哲学的な用語を使っていたが、実はやはり政治を語っていた。彼の苦悩はほかでもない、朝鮮民族の苦悩なのである。葉の国方君に対する批評はこうである。

《なかなか良いと思った。彼の境遇、体験より出たものである》（同上、二十四日）

京城（ソウル）公立中学校出身の旧寮生・石森善太郎さんは、国方君の気持ちがよく分かっていたのであろう。「意識という抽象的問題を取

り扱いながら、結局、自己の事を言っているところが良い」と評価した。

葉のテーマは「伝統ということについて」である。彼はその内容をこう記録している。

《俺は原稿なしでやった。何となく、自己の体験のようなものを言ってしまった。考え考えでは、ぼつりぼつり言つて、よく纏まらなかった。

要するに、俺の言いたい事は、自己の伝統に対する認識を正しく持つて、これに対する尊敬の念を深めると同時に、他の伝統をも尊重するというような寛大な態度がなくてはならぬ、と言った》(同上、十九日)

彼は抽象的に語つたが、実は日本の統治者が台湾の伝統を踏みにじっていることを批判したのであった。

生活水準が平均的に低い被支配民族の習慣や宗教は、支配民族によつて陋習や原始宗教として否定される。ところが、習慣、文化には絶対的なものはなく、すべて相対的であると、葉は見なす。支配民族の立場から見ると、時代遅れに見えるかもしれないが、被支配民族の立場に立てば、自分の習慣、文化は貴いものである。

賢明な統治者は異民族の習慣、伝統、文化を尊敬すべきで、寛容な態度で他民族に接しなければならぬ。さもなくば、民族間の融和は期待できず、「大東亜共栄圏」の建設云々と言っ

たところで、それは美辞麗句のスローガン以外の何物でもなからう。

以上の見解を、葉は手記の別の箇所でこう書いている。

《物を好き嫌うのは、相対的なものであり、感情的なものである。……

いかなる民族も、どんなに低級な、非科学的な、非衛生的な民族においても、彼らの故郷、彼らの習慣は、彼らにとっては絶対のものである。

されば、彼らが他のより高き文化文明に接したとき、一時はそれに陶醉することがあつても、やがては年月のたつとともに、自分の郷里、昔の生活、習慣が恋しくなるものである。

人が物を求め、慕い、恋う程度は、その物自体の質とか価値でなくして、その人のその物に有する関係、言葉を変えて言えば、情の如何によるのである。

まことに、感情は視触をも、聴触をも、そして味触をも超越する場合が多い》(昭和十八年九月十三日)

彼は植民地統治者に対してこう言っている。

《己と違うもの、いまだ必ずしも悪しきものにあらざることを知るべきである》(手記、昭和十八年十一月十一日)

明治の初期にも、一時的ではあるが、西洋にその名も実もない神社とか国学とかいうものが、一も二もなく、旧来の陋習の見本のごとくに見なされていた。同じく、日本の植民地統治者は

日本にない台湾の廟を取り壊し、台湾の旧来の習慣風俗を迷信深きものとして排斥してきた。
《違ったものを見るには、異なった尺度を用い、異なった概念をもって眺めなくてはならぬことを痛感する》(手記、昭和十八年十二月二十六日)

昭和十八年前後の葉のこの見解は、彼がまたも一步前進したことを示す。日本に来る前は《日本的になることが進歩とか、開けるとか、を意味する》(同上)と彼は信じていたのだった。

もちろん、彼は植民地統治そのものに反対しているのではない。その統治の是認を前提として、ものを考えているのである。彼は単に日本の統治者に勧告しているにすぎない。こうやれば、もつとうまく統治できるのだ、と忠言しているにすぎない。この時点では、彼には、まだコロニアリズム否定の思想は芽生えていなかったのである。

彼は寛容主義者であり、博愛主義者である。すべての人に思いやりを持って、と彼は主張する。
《真に裸になれとは、寮生活のみならず、民族についてもいえることと思う。

要するに、どんなことをしても、どんな個性を発揮しても、互いに理解してもらえらるようにならなくてはならぬ。寛大な気持ち、思いやりの気持ち、何時、如何なところでも、必

要とせられる所以である》(手記、昭和十八年十一月二十三日)

彼の寛容性、抱擁力については、また後で何度も語ることになるであろう。

この寛容性に立脚して、彼はこう書いている。

《一方をさげすんで、一方にくみする態度を取らず、両方を融和する、優しい気持ちを持ちたい》(手記、昭和十八年十二月二十六日)

《真に大なる同化力を有する文化は、他文化の長を受け容れて共に発展すること、あたかも大河が一切の小流を合流して流れ、それに流れの方向を与えることと同様である》(手記、昭和十八年十二月十九日)

この方針でやっていけば、「大東亜共栄圏」内の諸民族の問題は、よりたやすく解決できる、と彼はこの時点では考えていた。

同郷人

私は葉と同じく、将来医学を学ぶために、二高の理乙に入った。彼とは同じクラスで、寮も一緒であった。

入寮後間もなく、私は彼が台湾出身であることを知った。ところが、葉は半年ほどしてから、やっと私が彼と同郷であることが分かった。それには訳がある、私が自分の出身を隠していた

本人で通し、自分の台湾籍を口にせず、日本人の父、台湾人の母というハーフになり変わったのである。これは確かに便宜主義的な振る舞いであった。

私は大連三中出身であるので、葉も最初、私を旧満州から来た日本人学生と思っていた。後になって、私は彼に子細を話したが、彼は驚きの目を見張った。葉はこの経過をも非常に詳しく書き残している。

《異郷で同じ血を引く同郷の者に会うことは、限りなく力強く、嬉しいことである。入寮後、間もないころ、家が満州のチチハルという所にある中目という人が、隣りの一室にいた。素性も良く知らないから、大して語り合うところなかったが、たまたまグライダーの訓練の帰り、語り合う機会を得て、彼の母が台湾の台北の人で、彼の母は死ぬ。小学校五年のころまで、台北にいて、彼の父は本籍が石巻にあることを知った。》

その後、自分は彼と石巻に遊んだり、共に「寺廟神の昇天」について論じたりして、台湾の問題につき語るところがあったが、それは混血児たる彼を飽くまで台湾に関する心からなる理解者位に思っていることであって、お互いが同郷者であるという点に発するものではなかった。

越えて、二学期のある日、台北出身の大山「哲夫」君の家の二階で語りしところ、彼の父も台湾の出身なることを知り得て、何とも言えない感に打たれたのであった。

同じ血だという気持ちだが、俺をして彼の姿を今更のごとく、鋭く見つめさせた。



二高明善寮一寮生が松島付近の東名に遊ぶ、
後列左端が葉盛吉、前列左端が私、昭和18年5月2日

からだ。

私の父も母も台湾人であるが、父は一九三四（昭和九年）年に、石巻の中目家の養子となり、戸籍を台湾から日本に移した。日本人になったわけである。

ところが、私の将来については、父はこう希望していた「学成りたらば大陸に赴き、中国の外交官になるべし」と。父はまたこう言っていた「俺の一生の楽しみはただ一つ——将来お前が中国の外交官になって洋行するとき、お前の抱持ちになることだ」と。

こういう未来を予想していたためであろうか、父は自分の籍だけを日本に移し、私と母の戸籍をそのまま台湾に残した。

戸籍はどうであれ、私は父の実子である。

父が石巻の人になったので、私は二高では日

彼の過去の家庭生活とか、現状についての詳しい話は知るを得なかったが、彼も同郷者として現われ来たことは実に意外なことであった。

それ以来、彼と共にいろいろの問題を考えてみた。彼が確信ある目標を目指して進むのに反し、俺が目標を失ってフアイトがないことをも話してやった。俺が庶務委員に選挙されて、内心甚だ苦しみものがあったとき、彼は寮を道場と思って、一切の私的感情を忘れてやってくれと言ってくれた。

彼は家庭生活に恵まれないようだとはいえ、人に接するに常に明るく朗らかだった。これは僕のもっとも尊敬する点である。彼は良く本を読んで、物事も相当深く考えているが、自分の考えに対する強引なところが少し欠けているように思われる。

実際、寮生活に感激とフアイトを持たなかった自分は、彼によって幾分啓発されるところがあったと信じている（手記、昭和十八年十一月十一日）

彼と私の交友はここから始まった。二人は夜の明けるをも知らずに、人生を語り、天下国家を論じ、国を憂えては痛飲し、友の恋物語を聴くに時間をも惜しまなかった。もちろん、我々が語ったのは主に政治と思想であった。被支配民族の知識人として、二人は同じ悩みを持っていた。

同化の問題、植民地文化の問題、天皇制の問題、帝国主義侵略の問題、ユダヤ問題、神道の問題、共產主義の問題、日本の敗戦、中国の将来、寮生活、女性問題など、何一つとして語らざるものはなかった。

しかし、葉と私はいろいろな面で違っていた。大筋に同じような結論に達するまでには、時には真つ向から相手に反対した。鋭い対立から発する激論は、我々二人の間では日常的なことであった。彼は日記にこう書いている。

《中目と話を共にすると必ず論争となる》（手記、昭和十九年五月二十二日）

《中目と小生、大激論、ぐるぐる回転してきりなし》（日記、昭和十八年八月十五日）

このような論争は二人の思想の発展に大いに役立った。「自叙伝」ではこう記されている。《二高の生活に忘れられない人が二人いる。一人は日本人の鈴木「英世」というチビで、それでいて、良く文学を読み、人生に悩む清水のひと、中目（楊）という台湾の者。後者はその後ずつと台湾に帰るまで交友を続け、肝胆相照らす仲で、私の思想にもっとも影響するところが多かった》

これは葉の言であるが、私からも同じことが言える——「私の学生時代に私の思想にもっとも影響するところが多かったのは葉盛吉であった」と。

こんなに激論を交わしても、葉は気持ちを悪くするどころか、私のような「論敵」に感謝し

ていたのである。これも葉の長所の一つである。

私の交友が始まって数カ月後の昭和十九年一月四日にこう書いている。

《中目は俺にとつては良き相手だ。彼は個人の弱さがある。しかし、彼は相当本を読んでいるし、見る所もなかなか鋭い。彼とぶつつかる所が多くあるが、その度に何か得るのである。

俺は体験より割り出した議論をもつてすれば、彼は読書によつて得たところをもつて俺に向かう。なかなか鋭い。

俺は彼との衝突が、俺を常に高きに引き上げて行くように感ずる。

自分の言うことを他人が感心して聞いてくれ、そして、自分はそれで満足しているようでは何時までたつても進歩はない。常に自分を強く打ち叩く者のいることは有り難いことである。

自分の意見と反対の意見のあることを希望す。にっちもさっちもならぬまで叩きのめされなくてはならぬ》(手記)

戦時下ではあったが、明善寮には確かにリベラルな伝統が残されていた、特に一寮はそうであった。ところが、それにも限界があった。何でも喋つてよいと言っても、「非国民的な」言論は差し控える方がよかつた。これはもう明善寮の問題ではなく、当時の日本全体を包む雰囲気の問題であつた。

葉は「両立」の道を探ろうと努めていたが、この道も平坦なものではない。探索の過程で、彼は相談相手が欲しがつた。ところが、「良き日本人」と同時に「良き台湾人」になろう、という考えを日本人寮生に理解してもらうのはたやすいことではなかつた。

ある時、葉は勇気を奮い起こして、鈴木英世君にそれとなく、自分の民族の悩みを語つた。文学問題や人生問題で話し相手になり得た鈴木君も、こと民族問題となると、葉を理解することはできなかつた。無理もない、支配民族の一員である鈴木君は、葉のような被支配民族の悩みを体験してこなかつたからだ。葉は書いている。

《鈴木にいまだ誰にも語らざる己が境遇の一端を語つたのであるが、結局後に残されたものは、空虚に満ちた淋しさであり、真相は彼も信ずることが出来ぬものであつた。

ともかくも自分は今日まで最も苦にしてきた秘密を打ち明けてみたものの、かかる問題は寮生活を超越しているのではないか、と今でも思っている。

真に孤独だ、と最近強く感じている。俺の気持ちを皆分かつてくれないのが当然であつて、分かつてくれるはずもないのである。

温室に育つた者が、何で狂乱怒濤に咲く草の苦を知り得よう》(手記、昭和十九年五月十二日)

葉が同郷の私を友として求めたのは、自然の成り行きであつた。私も彼を求めていた。彼の、

この民族の苦痛を打ち明け得る相手は、明善寮には私しかなかった。私の、この民族の苦痛を打ち明け得る相手も、彼しかなかった。

葉はこう書いている。

《中目なる友を得て、だべりしことも多かりき。これは我が枯れたる心に一脈の生気を与えたり》(手記、昭和十八年十二月二十五日)

私も全く同様であった。

一寮の庶務幹事となる

葉は一九四三(昭和十八)年十月二十六日に明善寮一寮の庶務幹事に選ばれた。

旧制高校の学生寮には自治の伝統があり、学校は寮務に干渉することはなかった。

今回選ばれた一寮の幹事は、総務幹事の阿部政次さん(二年生)、庶務幹事の葉山達雄君(二年生)と会計幹事の和賀井敏夫君(一年生)であった。

葉は幹事を辞退する積もりでいた。彼はこう思っていた。幹事はまず寮生活に感激がないといけない。が、自分にはそれがない。人の先頭に立つのだから、積極性もないといけない。が、自分は消極的である。明善寮の生活に対する絶対の自信がないといけない。が、自分は疑いと悩みを持っている。二重の人格を持ってやっていくことは、寮の神聖に対する冒瀆である、と。

彼は再び植民地人としての過去を振り返った。

《我が過去、幼きころから今日までの生活は頭上に重い荷物を載せた生活だ。先天的に宿命的に俺らは伸びられないようになっていく》(手記、昭和十八年十月三十日)

葉には民族と家庭の悩みが、常にのしかかっている。

《いろいろの問題があるが、俺には感激が沸かないのが、もつとも心苦しい点だ。俺には悩みが二つある。疑いを持っている。そのために感激に疑いがさす。確信に疑いがさす。物事に真剣になれない》(同上)



教練宿営のため王城寺廠舎に向け出発、
中央手前が葉盛吉、昭和18年10月18日

ところが、彼は先輩の寮生からも、新寮生からも最適任者として推薦されたのである。そして、一番多い二十六票の得票で当選した。

私も彼に一票を投じ、投票が終わったその晩に、彼に気合いを入れた。選挙終了後四日目に彼はこう書いていた。

《俺はこの職を辞そうと思った。しかし、中目君は一切の疑いと悩みは別物だ、二高

を、明善寮を愛する気持ちだけでやって行けばよい、寮は我々の修養の道場だ、道場だと思っ
てやってくれ、と言ってくれた》(手記、昭和十八年十月三十日)

私は、同じく植民地出身の彼が幹事になったのが、非常に嬉しかったし、他人ごとながらも、
誇りにも思えた。

先輩と新寮生の激励を受けて、葉はまた一歩進んだ。彼は幹事就任後にこう書いている。

《道場だ。俺の道場だ。ただ努めるのみ。一切を忘れてやるのだ。道場だから》(同上)

彼の決心はだんだん固くなっていく。一カ月過ぎると、彼は断固として寮のために奮進しよ
うとする。

《寮のために自己を犠牲にすることを何が故に躊躇するのか。

物質的、利己的欲にとらわれるな。常に正しい道を正しく歩め。たとえ、苦しくても、それ
は天の我を長じてくれるものと甘受するだけではなく、感謝して受けよ》(手記、昭和十八年十
一月十七日)

ところで、彼は民族の悩みをどう解決していこうとしたのであろうか。

民族問題から逃避——これが彼の最初に取った態度であった。そして、逃避が不可能と見た
彼は、その後暫くして、「八紘一字」の「大理想」の中に民族問題の解決を求めようとした。

この過程は約一年続く。翌年(昭和十九年)の夏ごろまでは、この大理想の追求に、彼は全魂を
打ち込んだのであった。ついに彼は「神ながらの道」にまで入り、そしてユダヤ問題に頭を突
っ込むようになったのである。

これは「良き日本人」になる道であった。彼の言う「良き台湾人」の道は第二次的なものとな
った。いや、消え失せたかのようにも見えた。「両立の道」はついに探し出し得たのであろうか。
もちろん、彼の思想と感情は複雑で、矛盾に満ちたものであった。彼が一步一步「八紘一
字」の思想に足を踏み入れたときにも、彼は重苦しい過去を忘れることはできなかった。

ところで、二高明善寮のリベラリズムの伝統は、皇道大高揚の昭和十八年に、果たしてどれ
ぐらい残されていたのであろうか。寮では、何でも言える、何でもやれる、突飛な事をして
よいのだ、と言われていたが、それには限界がないのであろうか。もしあるとすれば、限界線
はどこにあるのか。この問題に対して、葉はもちろん良く知っていた。彼にとつての限界線は
やはり民族問題だったのだ。

庶務幹事になってから一カ月して、彼はある日、旧寮生の石森さんと語った。

《石森さんと突飛な事は限界あることについて語り、自分は寮に対して、本当に自分の本心
を打ち明け得るほどに寮に信を置くことは、今まででできなかったことを述べ、話があまりに抽

象的に過ぎたので、石森さんを理解せしめることができなかった》(手記、昭和十八年十一月十七日)

この抽象的な言葉を、彼は自分の手記ではつきり言っている。

《この「race」人種、民族の問題はやはり止めた方がよいと思う。明善寮の抱擁性にはまだ信頼が置けないから。

どんな突飛な事をやっても、それが善なる限り受け入れるのが明善寮だ、と鈴木秀昭さん「二寮の先輩」は言ったが、その突飛な事にも自ずからなる限界があると思われる。

してみれば、この限界外にあると思われる race の問題にはやはり触れぬ方がよいとも思われる。しかし、この問題を除いては、俺に力を入れ込め得る問題はない。他のことには熱中できそうもない》(手記、昭和十八年十一月十六日)

ここで彼は民族問題に力を入れると言っているが、実際にはこの問題から後退したのである。ある意味では中学時代に逆戻りした。しかし、この後退には彼自身の理論付けがあった。これが中学時代と違う点である。

この「回帰」を彼も認めている。

《中学卒業のころの純なひたむきなころに帰れ。余り race の偏見にとらわれて、自己を狭く、小さくしてしまうな。もっと腹を大きく持たねばならぬ。……「二高は腹を作る所であ

る」の訓、夢忘るなかれ》(手記、昭和十八年十一月七日)

特別志願兵

昭和十八年十一月に、寮の先輩・角田さんが学徒出陣で学校から離れることになった。その数日前に、葉は盛岡に台南一中の同窓・沈君を訪ねて行ったが、彼はそこでリング「紅玉」を三貫(約十一キロ)も買って、はるばる仙台に持って帰ってきた。当時、リングはもう容易に手に入らぬものになっていた。彼は角田さんの壮行会に使うために持ち帰ったのである。しかも途中で東北本線の鹿島台で下車して、雨を冒して南郷村に寄ってから寮に戻ったのだった。ありふれた、ささいな事のように見えるが、ここにも葉の情が見られる。

当時、台湾人に対しては、まだ徴兵制度がしかれていなかったが、陸軍は昭和十七年、海軍は昭和十八年から、台湾特別志願兵制度を実施した。葉はこの特別志願兵で戦場に征^レこうとしたのである。

《ああ、角田兄は征く。そして俺も近い中、検査を受け、志願するから、或いは案外早く征けるかもしれない。

だが現在の俺は一寮の副委員「庶務幹事」だ。何となく責任の重大を胸にひしひしと感ずる。この瞬間、一切の私を捨てて進まんと思う》(手記、昭和十八年十一月十三日)

彼の特別志願は一時の衝動からきたものではない。

十一月十五日午前七時に、二高生二十七名の出陣壮行式が二高の講堂で挙行されたが、その日の午後、葉は教練教官の渡辺源佐衛門中尉を訪ね、特別志願兵のことを相談している。

この年の末になると、彼の志願はもっと具体化してくる。彼は十二月二十七日にこの一年を回顧しているが、その中にこういう箇所がある。

《俺は今、予備学生となって海軍に入りたい気持ちになった。ただ、自分は第一線に出て本当に戦争というものの躍動する姿に触れたいのだ》(手記)

この意思を彼は実行に移そうとしている。翌年の三月二十二日に、彼は台湾にいる父に航空便で、海軍予備学生出願の書類を送っている。

歴史の激流が世界大戦という形をとって、目の前で奔騰している。葉は静かな学園で勉強しておれないのだ。ましてや、戦局は日に日に急を告げてきた。

《現下の情勢は、我々の心を駆って雄大、壮大の戦場に向かわしめる》
と昭和十九年一月三日の手記に書いている。

当時、出陣した学徒の心境はさまざまであろうが、葉の胸中には国家と運命を共にするという真摯にして、また熱烈なる気持ちが溢れていたのである。「良き日本人」の葉の一面がここにはつきり現れている。

ところが、彼自身も、自分のこの心境に不純なところがないかと反省している。

《Raceの問題に悩み、本当の歴史の流れを見たいために戦地に行きたいということは、精神的悩みに耐えかねての一種の妥協かも知れない。

しかし、精神的苦痛は肉体的苦痛よりも激しいことを思えば、戦地に行きたいことは一種の妥協かもしれない。しかし、俺はこういう道を取るべきことを、種々の意味から必要なるものと確信す》(手記、昭和十八年十一月十六日)

情愛の欠乏も彼を駆って、戦場に思いを走らせたのかと思う。昭和十八年九月十二日の手記にこう書いている。

《戦地に行きたい。本当に自分はそう思った。戦死しても本望である。

戦傷すれば、病院に見舞いにくてくれる人もあるだろうから嬉しい。人々に思われ、惜しまれつつ、毎日毎日遠い戦場に多くの人々が落星のごとく散り行くと、自分のように惜しまれることの少ない者にとって、死は何ともないと思った》

昭和十八年十二月二十八日、台南一中の同窓生・林宗人君が甲種合格で入隊する、との手紙が葉の手元に届いた。

《「この手紙は」僕を奮い立たした。師走の風冷たい今晚、しかも暗闇の、解けやらぬ雪のつ



明善寮寮祭で演劇，後列右から6人目が葉盛吉，昭和18年

るつるする夜道を、下駄でひたむきに俺は番町に出た。ただ、林君に日の丸の旗を送りたかったからだ。しかし売り切れとあつて残念ながら引きかえた。道々、俺は非常に心の奮い立つのを感じた。本当に嬉しいのだ。俺もやるぞ、と強く強く心に誓うのだった。

感激だ。友が征く。これが感激でなくして何ぞ。

彼は俺たちの行く道を示してくれた。……

時計は早や一時だ。頭は興奮してペンは走るように走り、もう何も考えることはない。ただ進むだけである。批判は他人に任せて、俺たちはただ進むだけである。……現在には確かに議論とか一切の疑念を超越している。……

俺は海軍予備生として行きたい(手記、昭和十八年十二月二十八日)

翌年の一月八日に、中学の同窓生・郭朝三君も海

軍に参加し、ラバウル方面に征った。その報に接した夜、葉は彼との長い交友を顧みた後にこう書いている。

《俺も征きたい。世の自覚せざる者、儉安の夢を貪らんとも、我はかの激しき嵐にたたかれたい。鍛えられたい。

今、仙台は白い皚々たる雪に埋もれて、風は身をつんざくほど冷たい。されど我々はストーブもなければ、足袋もはかない。熱血漢にそは一切不要なのだ。激しい意気、それは何にもました暖房だ(手記、昭和十九年一月八日)

昭和十八年前後、彼の考えによると、「良き台湾人」になるには、日本の大東亜戦争に協力しなければならぬ。彼はこの時点では、まだまだこの戦争の本質をつかめていなかったのだ。昭和十八年の年末に彼は二年生の安達義幸さんと歴史の流れについて語ったが、それをこう記録している。

《年の暮れに、安達さんとだべったことであるが、歴史というものは、あらかじめ定まったコースを流れていくものであるか、或いは歴史とは、流れが流れていく途中において、いろいろの障害物によって、その方向を絶えず変えていくものであるか？ これに対して安達さんは、歴史とは、流れが障害物によって、その流れを幾つかに分岐せられることがあっても、最後に

は一つの流れとなるものである、と。

かく考え来たる時、日本の使命は大東亜諸民族の解放である《手記、昭和十九年一月四日》
当時の葉は、大東亜戦争は聖戦である、と受け止めていたのである。

着物と羽織

着物の着用による葉の心境の変化も興味深い。

《角田兄の羽織の意見。便利主義的になつてはならぬ。羽織には先輩の血が流れている。我々はそれを着ると、何ともいえぬ力を内に感ずる。

俺は今まで着物がなかったから着なかった。角田さんいよいよ発つ晩、阿部さんは自分に着物を貸してくれたので、それを着、羽織をつけて出た。何とはなく暖かく、力強く、心の余裕のある感じがしてならなかった。

確かに洋服は便利主義的で、窮屈で、ゆとりがない。阿部さんの気持ちがよく分かる。されば、更に副委員長としての責任の重大さも、ひしひし感ぜられる。

駅で我々は明善寮応援歌、尚志会応援歌、尚志会会歌の三番を歌った。静かに目を閉じたととき、そこに流れる二高の血の暖かさをひしひしと身に感ずる。やがてその血潮の中に自己の血潮も解けて行つて、共に躍動するのを感じる。



明善寮幹事たち、左から2人目が葉盛吉、昭和19年2月

二高なる哉。明善寮なる哉。一寮なる哉。

形容できない感激に包まれた《手記、昭和十八年十一月二十三日》

着物は彼の気分をも変えて、また自信をも持たせた。着物を着、羽織をつけてから二ヵ月ほどした昭和十九年の一月に彼はこう書いている。

《着物は本当に良いと思う。……気分も雄大になり、身も引き締まるのである。……俺の今までふさいでいた気持ちも、幾分明るくなってきた。しかし気持ちは真剣でいたいと思う。……

自分が最近寮の仕事に、また弁論に立つたとき、ともかくも信念持てやり得るのは、着物を着、羽織をつけた不思議な力より来たるものと信ずる《手記、昭和十九年一月十五日と

全寮弁論大会

昭和十九年一月二十二日の午後六時から深夜十二時まで、昭和十八年度明善寮弁論大会が開かれた。一寮から六寮まで、各寮の幹事一人が参加し、そのほかに飛び入りを含めて十七人が論壇に立った。幹事の論題は「決戦ニ処スル学徒ノ態度ヲ論ズ」である。話す方も、聞く方も皆真剣であった。

審査の結果、葉は一等で入賞した。葉の弁論の内容は二つである。一つは求道精神の高揚、二つは大東亜建設にこの道を推し進めることである。彼の弁論の稿が残っている。

《この道とは、わが国にありては、即ち惟神かながらの大道であり、天皇道に他ならぬ。……我々が肇国の悠遠を偲ぶとき、そこに永遠の思想があるのであります。……明善の大道は天皇道であり、そしてそれより発する護国精神、国に殉ずるの精神であります。……

先に申しました精神から、我々は大東亜共栄圏の建設がかならず達成せられることを確信するのです。……

しかし、理想を現実に表示していくのは我々の行動である。そこに行動に対する不断の辛辣な反省を要求する。我々が大東亜諸民族の協力を得て、自らはその中心の推進力たるの自覚を失

わず、新しい文化をつくるには、自主的に、自発的に東亜の諸民族を我に協力せしめるのが先決問題である。……

実にこの難局を切り抜け、次の時代に燃々たる焰を燃え立たせる原動力は国体に徴し、信仰に生き、ひたむきな唯一筋に生きる激しい気迫の中に生まれると信じます。終わります》

彼は自分のこの弁論を批評してこう書いている。

《俺の歩みし二道。その一つがこの内容である。……

自分の考えは日に日に変わっていく。……また二道を歩む矛盾に悩み抜いて、その融合点に努めることもあった》(手記、昭和十九年二月五日)

彼は自分が歩いた二つの道の一つを話したと言っているが、実は弁論の第二部でもう一つの道が臆気ながら顔を出している。彼の、その前に一寮でやった弁論を聞かなかった人は、この第二部は理解できなかったであろう。全寮の弁論大会なので、彼は論点をぼかさざるを得なかった。支配民族の文化宗教政策に対しての、彼の批判的態度は、根本的には変わっていないのである。彼の心の奥底に秘められているこの悩みを知らない人は、彼の本意を読み取ることはできない。彼はあまりにも抽象的に、しかも軽く一言触れたのみであったから。

彼は更に書いている。

《一寮の八木「康二」や加藤「玄生」は、あれは葉山の体験から出た言葉だ、と言う。あれこれ考えると、俺はこう思った。俺は体験も悩みも思索も、二本の道を進んで来た。その二本の道の中の一本を表したのも、それがこの間の弁論大会と思う。

俺は本も余り読んでいない。また理論的に哲学とは何たるか、はつきり知らない。

ただ、俺は大きな悩みを中学校以来、なかなか浪人時代に続けてきた。そして、この悩みを書き表したのは昨年八月以後であって、しかして、俺の考えの一方に偏せんとするを、常に矯正してくれ、叩いてくれたのは中目だと思う》(手記、昭和十九年一月二十九日)

明善寮の庶務幹事となる

葉は昭和十八年十二月六日に一寮の庶務委員から総務委員になり、一寮の仕事を総轄することになった。前述のように明善寮全寮の弁論大会で一等に入賞してから、彼は次第に全寮の注目を浴びるようになった。

翌年の二月に、昭和十九年度の明善寮前期幹事の選挙が行われることになっていたのであるが、幹事候補として、自然に葉に白羽の矢が立った。

彼が台湾人であることは、明善寮生はみな知っていた。台湾の高砂族出身だ、という誤伝すら広がっていた。が、彼の出身を問題にする人はいなかった。「高砂族が、遠い南の島から陸奥の仙台まできて二高に入ったんだから、素晴らしいもんだ」と言う人もいた。

葉が当選したら、今度は明善寮六つの寮の仕事を司るのである。彼は、またもや悩み始めた。《いやしくも、明善寮幹事たるものは、我々の入寮したころ、小野「唯男」総務幹事の言えるごとく、いざとなれば責任に感じて腹を切るの覚悟がなくてはならぬと思う》(手記、昭和十九年二月四日)

彼は二年生になったら残寮せずに、寮を出て下宿し、幹事の職から逃れようと思った。

《俺は己の修養のために寮に残ることは寮を利用し、寮を冒瀆するものであるような気がしてならないのである》(手記、昭和十八年十一月十六日)

明善寮は信仰に生きる場所であり、明善寮の根本的流れは天皇信仰であると、葉も全寮の弁論大会で言っている。

《俺は寮を道場と思いつつやってきた。しかし、本心と外面に現れたものが別々なるを知ると恐ろしくなる。すべてに感激が持てない。これが最大の苦痛だ。

次に、今後もしやって行くとしたら、寮に対して済まぬとも思われる。時には本心を曲げてせねばならぬからである》(手記、昭和十九年二月四日)

彼は恐ろしくなった。一步一步と深入りして、本当にぬきさしならぬ事態にだんだん近付い

てきたのである。二つの道の矛盾がますます激化してきた。

《中目とどべった。俺は生まれてから幼いころは一本道を歩んできた。これは中学生時代まで続いた。

浪人時代に至るにつれて、俺は一本道が二本に分かれているのを知った。しかし片一方の足を一つの道に、もう一方の足を他の道にふんで行かねばならなかった。

しかし、この時、二本の道はさほどの距離もなく、かつ平行していたので、歩みづらかったものの、歩めないほどでもなかった。

さらに明善寮に入るや、二道は左右とその平行を破って、だんだん分かれて行った。されば、またがって歩むのが、いよいよ困難になった。しかも、これは俺が「一寮の」副委員、それから総務委員となるにつれて、いよいよ甚だしくなった。

そして今、残寮問題を目の前にして、俺はいくら股を大きく開いても、もうこれ以上分かれた二つの道を同時にたどり得ないことを知った。いずれか一本の道を選ばねばならぬ状態に陥った。その一本を進むことは、現在の自分の本心に背くことであるが、そうでなくしては現実がこれを許さなかった。

自分の本心と合った、本当に安心立命のできる道、それは現実が俺を歩ましてくれない道である》手記、昭和十九年二月四日

残寮問題では、寮生は皆いろいろと考えていた。

《残寮問題解くを得ず。原「会計幹事」は自分を我がままといい、和賀井「庶務幹事」はちゃばい「幼稚」といい、俺はつかめないと云った》(同上)

「つかめない」とは確かであろう。彼自身ですらどうすることもできなかったのだから。彼のような問題は日本人学生には起きないものであり、次元も違っていた。

葉のこの悩みを解決してくれたのが先輩の阿部政次さんであった。阿部さんの一言に彼は豁然として大悟した。阿部さんとの話は、葉の例の抽象的言語で進められた。

《昨晚「二月五日」阿部さんと話した。今、二つの道が大きく大きく離れて、いずれか一道を選ばざれば、とても踏んで行けないような事態になった。

それに対して、その二道は永久に離れ行くものではなくて、何時かは交差するものではないか、と言われた。

自分は今まで考えなかったことを示されたように、はっとした。そうだ。今この二道は、現在の俺にとっては、段々離れて行くように見える。だが、これは時がたてば、また一道に合するではなからうか。

岡倉天心の *Asia is one*「アジアは一つなり」を思い出す。またわが国の今進んでいる道、八紘為宇も結局は二道合って一道となることではないか。してみると、俺個人の悩みはすなわち、またそれがわが国の進む方向と合致するではないか。

自分はまだ良く、この八紘為宇の精神と、その具体的に現れるべき姿を知らない。しかし、この八紘為宇の理想が、その述べられる通りのものであるならば、自分はこの分かれた二道は、合して一道となることを信じて疑わない。

こう思ったとき、俺は何となく目標を見出したような、力強きものを感じた。いずれの一方の道で倒れてもよい。またこの二道はだんだん離れて行くものでなくて、むしろ平行していて、これ以上の距離とはならぬようにも感じられた。それでは、寮に残ることも、幹事になることも、苦にはならないかも知れない。

阿部さんは自分の本心を知っているわけではない。しかし自分の言葉に対して与えてくれたヒントが、図らずも自分にかかる飛躍した考えを引き起こせしめた。

人の言葉は確かに尊い。その言葉が当たるよりも、そのヒントを与える力を有するところに尊いところがあるように思う》(手記、昭和十九年二月六日)

阿部さんの一言が葉に思想の転換を呼び起こし得たのは、その言の素晴らしさにもよるものであるが、実は葉の心の底に既に阿部さんの思想を受け入れる下地があったのだ。

「自分は今まで考えなかったこと」と彼は言っているが、実は彼は類似の問題をずっと考えていたのだ。例えば、「良き日本人」と同時に「良き台湾人」になりたいという思想、すなわち「両立の思想」はまさにそれではなからうか。両方を融合したい、という思想もまさにこれではなからうか。葉が八紘一字の「大理想」に遅かれ早かれひかれいくのは、この数年来の彼の思索の決着ではなからうか。

葉は明善寮の幹事の重任を引き受ける決心を下した。

《二道がやがては一道に合する。これが信念であり、信仰である域まで、心を持って行けるよう努めよう。そうすれば俺個人の人生観、国家観、世界観というのが一となるであろう。

目標を求めること既に久し。今にして曙光を見たように感じられる》(同上)

昭和十九年二月十日、明善寮生は一二四票の高い票で、葉山達雄を明善寮の昭和十九年の前期庶務幹事に選出した。

十二日、新旧幹事が広瀬川の畔に集いて、杯を交わした。

《……工藤「哲夫、旧」幹事曰く、葉山、お前の好きにやってくれ。お前は純真な奴だ。酒は回る。さしつ、さされつ。広瀬の流れがまたもや聞えてくる。……ああ、仙台はいい所だ。ああ遙けくも来つるかな。……

寮に帰り……幹事室の神棚の前に座る。宝刀を眺める。絶対、この光を曇らせないぞ。……石森さんを十室に訪うたら、いなかった。四室に行った。いた。石森さん、すまない。すまない。俺は石森さんの気持ち、皆の気持ちがよく分かるのだ。が、自分の気持ちを皆に分からせることができなかった。……

石森さんは「よかったなあ、葉山、本当によかったな、自信を持ってやってくれ、角田もよろこんでいるぞ」。

……俺は涙が涙がぼろぼろと流れて仕様がなかった。涙が、涙がぼとぼと落ちて、石森さんの手に落ちるのをどうすることもできなかった。……

俺は遙くも明善寮を慕って来たことがただ有り難い。俺は分かれた二道が必ず一道に合えられる日を信ずる。……

霧のようなものが、一面に垂れこめる。俺はこの暗い、霧のかかった中に仰ぐ杜の都に本當の東北の姿があるようにも感ぜられる。……

俺は幹事室に寝たとき、俺が俺でないことをひしひしと感じた。ただ一筋に生きん（手記、昭和十九年二月十二日）

ユダヤ問題と神ながらの道

昭和十九年の初めごろから、東北帝大の奥津彦重教授、二高の小野浩教授などによつて、「ユダヤ問題」なるものが二高に、特に明善寮に持ち込まれた。

ヒトラーの反ユダヤ主義は、日本の一部の右翼に受け入れられ、更に日本独特の「神ながらの道」と結合して、特異な「ユダヤ問題研究（ユダ研）」といわれるものに変化していった。日本敗戦の前の年に、仙台では一握りのドイツ語の教授と数人の二高の先輩が精力的に活動を始めた。

当時、イタリアは既に降伏し、ナチのドイツはもう風前のともしびであった。こういう時期に、ヒトラーの理論を持ち出すこと自体が、ナチズムのために弔いの鐘を鳴らすに等しかった。

一方、日本軍は太平洋の諸島で次々と「玉砕」し、戦局の不利は国民をして真珠湾開戦当初の戦勝の陶酔から疑惑と失望へと押しやっていた。

なぜ、こういう時期に、ユダ研が表立って活動し始めたのか、なぜ、日本の右翼の一部がこのような異常な心理状態に陥っていったのか、これは敗戦直前の最後の足掻きともいえるのではなからうか。

当初、明善寮生はユダ研に対して、疑惑と驚異の目を見張った。暫くして、一部の寮生は次第に小野教授たちにひかれていった。葉もそのうちの一人であった。

明善寮でユダ研の最初の講演があったのは、昭和十九年一月十七日で、講師は奥津教授、演題は「今次大戦とユダヤ問題」、場所は明善寮の講堂・霽風堂であつた。

葉はその夜に手記でこう書き残している。

《寮で東北帝大の先生のユダヤ問題の話を聞く。謀略の謀略で、結局、訳が分からなくなってしまう。ただ、直観的にユダヤ問題は重大であり、知らねばならぬとは思つた。

しかし講演の内容は非常に猟奇的で、しかも探偵的なため、興味津々たるものがあるが、現在の我々の知識をもつてしては、理解できない点も、判断できない点も多々ある。

要するに裏の裏。その感が深い《手記、同日、夜遅く、明善寮で、トリンケン「飲酒」のあと》葉は日記にもこう記載している。

《夜、七時より霽風堂で東北帝大奥津教授の「今次大戦とユダヤ問題」についての講演あり。九時より、奥津さんと渡辺さんと小野教授を囲んで座談会。十時終了。全寮を興奮させた》(同日)

小野教授は我々理乙六組のドイツ語の授業を受け持っていたが、教科書に『Judenfragen』(ユダヤ問題)という書名の反ユダヤの論文集を選んで、無理やりに我々にユダヤ撲滅の思想を叩き込もうとしていた。彼は授業でドイツ語を教えるよりも、反ユダヤの宣伝に多くの時間を注いだ。

葉は小野教授たちの講演や談話の内容を相当詳しく記録している。次に述べる彼らの理論と活動は、主に葉の記録から採録したものである。

ユダ研はユダヤ人を一切の悪の根源と見なす。

「ユダヤ人は絶対悪なり。自分だけ神の子で、他は悪魔の子であると、ユダヤ人は信じている」。すなわち、「ユダヤ人は自分が絶対善で、他は絶対悪と思っているのである」

「ユダヤ人は人間にあらず、悪魔なり」

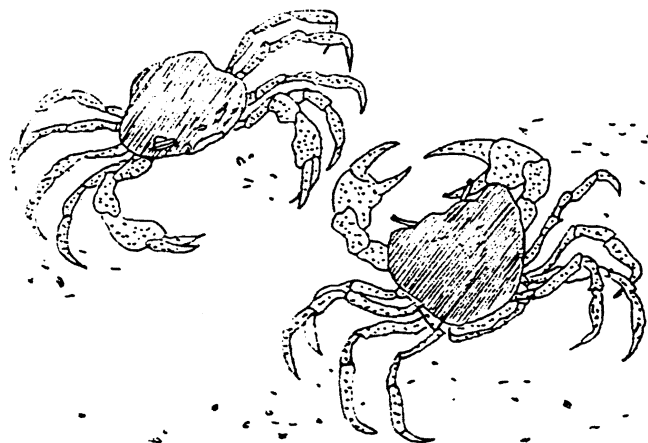
「ユダヤ人は絶対特別に取り扱うべし、とのフィヒテの言は千古の名言なり」

過去と現在の一切の悪事は皆ユダヤ人によって起こされたものである。太平洋戦争もユダヤ人の策謀によって起きたものである。ユダヤ人が日米双方を戦わせている。

「大戦果が上がつても、それで勝利と思つてはならぬ。ユダヤ人は米英が負けても損はしない。あらかじめ負けることも考慮に入れているのである」

「日本は大反撃せば、敵は講和を申し込むかも知れないが、これ実にユダヤ人の謀略なり」

ユダヤ人はフリーメーソンその他の秘密組織を通じて、全世界を制御している。



母蟹「お前等は決して、極道
ひいてはいけぬ。こ
しく眞直に這ふのだ。」
子蟹「お母さん、先づあなた
から、先に、まっすぐ
に歩いて下さい。さう
すると、私は喜んで、
お母さんのなまねをま
りにまかせよう。」

葉盛吉が描いた漫画

孫文も、蔣介石もフリーメーソンのメンバーである。

「孫文の三民主義はフリーメーソンの支那化に過ぎない」

「支那と日本は元来戦争する理由はない。ユダヤ人がさせたものである」

「アメリカは建国以来ユダヤのものなり。フリーメーソンの力により、アメリカが建ったのである」

第一次世界大戦は言わずもがな、ロシア革命もユダヤ人が策謀したものである。革命の指導者の中には沢山のユダヤ人がいた。

「*Staat im Staate* (国家の中にユダヤ人は国家を作る)」。日本においてはユダヤ人は地位につき難いが、それだけフリーメーソン、ロータリー・クラブのような人工的ユダヤ人 (*Künstliche Juden*) が多い。アメリカにのみならず、日本にも「日本のユダヤ財閥」がある。それ故ユダヤ問題を知らなくては本当に国史が分からない」

「ドイツの戦争目的は開戦以来、ユダヤ撃滅にあつて、終始一貫して変わらぬ」

「ヒトラーはキリストより偉い。ドイツ人にとっては、ハイル・ヒトラー (ヒトラー万歳) というような言葉はなかなか言えるものではない」

「現在はユダヤ問題を無視してはすべての問題は分からぬ」

「事実何もかもユダヤ問題なのに、まだそれを知らぬ人が多い。このユダヤ問題は日本人の

問題と同じである」

ヒトラーの『マイン・カンフ』(我が闘争)をバイブルのように崇めている日本のユダ研にとっても、ナチの、ある一点だけは受け入れることができなかった。もし受け入れたとしたら、ユダ研の日本での立脚の余地はなくなってしまう。それは何か——ヒトラーの主張するアーリアン人(ゲルマン民族)の優越性である。彼は日本民族を含めてすべての他民族を見くびっていた。日本のユダヤ問題研究者は神道の優越性をもってこれに対置したのである。

「ニーチェは天才にして、大なる信仰を求めた。哀れなるかな、彼はドイツ人なるが故に、気の毒にも氣違いとなり、大なる不信に陥り、一切の神を否定した。

まことに信仰を求めて行けば行くほど、信仰に至り得るのは日本人のみである。この点に思い至るのみにても、御民我生ける驗^しの感激自ら湧きのぼるものなり」

「大御心に敵国を撃砕すべし、とあるから、我々は敵国の本体ユダヤを撃滅せねばならぬ」
「闇は光が出ると無くなる。即ち闇は元来、非存在なり。光と闇は、日本とユダヤとの関係によく似ている。これは根本問題である」

「日本は絶対なり。ユダヤは否定的だから、かならず自滅する。しかし、ほつといておくと、他民族は巻き添えを食い、さらわれて行く。それゆえに日本の原理を他民族に分けることは、

他民族を救うことである。これが八紘一字である」

ここでユダ研は神道を持つて来る。

「神道の体系を見ないと、ユダヤ教は入って来ない、見えない。ユダヤ教は神道と絶対無縁であるが、しかし他宗教では駄目で、ユダヤ教は神道から入らなくては見えてこない」

ユダ研は「破邪^{はやくしや}顕正^{けんせい}」「尊皇攘夷^{そんかうじやうい}」を主張する。

「旧い日本主義者は顕正と尊皇のみを唱えているから、……まんとユダヤ人にだまされてしまう。顕正とか尊皇とかは、かならず破邪と攘夷を伴う」

ユダ研のいう破邪と攘夷はユダヤ撃滅のことである。

「今日の音楽家は穀つぶしのみだ。『海行かば』は永遠の歌なり」

ユダ研は、「人生観」とは社会から遊離した個人の価値、目的、態度のみを考えるものであると見て、これを排斥し、「世界観」の確立を主張する。「世界観」には個人と社会、国家、世界との関係が含まれる。

「人生観は自転であり、世界観は公転なり」

ユダ研は西田哲学やキリスト教も否定する。

「西田哲学は何の役にも立たぬ。日本の臣民たることから遠ざかり、責任感を失わしむ。

我々の直霊^{なほび}を開発しないのである。今の哲学は人生観的である」

「クリスチャンの熱は地獄から来る熱をもっている」

昭和十九年七月二十二日の晩、奥津教授と小野教授は、奥津宅で一部の明善寮生に次のように言っていた。この二人も世人のユダ研に対する「毛嫌い」を憂慮せざるを得なくなつたのである。

「世間一般の人は破邪（ユダヤ撲滅）の面のみを見てこれを毛嫌いするのである」

それでは、どうしたら良いのであろうか。二高のある先輩は同年七月二十三日と三十一日に明善寮でこう言っていた。

「ユダヤ問題研究会という誤解されるから、『護国学』という。後に『なほび会』というかも知れぬ。……」

他人にユダヤ問題を説得するには水掛け論とならぬよう次の三つの前提を設けること。

1、憂国の至誠より発すること。

2、誠を以て終始すること。

3、論理的にやること。飛躍論法を使わぬこと。

総親和、一億一心は駄目なり。これをかきまわし、回転せしめて、しかる後『億兆一心』とならねばならぬ」

ユダヤ問題をどう受け入れるべきか、奥津教授と小野教授は上記の七月二十二日の晩に集まつて来た二高生にこう言っている。

「今日は難しい理屈になつたが、ユダヤ問題はピリツと入れるのが、本当だと思う。ご飯を食べるときに、これが薬とか毒とか一々理屈をいわないでも日々やっていることが、そのまま正しいのである。今までの難しい根本の問題は別に分からなくてもよい。理屈はなくてもよい。天皇陛下万歳を叫べるには、ユダヤ問題が分からなくてはならぬ」

ここでユダヤ問題は靈魂学と結合する。この二人の教授は続けて言う。

「生徒大会で伊藤『良之助』が『ユダヤ問題をやって見ろ、そうしたらガンと当たるものがある』と言ったが、それが本当である」

そのガンと当たるものが靈魂とどんな関係にあるのか、これは葉盛吉自身の例で後で説明する。

右 傾

昭和十九年の前半に、葉の思想は右に傾いた。国粹主義とユダ研の影響を受けたのである。明善寮全寮の弁論大会で既に見られたように、彼の弁論の内容には国粹主義の言論が多く含まれていた。戦況の不利は、皇道精神の高揚をさらに必要とした。ユダ研の二高への浸入も、一部の学生の右翼化を促進した。葉もその影響を受けたのである。

葉は昭和十九年二月二十一日の手記にこう書いている。

《日本精神は偏狭なものではない。それが八紘一字の精神だ。一切を包容する》

彼は明善寮の幹事として、寮生活をこう規定する。

《幹事は日本人、それも本当に臣民に徹しなくてはならぬ。何かせねばならぬ。沈滞している。そういう感じが、絶えず圧迫感として迫ってくる。

日本人たることの難しさを感じる。明善寮生は日本人である。これを除いては寮生活とはいえない》(手記、昭和十九年四月七日)

驚いたことに、彼は二高の中国人留学生をも日本人にしようとしている。

《天皇様に帰一し奉る気持ち、これを大東亜諸民族に及ぼさねばならぬ。血を越えるものがある。

されば、留学生とて国体感激についてはハンディキャップをつけるべきではない。留学生は何も日本に来て、日本の風俗習慣、日本人の最も尊しとするものを知り得て帰り、彼らの参考にのみするというのにはあらず。

寮に入ったからには、留学生また日本人とならねばならぬ。日本人としてやらねばならぬ》(手記、昭和十九年二月二十四日)

これは昭和十九年二月に書いたものであるが、四月に留学生が入寮したときに、葉は実際に留学生にこの要求を持ち出している。ところが、さすがの彼もこれは難事であると思わざるを得なかった。

《満州の留学生に、君は日本人になれるかと言うたら、なれると答えた。恐らく、彼の言う日本人になれるとは、他の寮生と共に外面的に日本人同様の生活ができるという事を意味しているのであらう。

実際、彼らが最初から最後まで、第三人者的立場に終わらざるに、日本人たり得るかどうかは疑問であり、不可能かも知れない。

一時的周囲の雰囲気にかもし出す感激に麻痺されて、日本人になったようなことがあるかも知れないが、心から日本人たり得るとは、今のところでは考えられないような気がする》(手記、昭和十九年四月七日)

葉は昭和十九年の春ごろから、国体感激、国体明徴という言葉をつんだんに使うようになる。彼は肉眼よりも心眼を強調するようになり、霊的本体を信ずるようになった。

《午後、中村「浩、明善寮総務幹事」と「科学」につき語る。要するに感覚器官の奥に潜む力、霊的な本体あり》(日記、七月六日)

葉は鈴木重雄著『幽顕哲学入門』を読み終えて、こう書いている。

《不思議と我々の今日有する謬れる西洋の学問より来る毒性及び唯物論観を一掃してくれる》(日記、七月二十四日)

そして彼は「宇宙の気」に頼ろうとする。

《肉眼は制限があり、一時的であるに反し、心眼は無限であり、永遠である。小事にあくせくとして汲々たるもの、小範圍に凝り固まって頑固なるもの、古い次元の世界から突き抜け出し得ないもの、すべてこれ肉眼に頼り、肉眼を最上と盲信するの徒なり。

宇宙の気、それは天地正大の気であり、浩然の気である。心眼を開いて感ずれば、自然、人事、一として明かならざるなし。本来前後また齟齬するところなし。

信仰に発し、謙虚に発する心眼は、今日の学問、教育制度では絶対得られぬ。滔々たる合理主義、便利主義の横行するのが関の山だ。そういう者をつくるために今日の学校教育がある

ようなものだ》(手記、昭和十九年五月三日)

葉はさらに神道の正神と邪道の説を受け入れた。彼曰く。

《この世界は開闢より、陰陽とも、正閏せいじゆんとも、正邪ともみることの出来る二つの気流が錯綜していた。そは、しか見えるだけで実は簡単一本調子には行かないのである。……

あるいは、邪、偽装巧緻を尽くして正になりすまし、あるいは、実際に邪の正を助けしかに見えたる場合もあり。

時には、正がかえって邪に見えるごとく仕組まれた状態さえも、歴史の幾割りかを占領することに成功し、人間の判断力に錯誤を余儀なからしむる材料も、豊富に供給せられ、その紛然たる状況は、多少の眼力を有する者をして、茫然自失せしむるほどのものが、幾千年にわたって全世界に網を張ってきたのである》(手記、昭和十九年五月二十二日)

このような論調が必然的にユダヤ問題と関わりを持つてくる。ユダヤは邪であり、時には正を装うて歴史に登場するといふのである。これは後でまた述べる。

ところで、葉は初めてユダヤ問題に接したとき、疑惑を持つていた。例えば、蔣介石がフリーメイソンであるとは、信じられなかった。葉はこう書いている。

《彼も愛国者である以上、ユダヤの策謀にかかつて、国を売するようなことはあるまい、と思われるから、あるいは、彼が支那を造り上げるために、ユダヤの力を一時借りているのかも知れない、とも思った。

裏の裏ということは、考えれば考えるほど分からなくなってしまう問題かも知れない》(手記、昭和十八年十二月二十五日)

小野教授たちの言い分は本当に珍奇的で、根拠のないでたらめが多い。例えば、星印(★)はユダヤのシンボルだと言う。見よ、何と多くの国が国旗に星印を使っているかを。これはユダヤがこんなに多くの国を支配していることを立証するのだ、と小野浩は言う。

こんな面白いことが、葉の日記に書かれている。

《昨日、小野浩、本願寺に★印の入った灯籠あり、ユダヤの陰謀が入っているかも知れぬ、出所を明かにすべし、と言いが、簗野「脩二」その他二、三人で行って見たところ、裏にちゃんと師団司令部と書いてあったそうだ》(日記、昭和十九年五月十六日)

十九、二十歳の二高生は相当まじめである。このような事実を通じて、ユダ研の威信が日に日に落ちていったことは間違いない。

ところが、ユダ研は別の面で理論作りをしている。その理論に一時、一部の人が振り回され

たのも事実である。

奥津、小野その他のユダ研の宣伝を聞いて、葉はこう書いている。

《何かしら、根本概念をくつがえして行くものがある。分らない。分らない。もつとつと究めたい。真剣に進むには、いや生きて行くのに、どうしても究めなくてはならぬ。このままだと一歩も前に進めぬ。……

今日はただ本が読みたい。知りたい。神道、ユダヤ問題、それにキリスト教も》(手記、昭和十九年四月二十七日)

葉はそれからナチの本と神道の本を相当読んだようである。『皇国日報』も良く読んでいて、日記には、この新聞からの詳細な抜粋が沢山ある。

国分大尉の侮辱

昭和十八年ごろから、国分五郎大尉が二高に派遣されてきて、それからは軍事教練が強化された。この人は学生に評判が悪かった。戦後、彼が「喪家の狗」のように、仙台の街角をよろめいている姿を見た二高生は、ざまあみやがれと、胸がすく思いをしたものであった。

葉の手記によると、この大尉が昭和十八年の晩秋と昭和十九年の五月初旬に葉を侮辱した。一体、国分が何を言ったのか、彼の日記にも、手記にも一言も触れていない。書くに忍びない

ほどの侮辱的な言葉であったに違いない。下記は五月十二日の手記からの抜粋である。

《……自分がすでに人生観をある程度まで味わい、他人を責められない気持ちになってはい
るものの、彼国分に対して憤激を禁ずるを得ない。

古い古い傷口が再びうずき出したような気持ちだ。自分の過去が、幾多の人々が、苦の中に
あえぎ、そして涙と血の生活に明け暮れ、そして倒れていったことか。それも実に国分的人間
の存したのによる。

日本人は一面、幾多の長所を有するが、悪い部類の奴は全く手に負えないのである。

もつとも、国分が二高において、最も排斥せらるると思えば、二高もわが友たり得るのであ
る。正義こそ自分の友なることを痛感す。

国分の余にたいする言は全く言語道断。幾多の人々のために、かかる性格の人間は抹殺する
必要あり

国分が葉に与えたショックは大きかった。彼は昔の葉盛吉に戻ろうとした。

《俺はこれから無口になろう。でしゃばらないようにしよう。俺に何の資格がある。人にも
の言うに値しようか。一年生を導くということに至っては笑止の至りだ。すべてに対して熱
を持つまい。……

一寮を愛する。皆良い人ばかりだ。余が、傍観者とならざるを得ないことを許してくれた。

俺は一切のことは表面的にはやる。しかし、命ぜられた範囲を越えて自発的にはしない積もり
だ。……

俺が二高を思い、日本を思う衷情、果たして曲解せられずに済むか。……

寮の事務はもちろんやってやる。しかし、この範囲は越すまい《手記、昭和十九年五月十二日、
頭ががんがんなる。夕方、図書室にて

この日の手記に注目すべき事が一つ書かれている。彼はこの時点で初めて、結婚したいと言
い出したのである。

《俺は最近、結婚の問題を想起した。例によって俺の空想ではない。俺は大きな問題に突っ
込まんと欲するが故に、この問題も必然として浮かび上がった。

俺には信ずべき友なし、同志なし。俺の気持ち、俺の意志を継ぐ者なし。

余が命的に奮闘せんとするとき、余の意志を継ぐ者は、余の血を享けし者以外になし。
俺は今混沌たる泥中にいる。ただ思う。命の短く、道の遠しを。

ペンを限りに、ただ書きなぐる俺の脳中は、憎悪と不可解で錯綜している》

再起

葉は国分大尉から侮辱を受けて、一時沈滞したが、すぐ立ち上がった。彼は更にユダヤ問題と幽顕哲学に引かれて行った。

彼は愛宕北山著『ユダヤと世界戦争』を読了し、五月の中旬から天行居の『靈学奎蹄』を読み始めた。靈学には言靈法や音靈法などもあり、葉はそれを試してみようとまでに至った。

五月十八日の日記にこういう記載がある。

《朝、昨夜の残飯を食って、床の中で時計で音靈法を行う。松の音、濤音が静かに心に響く》

五月十九日の日記はこうである。

《夜、すぐ寝る。時計で音靈法をやろうとしたが、なかなか以て落ち着かぬ》

昭和十九年七月十五日(土曜)の日記に次のように書かれている。

《午前四時起床。「某先輩」来たる。今日は一寮神棚のお祭り日。祭神・伊勢皇大神宮内外宮、護国神社、青葉神社、桜ヶ岡八幡神社、上岡八幡神社、宮城野八幡神社の七柱。みそぎをやり、「先輩」の音吐朗々たる祝詞に続いて、かじり奉唱。一寮元氣なり》

昭和十九年の前半年に、「明善寮神社」造営の計画が進み、葉は七月十四日に

《小生、造営委員代表を拝命す》(日記)
となっている。

私との論争

私は昭和十九年の春休みに帰省した。当時、父は旧満州のチチハル鉄道局に勤務していたが、私は沿路を歩き回って、四月の末になってから、のろのろと学校に戻ってきた。

満州までの長い道のりで、私は行く先々で二高の先輩のお世話になった。「二高卒業生名簿」一冊を頼りに、ある都市に着くと、私は名簿の中から、そこに住んでおられる先輩の住所を見付け出して訪ねて行き、「先輩でございます」の一言で優待された。これらの先輩とはもちろん一面識もないのであるが、「先輩か、よく来てくれたな」と言われて、猛烈な歓待にあずかった。

この一カ月の旅で、私は先輩各位の厚情を満喫したが、日本と満州の各地を回るにつれて、いろいろなものが目に入ってきた。海外の満州から見ると、日本の姿がいやでもはっきりしている。仙台に帰ってから、私はそれを葉に語った。見解の相違は、またもや猛烈な論争となった。

《中目と話を共にすると必ず論争となる。彼は現状、なかんずく、彼が今度満州に帰省して

より、現状に対しては黙認し得ずと言う。

俺はこれに対して、あくまで本質的な問題を主張した。すなわち、現在の状態は百も承知だが、現状はあくまで現状にして、それに執っている間は、皮相的な見解になる恐れ十分にあり。本質的な問題を知らざるが故に、ただ単に表面のみより判断し、処置せんとするは幾多の錯誤を起こす危険あり》(手記、昭和十九年五月二十二日)

五月二十一日に、台湾籍の二高生が、台湾人新入生の歓迎コンパを開いたのであるが、その歓迎会でも、二人は鎬^{しのぎ}を削った。

《論、中目とぶつかっては激しい議論となり、一年生を啞然とさせる》(日記、五月二十一日) 私は、満州の、ひいては大東亜各地の悲惨な現状は、日本が責任を持つべきだ、ここに征服と被征服、原因と結果がある、と主張した。葉は、これは表面的見方だ、本質的な問題を知らざるものだ、と言う。

私は現状を素直に見よ、と反発したが、彼は東亜各民族の苦しみは認めるが、もう一步深く観察しなければならぬ、と言った。現状はあたかも日本によって起こされたがごとくに見えるが、実は宗教的根柢がある、と彼は言う。この「宗教的根柢」とはほかでもない、小野浩たちのいうユダヤ教なのだ。

日中戦争、大東亜の悲劇などは、日本によって起こされたのではなく、ユダヤ人の策謀で起

こつたのだ。ユダヤ人から見れば、それは正にユダヤの神の意に沿うもので、正義の道である。東亜の悲劇の根源は、世界に対して憎悪の念を持っているユダヤ人の絶対悪、これにほかならないのである。

このようなユダヤ的研究見解に、私が同意する訳がない。日本の侵略戦争の責任をユダヤ人にすり替えることは、日本帝国主義者の本望である。葉は彼らを弁護してこう書いている。

《我々は現状を日本の真姿、本然の正しい姿よりする発動とは思わない》(同上)

葉は私との論争で上記の正邪の気を持ち出して、東亜の悲劇は邪のように見えるが、正が邪を偽装して現出しているのかも知れない、正が邪に見えたり、邪が正に見えたりする。

《邪が正の姿をして現れ、正また邪のため



明善寮一寮観桜会，昭和18年

に邪の姿につくられあるを思うとき、我々はただ単に現状の如何を見て行動すべきにあらざるなり》(同上)

このように、客観的な社会科学の事実に基づかず、正義と邪悪を任意に解釈する技は、もう既に詭弁と神秘思想に陥っているのである。

上述のように、論争は激しいものであった。双方とも自説を覆さず、ついに八月前後にはこなくなった。

《帰り、中目に会い、シロップを飲み、後、寮までずっと話すが、結局、彼と俺との間には大きな溝が生じた》(日記、八月八日)

些細なことに見えるかも知れないが、我々の意識の変化ともいえるべきことが、上記の台湾出身新入生の歓迎コンパで起きた。会場で私がこう提議したのである。

《中目は我々の話においては、北京語を原則としよう、と言うた》(日記、五月二十一日)

当時、私ですら、北京語は片言しかできなかった。他の人は一言も知らない。それなのに、北京語にしようと言いだしたのだから、まあ、言葉を通じての民族意識の高揚とかを考えていたのであろう。数カ月後、葉は私を「先生」として中国語を勉強することになるのである。

二高生徒大会

「サイパン島玉砕」が発表された三日目の昭和十九年七月二十日に、二高の講堂で生徒大会が開かれた。この数年間、二高では生徒大会はほとんど開かれたことがなかった。今回の大会の影武者はユダ研である。

当時、戦局の悪化に、国民は国の前途を憂えていた。これに乗ってか、七月の上旬ころから、二高生を煽り^{あお}たてるよう言論が、ユダ研や二高の一部の先輩の口から聞かれるようになった。葉の日記からその一部を抜粋しよう。

《幹事三人、小野浩先生を訪うも、塩釜に行って不在とのことなり。

帰り中村とB先輩のところを訪う。「若い者が二百人も集まっておれば、大いに痛快なことができるんだがねえ」と言われて、慙愧の至りだった》(日記、七月九日)

《「二高のある先輩の話」明善寮は「明善寮」神社を中心として一つに結束すれば、二高全体及び先輩は徹によって直ちに駆けつけるが、本当に神州、粹然の気、明善寮に集まれば、その力はいて全国を動かすを得るであらう。この大東亜戦に明善寮は殉ずるのだ。そしてこの大東亜戦が終われば、それで明善寮の使命は一応達せられたと思う》(日記、七月十四日)

生徒大会の前日、小野教授はこう言っていた。

《……国内は今、完全に腐り切って、妖気満ち満ちている。

その日の夕方に、明善寮全寮幹事会が開かれた。

《最初、我々の盛り上がる感奮を発表せんとせしも、ついにやる時には、徹底的にやることに決す。》

- 1、明日夜七時より、講堂にて(夜にしたるはマイン・キャンプのヒント)
- 2、在仙台先輩を招待す(特にNさん、Bさん)
- 3、明朝、奥津さん宅を訪い、案内により憲兵隊と特高課に打ち合わせん(日記、七月十九日)

ヒトラーの突撃隊は、好んで夜に松明を持って行進したり、大会を開いたりしていた。マイン・キャンプのヒントとはこのことで、今回の生徒大会の性格を良く示している。

その日の夜は暴雨なのに、幹事たちは明日の大会のために奔走している。

《砂金、山口両氏は阿刀田「元」校長を訪う。》

夜、Yさん、伊藤「良之助」と小生、小野浩を豪雨について清溪寮に訪い、次いで小野宅を訪い、いろいろ明日の次第を語り、大いにファイトをつけて帰る(同上)

清溪寮は山岳部の寮で、当時リベラルな学生が多く集まっており、常識はずれの行動には頭を傾げていた。それで、小野教授と明善寮の幹事たちが説得に行ったのである。

幹事たちが帰寮してから、夜遅くに全寮会が開かれた。

《夜九時半より、全寮生、霽風堂に参集し、総「務」幹「事」より蹶^{けつき}起、奮闘を促す。次いでYさんより烈々心をえぐる真相の発表ありて、全寮生を奮い立たしむ(同上)

全寮会が終わってから、幹事たちは決議文、檄、誓詞の草稿を練るのに深夜まで頑張った。檄文はYさんが作成、葉は誓詞の起草を受け持った。

《誓詞に相当努力する。三時間ぐらい寝る。Yさんは徹夜らしい(同上)

翌日、葉は伊藤と一緒に行動を開始した。

《朝、伊藤と長町の東北大奥津教授宅を訪う。生徒大会につき、諾解の要あるを以て、憲兵隊及び特高課の知人を紹介していただき、名刺を貰う。》

午後、憲兵隊の石倉進氏を訪い、生徒大会につき話し、「今後いかなる思想混乱の時代来たるも、二高はしっかりしている」旨言う。

県特高課の佐藤正己を訪い、同様のことを言う(日記、七月二十日)
生徒大会参加の数時間前。

《小野浩教授、Nさん、京極さん来寮。》

誓詞完成。

禊^{けが}をやって生徒大会に臨む(同上)

生徒大会は七月二十日午後七時から二高の講堂で開かれた。大学の先輩や勤勞奉仕に行っている三年生も馳せつけ、参加者は数百人に上った。明善寮以外の他の寮生もその中に含まれている。下宿している寮外生もその多くが参加した。

《寮旗を先頭に、太鼓猛打と尚志会々歌の猛唱は、実に物凄かった》(同上)
葉が起草した誓詞も読まれた。

誓詞

我等遂ニサイパンノ玉碎ヲ聞ク 内ニ妖氣未ダ祓ハレズ

恐レ多クモ宸襟ヲ悩マシ奉ル 誠ニ恐懼ニ堪エズ

神州ノ正氣純然トシテ鍾ル此処ニ第二高等学校八百ノ健児在リ

謹ミテ大御心ニ随順シ奉リ護国尚志ノ第一義ニ徹シ内外ノ妖氣ヲ一掃シ天業恢弘ヲ翼賛シ

奉ラン

庶幾クハ宸襟ヲ安マセ給ハンコトヲ

誓詞に「妖氣」云々が二カ所も出てくるが、これはもちろんユダ研の言い回しである。

何人かの発言があつたが、大会は間もなくして分裂してしまつた。葉は簡単にこう描写している。

《最初は低調だつた。Yさんは堂々と相当大胆に喋つた。

しかし、明善寮の行き方方には賛成だが、態度が気に食わないので、ついに感情の激昂となり、完全に二つに分裂してしまつた。午後十二時終了》(同上)

この記載は客観的でない。葉のいうような画一的な「明善寮の行き方」は存在していなかったのである。

当時、明善寮はユダ研については二つに分かれていた。一つはユダ研賛成の傾向、もう一つはユダ研反対の傾向である。前者は主流のように見えるが、実は少数派であり、主に四寮と二寮であつた。後者はあまり目立たないが、実は多数派である。他の四つの寮はユダ研に対して、「せせら笑い」「語らず」「黙殺」の態度を取つてきたのであつた。

正確に言うなら、「明善寮の行き方」ではなくて、「明善寮の一部の人の行き方」、もつとはつきり言うると、「明善寮の一部の人のユダ研的行き方」である。

ユダ研には賛成であるが、態度が気に食わないから、感情が激昂した、と葉は書いているが、これも客観性に欠けている。反対されたのはユダ研の態度ではなくて、ユダ研の根本理論その

ものであったのだ。

生徒大会の分裂はユダ研の大失敗であった。もともとユダ研は、生徒大会を通じて、全二高生を制御しようと企^{たくら}んでいたものであったが、逆に二高生の多くはユダ研から離れて行った。

この大失敗を小野教授たちも認めざるを得なかった。葉はその日の日記に、大会の後に、小野浩が《憤慨した》《激憤した》と書いている。

生徒大会が失敗に終わったので、

《小野浩激憤し、「明善寮の」霽風堂で第二次生徒大会を行う。皆相当興奮してまずし。午前二時終了》(同上)

葉ですら、《まずし》と言って、二回目の大会も失敗したことを認めている。

二十一日に、また若干の明善寮生が小野浩の姉の家に集まり、

《ファイトをつけるために「若き突撃隊長の死」のレコードをかけていた。今後の具体的な方針を決める。組織次のごとし。

顧問 奥津さん 渡辺さん 小野浩

指令部(幕僚) N……

神祇部(中心なり) Bさん

参謀、主として研究する

突撃隊、(宣伝をやる)《日記、七月二十一日》

明けて二十二日、

《今夜、霽風堂で奥津さんの講演あるも、都合により中止になったので寮生大勢で同氏宅を訪う》(日記、七月二十二日)

この晩、奥津教授と小野教授はユダヤ問題について多く語ったが、葉は相当詳細に記録している。生徒大会については二人の教授はこう言っていた。

《この前の生徒大会の気分の弛みは、破邪の面を否定することによって起こった》

この二人のいう邪とはユダヤであり、破邪とはユダヤ撲滅のことである。生徒大会がユダヤ撲滅主義を否定したことを、彼らも認めざるを得なかった。ただ、自分たちが失敗したとは言いたくないので、気分が弛んだ、と言って逃げているだけである。

この二人は生徒大会について続けてこう言っていた。

《所謂日本主義者によつて顕正のみ主張して、破邪を否定した。あの場合、明善寮は顕正と破邪との両面について、二人立って言う必要あり。一人で顕正と破邪の両面を言う、と、だれてしまう》(以上、日記、七月二十二日)

彼らの言う顕正とは、前述のように尊王のことである。尊王は皆の賛同を得るであろうが、

攘夷の衷をユダヤと妄断して、ユダヤ撲滅に尽力せぬものを非国民と見なすから、ユダ研は「毛嫌い」されたのであった。

それでも、小野教授は生徒大会の後で、ドイツ語の授業時間にこう言っていた。

「大会でのY君の発言は、素晴らしい。彼は将来、日本のゲッベルスだ」と。

ゲッベルスは当時ナチの宣伝相で、巧みな演説で国民を戦争に動員した男、ベルリン陥落直前に自殺している。

七月二十三日と三十一日に、このYさんが霽風堂で話をしたが、

《世界維新の使命、二高にあり》

このような大言壮語をまだ使ってはいいたものの、世間の誤解から免れるために、今後ユダヤ問題といわずに「護国学」という、と話していた。Yさんは続けてこう言う。

《我々は今後一切の軽率妄動を戒め、じっくり落ち着いて勉強し、他より誤解されぬようにすべし》(日記、七月二十三日)

生徒大会を策謀したユダ研は、ただ一回の大会でもろくも破れてしまった。

それのみでない。ユダ研のこの「軽率妄動」のおかげで、葉をはじめとする人たちは、ユダ研に疑惑を持ち始めた。学生をナチズムに引っぱり込もうとしていたユダ研は、逆に反ナチズムの学生を造り上げていったのであった。

小野浩たちに踊らされた明善寮幹事は、寮生の不和と不満を收拾するのに大変であった。葉は既に二十二日に先輩の石森さんからアドバイスを受けている。

《石森さんといういろいろ生徒大会のことに付き語り、特に一年生の軽率妄動に注意すべきなりと思う。一年生のあの第二次生徒大会の霽風堂における感激は、一応受け入れてやるべきなり。そして軽率妄動に落ち入らぬよう、今後相努むべし》(日記、七月二十二日)

一年生の思想は混乱状態に陥り、葉もその対応に打つ手がなかったようである。

《朝、一年生に今後どうしたら良いか聞かれ、寮生活がすべての根底なることを言う》(日記、七月二十三日)

返答に窮した葉の姿が、目に見えてくるようである。

全寮の幹事たちも頭を痛めて会議を開いている。

《午後二時、全寮幹事会を開き、先日の生徒大会に対する各寮の誤解と感情より生じた一切のいざこざを話し合い、一応解消せしむ》(同上)

明善寮外もごたごたし出して、紛糾は生徒大会のことのみならず、明善寮神社建立の件にまで波及した。

《清溪寮の幹事、この前の生徒大会につき、詰め寄る。

明善寮の神宮造宮に至りたる真意を説明するも、彼は良く納得いかず。

彼らの生活を我々が低次元なりと見ていると思つて憤慨していたが、良く話して一応お互いに納得がいった》(日記、七月二十二日)

学校側も生徒大会に対して非常に不満であつた。

《校長を訪い、いろいろ生徒側の気持ち伝える》(日記、七月二十三日)

《夕方、再び校長宅を訪い、神経過敏になつたのをなだめる。校長の人生觀の低迷を払うために、宇宙觀的なことを話したら、ぼつとなつていた》(同上)

そのみでない。仙台市もユダ研を見張り出したのである。ユダ研は、日本の陸海軍は信用できない、青年将校のみが頼みだ、などと言つてゐるのだから、当局がユダ研の行動に監視の目を向けるのは当然のことである。

《幹事が心血を注いで計画せし生徒大会の投げた波瀾は、余りにも大きい。学校側、生徒側、今に至るまで落ち着かぬ。

その上、仙台市の意外な注目を引き、仙台^で出書簡検閲という結果に至つた》(日記、七月二十八日)

葉は頭が痛くなつてゐる。学期試験が近付いてゐるのに、彼は教科書を開ける氣もしない。

《西日さすあたり夏なれど、休めんな頭の疲れと、さすらう校庭、緑深し。ああ、凄慘極

まりなき歴史の頁は次々とめくられて行く》(日記、七月二十四日)

彼はこの生徒大会を通じて、ユダ研の行き方とその理論に疑いを持ち始めた。

《憂鬱が常に我々を包む。ユダヤ問題、朝鮮問題、また分からなくなつてしまつた。不快また不快。こういう時は何を見ても癪にさわるものだ》(日記、七月二十七日)

そして八月にはいると、葉は小野浩を罵倒し始める。

《小野浩の奴、世界觀を口にするが、人情の美しさを持つてゐるか。馬鹿野郎。Morgen「朝鮮人」の悪口を無意識でいうた言葉の底に彼奴の本音のうかがわれて、嫌氣をもよほす。一切合切嫌さに満つ》(日記、八月十三日)

八月十五日に、葉は私と長時間にわたる大激論をしてゐる。

《中目と小生、大激論、ぐるぐる展開してきりなし。……

これによつて小生と中目との間には、目標同じにして手段の相違あるのみと判明せり。……

記念すべき日なる哉》(日記、八月十五日)

この頃から、葉のユダ研批判、八紘一字批判が始められていく。

この前後に、明善寮で面白い事が起きている。憲兵隊特高課の人間が、明善寮幹事・葉山達

雄を寮に訪ね、中国留学生の動静を調査にきたのである。葉を日本人と信じ切っている特高は、誠におめでたい。

《夕方、憲兵隊特高課のいそべなる小柄の眼鏡かけたる、ちよつと佐藤信先輩に似たる人、来寮。

満州国留学生と同室の旧寮生・北野「周二」、大津「丞」を呼び、いろいろ質問す（役員室において）。月に来る便り（二、三回）、外出の件（日曜日、志学寮「留学生の寮」、番丁などへ行く）、特に変わった言論はないか（なし）。

小生にはちよつと寮のことを聞く。

この事は留学生にさとられると、ひがんだり、ひねくれたりするから、そういうことのないようにせよ。以上。》（日記、七月五日）

特高もなかなか勤勉である。一カ月後にまた葉を訪ねて来た。

《夕方、六月「七月の誤り」のころ、留学生のことで寮にきた憲兵また来たり、小生という話する。宛「吉城、満州国留学生」のことも聞く。映画の招待券もくれる》（日記、八月十五日）
この事については、既に明善寮時代に、彼が私に語ったことがあった。「旨くあしらってやったよ」と私に言った記憶があるが、この日記がこれを実証している。

八紘一字批判とユダヤ問題批判

徴兵猶予になっていた我々理科生は、軍需工場へ勤労奉仕に行かされた。昭和十九年八月十六日より、昭和二十年三月三日の卒業前まで、半年以上の労働であった。

この年から、高校は三年から二年に短縮され、さらに工場と農村での勤労奉仕が十カ月以上もあった。「三年なのに二年で追い出された」と、この年の卒業生はよく言うが、実は、学校にいたのは一年ぐらいであった。

我々が派遣されて行ったのは、宮城県南部の柴田郡船岡町の軍需工場で、「第一海軍火薬廠」という所であった。仙台から相当の距離があったので、学生は全員、工場内の宿舎に泊まった。その宿舎は地名を取って荻野二高寮と呼ばれていた。

船岡に行ったのは、理科の四クラスで、総員百五十名余り、勤労隊長は葉であった。

到着の翌日、八月十七日と十九日に塚本海軍大佐から「精神教育」という講話があった。大佐は「日本では忠孝一本であるが、もちろん忠が根本であり、あらゆる者をしてそれぞれ皇恩に浴せしむるのが八紘一字である」と強調していたが、角度を変えた話を所々に差し込んで、皆を啓発した。大佐の講話を葉は日記にこう記録している。

《男たる者、下を向いてしよばしよば歩くな、きよろきよするな。自分一個人の身すら処

理できぬ者に、なんで大多数の人々の指揮ができようか、というのが塚本大佐の言なり」
講話の肝腎なところは次からである。

《光輝ある日本歴史、これは八紘一字に照らしてみると、光輝ならざる時代滔々たる。……
武家七百年は八紘一字の精神に反する。……

現在、八紘一字は非常に狭化さるる恐れあり、過去においてそうだった。中味は何か分らないが、いずれも日本人という^{あん}館によって覆い、そして各人それにて得々としている。

過去をすべて光輝ある歴史と思うと、現在の自分は何でもかでも良いのだという自惚れに陥る。……

チャンコロ、鬼畜米英というのは八紘一字のための戦争完遂に当たり、戦意高揚にして、これは今後は撤廃せらるべきなり。しからざれば、何時までたっても戦争は絶えない」
大佐はさらに日本の非をこう述べている。

《塚本大佐は八紘二字の国策について、支那における日本商品及び洋車^{ヤンチャ}に対する日本人の態度を挙げ、排日貨、毎日から排日へ、そしてさらに蘆溝橋一発の銃声となったという支那事変の本質を明かにした。……

蘆溝橋事件が必ずしも支那に責があつたのではないということを闡明し、進んでMorgen[朝鮮人]に対する日本人の態度が間違っていることをはつきりと指摘したが、最近の事には及ば

なかった。恐らく及び得なかつたのであろうか。……

塚本大佐曰く、外地では、日本人は土地の者に対しては、手で頭を撫で、足で蹴っ飛ばしている状態なり》(以上、日記、八月十七日と十九日)

この講話に葉は感銘を受けた。

《八紘為宇の徹底説明、時弊の明確なる指摘。……優秀なり、信念あり、闘志あり。我が思うことと同じもある。快なる哉》(日記、八月十七日)

当時、このような異色な見解を語る人は、確かにまれであつた。海軍の開けた一面がここに
出ているのであろうか。

十七日の晩に、彼は私と長時間にわたってこの講話について語った。

《中目と凄惨にだべって遅く寝る》(日記、八月十七日)

「凄惨」とは当時の学生用語で、「物凄^{もの}く」「並々でない」という意味である。

八月十九日土曜日に仙台に帰った葉は、明善寮一寮の一年生にもこのテーマで話をしている。
《一年生の雲英[昭夫]、岸[俊彦]に対し塚本大佐の言を借り、大いにだべる。三時寝る》(日

記、八月十九日)

《午後、渥美[治雄]と昨夜と同じことをだべる》(日記、八月二十日)

船岡に来てから、葉と私は同じ部屋に住み、同じ工場で働いた。半年余りの接触は、我々に「だべり」の機会を存分に与えた。ユダヤ問題と八紘一宇、天皇帰一と宗教、天皇政治とデモクラシー、儒教と仏教、霸道と王道、女性問題と母性愛——話題は尽きなかった。二人は仕事場でも、宿舍でも、毎日語り続けて倦むことを知らなかった。

前述のように、葉はあの生徒大会で相当なショックを受けた。船岡に来る前に、彼は中国映画『万世流芳』を二回見ている。林則徐のアヘン反対をテーマにしたこの映画は、彼に深い感動を与えた。

《美しい人情だ。何時も打たるるは人の誠の情なり。人情の美しさ。……

林則徐曰く「民心死なずば、国滅ばず」……》(日記、八月十三日)

葉はこの時点からユダ研たちの利己主義を批判し、彼らを敵と見なした。同じこの八月十三日に、彼は激烈な言語でこう書いている。

《俺は闘う。一切の欺瞞と虚偽、そして利己主義的、帝国主義的侵略を破碎せん。高い道義によって建てられた秩序に返さん。》

世界観を口にして、排他の弊に陥る奴らよ、貴様ら是我執を去った積もりで我執のとりこになり、ものすごく利己的になっているのだぞ。俺の不倶戴天の仇だ。

貴様たちには貴様らのために血と汗を流す人々(種)があるのか知っているのか。馬鹿野郎《

(日記、八月十三日)

被支配民族の苦悩も忘れられるものではない。九月三十日の日記に彼はこう書いている。

《全く矛盾に満ちた生活の日々は、余を駆って幼き日の怨み多き思い出に馳せらしむ。それは骨身に染みて忘れず。

我が父、口には言わざれど、己を軽侮せんとする者に対しては、のろわしき口ぶりなりき。我が母、また死に至るまでのろいたり》

そして、葉は未来を展望し、闘わんとしている。

《ああ、日々血涙をしばりし人々よ、歴史よ。されど、天日は極めて明かなり。神のみそぎを逃れることは出来まい。現に大なるみそぎ払いが行われつつあるを感じべきなり。

我が思う日は早く来たらん。ただその日「数字分不明」闘を挑み、正を天に任し、白日の下に闘わん》

彼は「自叙伝」で簡潔にこの間のことをこう書き残している。

《この春には、私は一寮の委員となり、続いて全明善寮の幹事に選ばれた。そして右翼的な

神がかり的な学生の中に、一刻一刻敗戦に向かう日本の矛盾した雰囲気の中に、その影響を幾分なりとも受けたが、これは工場アルバイトに行ってから打破された」

船岡で、葉と私は八紘一字の大理想について討論を繰り返した。

《中目とだべる。

もし、それ現状にて現下の Great War[大戦]が大理想への War[戦争]なるならば、過去の反大理想的なる事実を一切さらけ出して、過去はなるほど大理想に反したことをやったが、Present War[今の戦争]はこれとは別物だ、と過去を反省することのない限り、我々は Present War が大理想に向かっていることは、単なるこじつけにして虚偽にすぎない、と考えざるを得ない。……

大理想の下に、血涙をしぼる大衆ありや。天、人に生を与う、人以て生を樂しみ、天を賛す。されど人、人に生を与えず、また以て悪徳非業といわずして何ぞ。

大理想なりと称するは大理想盗人にすぎない」(日記、昭和十九年九月十六日)

葉と私の討論は大理想の本質に突っ込んでいく。

《中目と語る。……

一民族の唱える理想は、それが実はその民族の発展のための道具でしかなくても、それがある程度の真理と人類の目指す理想と一致せる点なくては、実際の効果は期し得られないであろう。

されば、一民族が自己民族の個人主義的、功利的発展のための手段として振りまわす大理想、大理念は、理想、理念そのものとしては、人類全体の目指すものであって、その民族の独占するものではない。

ただそれをより巧妙に虚偽、欺瞞を以て、自己民族のみの発展を企図するところに、大理想なるものを悪用するから、大理想の方こそよい迷惑だ」(日記、九月五日)

我々の討論は、ここで理想の相対性につづかる。儒教、進化論、マルクス主義など、皆人類が理想に向かう一つの現れであって、おおむねその意図するところのものは正しい。この意味では、八紘一字も相対的なものであって、それに絶対性を付加してはいけない。それ故、こうも言える。

《問題はその民族が大理想を実際に奉じているか、いないかにあるのであって、悪用するたに唱える大理想が理論的に優秀であるか、ないかにあるのではない》(同上)

八紘一字が絶対唯一のものでなく、理論的には相対性しかないとの結論は、理論上、当時の日本の統治階層に反旗をひるがえしたに等しかった。

それのみでない。二十歳前後のこの二人は、大胆にも大理想を悪用する民族の滅亡を予言し

たのであった。

《大理想を残して過去の民族は滅んだ。民族滅んでも、人類の存する限り、大理想は残り得るであらう。

まして、大理想そのものが、民族の歩みではなくて、功利的、利己的にこれを悪用せんとするにおいては、それは大理想でも何でもなくて、空理空論にすぎず、大理想を残して民族の滅び得ること火を見るより明かなり》(同上)

八紘一字の批判とユダヤ問題批判は同時に進められた。

葉は、たとえユダヤ人が謀略を行っているとしても、それを攻撃するばかりでなく、なぜユダヤ人がそうやるのか、その根本的原因を探究しなければならぬ、と考えた。

《小野浩一派のユダヤ研究者は非常に見解が狭い。高遠なところを仰いでいる積もりでいて、その実、己を知らざるの禍誤に陥っている。

ユダヤの謀略は現在確かにあるであらう。しかし、彼らはなぜにユダヤが謀略を行うか、何が故にユダヤが経済的に世界を支配せんとしたるか、何がそうさせたかを知らない》(日記、八月二十二日)

ユダ研はユダヤを絶対悪と断定するが、「なぜに絶対悪になったかは、世界中、誰も分から

ない」とユダヤ研究者自身は言う。

葉はこの言い分に反対する。ユダヤ人の迫害された歴史を顧みて、葉はユダヤ人に同情心を持たねばならぬと思った。

《ユダヤは絶対悪なりや。余はしからずと思う。……

民族の生活や宗教は、生活の条件たる環境に支配される。多少唯物的な考えかも知れぬが、それを良く考えられ、相手のことを思いやれないところに人間の持つ狭さと欲のひらめきがある》(日記、八月二十五日)

彼は小野浩を父親に譬えて、一人の不良少年をいかに扱うべきかを、こう述べている。この例で、葉は、悪の根源はユダヤ人にあらずして、人間の社会組織の欠陥に罪がある、と指摘する。

《小野浩は譬えていえば、酒飲みで子供を虐待ばかりする父親にして、しかして、ここに一人の不良少年あり。殺人、放火、強盗至らざるなし。ために人々大なる災害を被る。

この不良少年を殺さずしては平和なし、不良少年当に殺すべし。こう叫び、かく実現せんとする人、これ実に小野浩及びこのユダヤ研究一派の姿にあらざして何ぞ。

現在犯行を犯しつつある不良少年は、確かに殺さねばならぬかも知れない。しかし殺して平和を求めんとする人自身が、第二の不良少年を自ら作りつつある事に何故に思い至らぬのであ

ろうか。

不良少年は、その少年そのものに罪はあらず。これを作りたる社会組織の欠陥に罪あり」(日記、八月二十二日)

ユダ研は人類の敵である——これが葉の結論である。

《小野浩のごときユダヤ研究者は、何故にユダヤなるものが生じたかを知らない。そしてユダヤの撃滅を唱えつつ、自分は現に第二、第三のユダヤを作りつつあるを自覚しない。

かくてどんどんユダヤを作っては、これを撃滅して行く。全くの破壊主義にして、ユダヤ以上に人類の敵なり」(日記、八月十八日)

ナチやユダ研の選民思想に対しても、葉は断固として反対している。

《選民意識の上に組み立てられた真理は真理にあらず》(日記、九月十九日)

《現下の災いの真因は実に選民なりと自惚れる連中の多いことにある》(日記、九月十六日)

《とかく人類史をひもとけば、そこには何と神によって選ばれた民の多いことぞ。もつと具體的にいえば、人類は神の選民なりということになる》(日記、八月二十九日)

この年の十二月二十五日に鮮台同胞処遇問題改善のことが新聞に出ていたが、その日の日記に、葉はこう書いていた。

《世界最優秀、したがって指導者原理を適用せしめる客観的理由は存在しない。孫文の大アジア主義は日本でいうところの指導者原理を適用せしめる八紘一字とは違う。同一と見るから孫文の言うことに矛盾ありと見るのであろう》

この時期の葉は、上記のように主に倫理の方面から問題を考えていた。相当深く掘り下げている所も多いが、社会経済からの論は少ない。彼は社会悪の経済的根源を探究せずに、人間の性悪に目をつけた。

《今日は仕事しつつ、中目とだべった。

人類は八紘為宇、大同主義の大理想を求めて進んできた。何が故に、それが今日まで実現されなかったのであるか。そは人の悪い欲あるに起因する》(日記、八月二十一日)

それで、個人の修養を起点とし、国を治めることを終点とした儒教に、彼は高い評価を与える。

《身を治めることを第一とし、天下を治めることを終局目的とする儒教は実に優秀だ。大理想は正しい。されど、それを実現せんとする個人の性格に欠点があれば、結果はむしろ逆であろう》(日記、八月二十一日)

ここに注意すべきは、彼は大衆に目を向け始めたことである。工場の夜勤の帰りに彼はこう思索している。

《遅番にぬかるみの夜道を歩きながら、両側にそびゆる山々を闇に仰いで考えるとところ多かつた。

我々は今まで大理想を裏付け、理論付けることに最大の努力をしてきた。我々の行動のフアイトの源泉を得んがために。

さりながら、我々が現実に行動する場合に、相手はあくまで大衆である。しかして、大衆の心理、大衆の気持ちを引つ張って行く勉強は、ともすれば閑却され勝ちであるが、実に今を置いて他にこれを求めることは出来まい》(日記、八月二十六日)

彼は明善寮の生活を顧みて、一部の寮生が空理空論に自己陶醉しているのを批判している。

《大東亜には多くの人々がいる。生活も習慣も言語も、その他伝統を見ても十人十色の状態だ。しかして、彼らの本心を叩いて見よ。あるものに対する怨嗟においては、俄然一致するという事実は何と見る。

明善寮よ。空論を止めて、現実を真に直視せよ。現実をさげすむの余り、思想の空転を起さすなかれ。

大理想の実現はあくまで大多数を占める大衆が主体だ。だから現実を直視せよ。これが最も大切だと言うんだ》(日記、八月二十九日)

葉の日記にこんなくだりもある。

《抽象的であることは非常に便利である。中目と語る。もし、壮行式あれば、その辞に余は次のごとく言うであろう。

過去の虚偽、欺瞞に満ちた世界歴史は、人類が常に理想を目指す結果として起きる根本的、徹底的なる書き替えが、今や行われつつある。

諸兄は身を以て第一線に立ちて、この峻厳なる事実を体験せられんとしておられる。

人類の常に目指し来たった大理想とは何ぞ。過去の虚偽、欺瞞の歴史の正体は何ぞ。そして徹底的に書き改められるべきものは何ぞ。これをとくと体感せられんとしている》(日記、九月五日)

《世界史は今や根本的に書き改められなければならぬ》——この一句は彼の八月二十一日の日記に初めて出てくる。

確かに抽象的な言葉は有り難いものである。この一句は誰が、どのように解釈してもいいの

である。

九月十九日に、葉は彼なりに、こう解釈している。

《世界の歴史は正に書き改められるの秋に再会せり。

かくて東亜の人々は、誤れる虚偽の歴史よりの圧迫から救われるであろう。大理想の実現は、自己に隷属する民族の増加を共存共栄なりと称するものではない》

この年の十月に同じく明善寮の幹事であった片平洋君が出陣したが、その入営に持つていく国旗に、葉は中国語で同じ意味のことを書き入れた。

《正午、片平来寮。国旗に「現在真是世界歴史改書之秋」と書く。いろいろだべる》(日記、十月十七日)

この中国語には文法的な誤りがあるが、これはやむを得ない。葉は中国語を勉強し始めたばかりであるから。

十一月九日の日記にこんなことが書かれてある。

《スターリン議長の演説が新聞に出た。日本を侵略国といっているのに、なぜ、そういうものが新聞に載せられるか、訳が分からぬ》

越えて、十二日の日曜に葉は仙台に帰っているが、一寮の一年生たちにこう問うている。

《諸氏の中に果たして日本を侵略国なりと言いつスターリンの言に反駁し得るものありや》
《夜遅く渥美とだべる。彼はスターリンの言を認めざるを得ずと言った。余は現在の寮は過去の否定すべきものを肯定した上に立っているので大空想、大妄想だと言つてやった》

この《過去の否定すべきもの》についてはちよつと説明を要する。続けて葉の八月二十五日の日記を借りる。

《現在明善寮の陥りつつある欠陥の一つは、狭くなつて行くところにある。

ちよつとユダヤ問題を受け売りし、あるいはかじり、それに神道天行居の『霊の世界観』などというような本を一二冊かじり、多少幽霊界を知つた気になり、これを以て俺は現在日本の思想界の最高峰を行くものだ、と妄信していることだ。

他人の知らない、ユダヤの謀略に関する調書を金科玉条のように得々として拝み、得々として語り、俺が最も忠良なる臣民、真の日本人でござる、というような面をしている。笑止の限りだ。

彼らは世界観学をやっているものであり、彼らのファイトは、他人の知らぬものを知っている、自分が思想界の最高峰を行つており、世を救い、危機を打開するは、自分たちをおいて他にない、という妄信に出ずるものである》

葉は「彼ら」という第三人称を使って、こういうことをも書いている。

《彼らは余の東洋、否、全世界人類の幸福を祈念し、これに全力を傾倒する真意と甚だ相容れざるを以て、余は彼らより脱退せざるを得ざるなり。虚偽、傲慢を以て大なる利己主義を實現しつつあればなり》(日記、九月四日)

葉盛吉は別の道を選んだのである。そして、志と信念を同じくする友を求め始めた。

《真を求むるにおいて強き者は、いかなる者といえども、我が友たり得る。真に人類の平和を願い、これに向かつて努力するは正しきなり。なぜならば、それは人類の歴史において示されている》(日記、八月二十五日)

中国への関心

船岡に行く前後から、葉は「中国語を勉強したい」と言い出した。外国語として学びたいのではないことは明らかである。中国にアイデンティティーを見出したい彼の欲望がここに見られる。

中国語の「先生」はなんと私なのである。私は旧満州に七年も住んでいたが、日本人の枠内で生活していたので、中国語はそのABCしか知らない。

私がいじめに中国語を勉強し始めたのは、大陸を離れて日本に来てからであり、それもまた

民族意識の目覚めによるものであった。二高の一年生の夏ごろから独学で始めて、時には同窓の「満州国」の留学生宛吉斌君に教えてもらった。二年生の夏ごろには、豊子愷の童話や太平天国の指導者洪秀全の伝記などが読めるようになって、自分の国の言葉で自分の国の本が読めるようになったと、非常に興奮したものであった。

葉が中国語の勉強の話を持ち出したので、私も大変喜んだ。船岡の工場で毎日寝起きを一緒にしているのだから、これは「先生」と「生徒」とっては、もってこいの条件である。

船岡に着いてから四日目には、もう勉強が始まった。

《中目と支那語につき論ず》

と八月二十日の日記に書かれている。

我々は寸暇を盗んでは勉強した。葉の勤勉ぶりは驚異的であった。我々は宿舍から工場への行き帰りの時間をも利用した。

《今後、専ら全力を語学に集中せんとす》(日記、九月十一日)

《朝日さす秋の朝は本当に良い朝だ。支那語も行きと帰りに中目に教えてもらうことができ。すがすがしい朝を我々は帰る》(日記、九月十九日)

《定時で帰る。朝の東の空は美しい。行く手に蔵王を眺めつつ、朝の冷たい大気を吸う。中目と支那語をやる》(日記、九月二十二日)

《今日感じたことは語学はすべて発音を重要視すべきだ。我々の室は支那語室、簗野「脩二」の室は洋楽室「洋楽愛好者がそこに集まっていた」》(日記、十月二日)

この半年で、葉の中国語は相当進歩した。彼の日記に中国語が出てくるようになる。

《快々の「速く」やる》

《月亮在那裡「お月さんはそこに出ているよ」》

出陣の日の丸に、中国語で送別の言葉を書き入れたことは前に述べた。

葉は暗号としても中国語を使い始めるようになった。日記で日本人の悪口を書くときに、「大和民族」を中国語の発音記号と英語を組み合わせて「カヤ厂せ face」と書いている。当時、船岡の荻野二高寮で、これを解読できるのは私一人しかいない。

《支那語、大いに興湧く。『紅樓夢』をやる。一寮雑誌『あしかび』の原稿として周作人「魯迅の弟」の『小河』を訳して出そうと思う》(日記、十一月二日)

何年も喋っていない故郷の台湾語も、復習し始めた。台湾語は、私は彼に劣るが、まあ普通の会話はまだできる。船岡に着いて間もなく、英語で日記にこう記している。

《At night, I went to Funaka town with Nakanome, speaking Formosan.「夜」中目と台

湾語を喋りながら船岡町へ行く》(日記、八月二十一日)

彼は『台湾語辞典』、『日台会話大全』なども苦勞して手にいれた。

私はもちろん忘れてしまったが、葉の日記にはこのようなことも書かれてあった。

《俺はまたして中目に一本やられた。怠惰。確かに俺は学問に対して少し怠惰になってきた。なぜ蹴つばらぬ。内容が乏しければ、なぜ豊富にせんと努めざる。慙愧なり》(日記、十月九日)

この年の九月ごろに、私は仙台の丸善書店で中国の国歌(すなわち中国国民党歌)が載っている『支那語雑誌』を見出した。歌詞のみでない、楽譜も付いている。私は胸のときめきを押さえることができなかった。

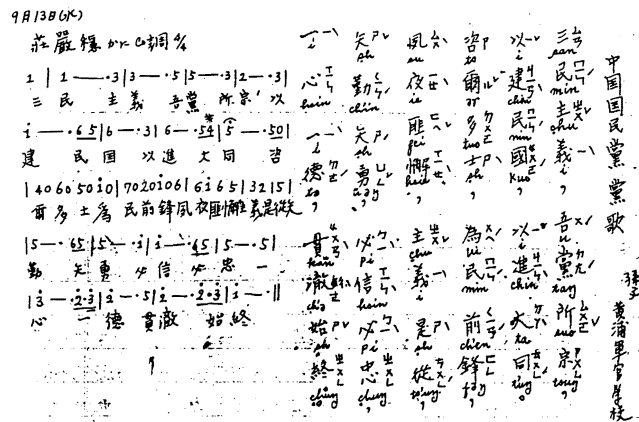
国歌があることは知っていたが、正確な歌詞は知らなかったし、もちろんその演奏を聞いたこともない。私は独り居のチャンスをつかんで、楽譜にたどどしくすがりついて、どうやら歌えるまで練習した。

船岡の荻野二高寮で、葉と二人だけの時に、この国歌を見せ、歌って聞かせた。彼は例の几帳面な字で、九月十三日の日記に歌詞と楽譜を全部書き写した。歌詞には発音記号まで付けていた。

経歴の違いによるのであろうか、私は中国から台湾を見ていた。逆に、葉は台湾から中国を見ていたようであった。私は中国大陸で七年の青少年時代を過ごし、父から将来、中国の外交官になるようにと育てられた。葉は大陸に行ったことがない。彼の目が、台湾に多く向けられたのは、ごく当然のことである。

それに、中国関係の書籍に接した時期も余りに遅かった。『三民主義解説』などは、中国に関心を持っていた台湾人学生の多くは、中学時代に既に読んでいたのである。当時、中国語を解さない台湾人は、この上下二冊の岩波新書を通じて、三民主義に接し、中国革命に理解を持ち始めたのであった。私がこの本を読んだのは中学四年生の時であるから、葉は私よりも三年ほど遅れたことになる。

『三民主義解説』は余にとつて得るところ多大なるものがあつた。中国関係の書籍の閲読が、彼の思想に及ぼした影響は大であつたと思う。ただ、遺憾に思えるのは、読書の量が少なかつたことである。船岡の半年で五冊しか読まなかつたのは残念である。



葉盛吉が書き取った中国国民党党歌，昭和19年9月13日

国歌の作詞者は孫文であるが、「建国の趣旨がはっきりしている」との彼の評価であつた。

この年の十月十日の葉の日記には

『双十節なり』

ととくに欄外に書かれている。この祭日は中華民国の建国記念日(辛亥革命記念日)である。葉の心の傾きがこの五つの字に見られる。

葉は中国関係の本も読み出した。『近代支那思想史』『孫文伝』『北京好日』(林語堂のMoment in Peking)、周仏海の『三民主義解説』(岩波新書)『支那四千年史』などである。

彼は昭和二十年三月十二日に『三民主義解説』を読み終えているが、十九日の日記にこういう感想を書いている。

第一海軍火薬廠で

侵略戦争のために軍需工場で火薬を作られることは、葉盛吉と私二人にとつてはこの上なき苦痛であつた。自分の手で作られたこの火薬が同胞の殺傷に使われるとは！

こんな所にはどうしても行きたくない。が、強大な国家権力に公然と反抗すると牢獄にぶち込まれる。私にはその勇氣はなかつた。

入所して半月ほどたつて、二人はサボタージュの術を考えた。

《午後、中目と消耗、廻「逃」避作戦やら、「チチキトク」「ハハキトク」の話をする》（日記、九月五日）

こういう電報を家から打ってもらつても、台湾や滿州にはもはや帰れない。海路は既に途絶えていた。残された道はサボタージュのみであつた。私は急いで医者にかかる必要もないのに、鼻カタルの手術を受けて、「正当な理由」で一カ月ほど入院した。逃避戦術である。

葉は勤労隊長である。彼は「無責任」の態度を取つた。

《余は現在、荻野に二高生隊々長として来ているが、「荻野」寮内の事に関しては、余は至つて無関心である。これは自信を以て無関心でいるのである。

塚本大佐の話以来、余には明かに期する処あり、向かう目標存するのである。

西尾先生は廊下が掃除されずにザラザラしているをぶつぶつ言っているが、小生は馬耳東風

である。……

敢えて言う。余は今の生活を完璧なものとしていく積もりがあれば、必ずやつていく確信がある。

されど、余は現在、心に期するところあり。断じてなすまい。この状態に対し馬耳東風、無関心たることが、余としては最も正しい道なりと信ずるからである》（日記、九月二十九日）

クラスの中で労働についていろいろな対立やごたごたが起きているが、葉はすべてをほつたらかしている。それよりも中国語の勉強が大事だ。

《全ての事は我関せず焉だ。中目と支那語をやつたり、だべつたりする》（日記、九月六日）
工場の仕事に対しては、葉はこういう態度を取っている。

《余は余の怠惰を防ぐために、やるときは大いに元氣を出してやり、その代わり、大なる余暇を要求する》（日記、九月三十日）

《我々は仕事の合間をみて寝たり、防空壕内に入つてだべつたりした。サボりたいからではなくて、仕事は纏めて一氣にやり、暇を作つて勉強したためである》（日記、八月二十九日）

理科六組のクラス幹事・赤石健一君はよく皆の面倒を見た。

我々の仕事場はトムソン工場といって、濃硝酸、濃硫酸、濃塩酸の混合液の漲った大釜に、

綿糸を仕込んで、ニトロセルロース(硝化綿)を作るのが主な仕事である。ゴム長靴、ゴム前掛けに防毒面という物々しい姿で、それに顔、とくに耳と手に、白い重曹をうんと吹き付けてから仕事を始める。酸は危険極まりなく、工場の中はガスで濛々としている。

このような重労働なので、幾日もしないうちに、クラスメートの諸沢信君が倒れてしまった。これは大変だと、赤石君は工場長に食料を二倍に増やしてくれるよう要求した。

工場側は食料難を理由に容易に応じない。赤石君は「国の将来を背に負う二高生が、学業を捨てて、国のために勤労にきている。彼らが一人また一人倒れていっては、私はクラスの長として責任を負い兼ねる」と頑張った。

海軍には物分かりの良い人が多い。「よろしい。ただ大つぴらには困る」と言うので、赤石君は「工場の側にある小屋を二高生の休み場として、我々はここで食を取る」と答えた。

それからは、この小屋は二高生が「治外法権」を有し、工場のだれも入ってくることはできなかった。九月十一日から、二高生は一日六食、夜勤はさらに二食追加と決まった。

ところが、一、二カ月たって、工場長が赤石君に難色を示した。「二食ではやはり困る、一食に戻してくれ」と言ってきた。赤石君は「重労働は厭(いと)わない。ただ、飯を確保してもらいたい」と一言言って、後は工場長と無言対面すること前後二時間。二高生の労働の実績を工場長も良く知っていたので、「分かった。元通り二食にします」で、この談判は終わった。

我々はこんな重労働を半年も受け持ったが、赤石君のおかげで、それからは体を壊した者もなく、空腹を感じたこともなかった。物資欠乏の当時、これは確かに特別待遇であった。

もちろん、工場での働きぶりは各人各様であった。工場に来て半月たったころ、葉は六組を三つのグループに分けて、それぞれの労働態度を評価している。

《全く今の六組は青年性に欠けたる者と青年性を持ったる者と、更にある特別の存在、それは一見、青年性に欠けたる者と類似に見えるという三つのグループに分かれる》(日記、九月九日)

彼は青年性を持っているグループに敬意を表している。もちろんこのグループは余暇を作ることを考慮に入れないので、葉と意見の食い違いはあるが。

《赤石たちはよく蹴(け)つ張る》(日記、八月三十日)

お国のためには、このぐらいのファイトがなくてはならぬ、これが二高生だ、と葉は褒めたてている。

この青年性を持っているグループで、葉の日記に出てくるのは赤石健一、中島穰、池内宏、吉川俊一、菅原庸雄、小笠原徹、武藤芳雄、五十嵐喜九男などの諸兄である。彼らは自称、他称ともに「特攻組」で、トムソン工場の一番きつい仕事を率先して受け持った。酸の浸蝕で、

彼らの多くは中年で既に歯を悪くしている。

葉はこんな評価をもしている。

《山本「実」、岩谷「英司」はさすが日頃、日本人だ、と叫ぶ二寮だけあって、大いに蹴つ張る意思あり》(日記、十月十一日)

仕事に精を出すには飯をうんと食わねばならぬ。

《我々は現在六食。小生は一日大体六〜七食を以て限度とす。しかし組の中には十二食ぐらいまで食う奴がいるから一日一升五合も食うことになる。驚異なり》(日記、十月十一日)

一日十二食は中島穰君をはじめとする「青年性」を持っているグループである。彼らはびっくりするほど働くから、決して穀潰しではない。

組の中に極少数であるが、非常にだらしない、サボってばかりいる者がいた。

《彼らは「寝てばかりで、さっぱり仕事をしない。心理状態不可解。

衰弱にしては面の皮が厚すぎる。全く亡国の民の様相を呈し、以て予感的なる姿を示していると解すべきであろう》(日記、九月二十日)

《一見、青年性に欠けたる者と類似に見えるグループ》には葉自身が含まれている。葉はこう言っている。

《Sはニヒリスト、Hは虚無主義者、それに俺と中目は皆それぞれ異なる理由に発し、だらしないグループになる結果に至っている》(日記、十月十一日)

「それぞれ異なる理由」については、既に前で述べた。

《一見《類似《見える》と言っているように、葉は彼自身と私を本質的には「青年性に欠けたる者」でなく、「青年性を持つ者」と見ているのである。彼は言う。

《「青年性を持つ者」、これも二高生だろう。我々は、真を求めるにおいて断じて妥協しない、これも二高生だ。見掛けは違ふとも》(日記、八月三十日)

工場での半年間には、いろいろないざこざもあった。ある時、一部の人が現在のもめ事から過去にまで遡^{さかのぼ}って、葉に責任を問うた。彼は自分を一人の二高生と見なしてくれ、尚志会の常務幹事、または明善寮幹事と思ってくれるな、という前提で意見を述べた。日記によると、彼の見解はこうである。

《余は「工場」で当然来る矛盾生活を予想し、常務幹事辞任をほのめかしたが、これまた容れられず、ついにやむなく今日に至った。

されば、余に向かいて過去の事を問うなら、また七月二十日生徒大会に余の言いし事で以て余に責任を問うなら、より大なる国家なるものが、過去の歴史を明かにしない限り、そして過去の一切の事に對し、責任を負い、その非を即刻に改めざる限り、余もまた過去の事に關しては一切責任を負うまい。

故に余は累の尚志会、明善寮に及ぶを恐る。いささかなりとも恩を受けたるものに對し甚だ相済まぬと感ずるからである。

余は今回のことは全くただ一個の二高生としての余を見「数字分不明」念を押した（日記、九月三十日）

そうではあつても、葉は毎週、野口校長に便りを出さねばならなかつた。

《校長にハガキ二枚。……余は現在船岡組の隊長として、好まざるとはいえ、事実なるを以て、毎週寮生活の様子を一度校長先生に知らせるべきだと感ずる次第なり》（日記、十月十一日）

敗戦前の世相

葉はこの半年、軍需工場の有様を觀察し詳細に記録した。彼が見た敗戦一年前の日本の世相をここに再現してみよう。

仕事を始めた二日目に葉はこういう現象を見た。工場で働かされている朝鮮人の姿である。

《今日も午後、H〔半島人、すなわち朝鮮人〕がHなるが故に、K〔幹部？〕によつて激しく叱られてゐるをみた。見るとHはH〔「ファイト」なきさうにもつこに土を盛つて運んでいた〕（日記、八月二十二日）

工員が働かないのは普遍的な現象であつた。幹部が特権を振り回していたのも、当たり前のことであつた。

《我々がこの工場へ来て感ずることは、我々は工員を楽にするために来たようなものである、ということである。今日も我々が煮洗場へ手伝いに来ると、我々が作業をしているのを尻目に、工員は遊んでいる》（日記、十月十九日）

《女工員はさっぱり働かない》（日記、八月二十六日）

《島田工長は冷酷な人間だ。自分は主任室で寝て、工員には絶対寝るなと言う。しかも夜中には職場を二回回るべきなのに一回も回ろうとはしない》（日記、九月二十一日）

《親が死んでも、増産のためには帰らない、というひんまがつたものを美談とする》（日記、十月一日）

《誤つた時局認識狂者のために、国民はすっかりそのファイトを失つてしまい、潤いを欠いて殺氣と餓氣交々至るという有様》（日記、十月一日）

怪奇現象も無きにしも非ず。

《大詔奉戴日。主任井本少佐は今朝のすごい寒さで頭がどうかしている。

詔書を読み違えるし、欣喜雀躍と切齒扼腕を逆に使ったり、手を踏み、足の舞うところを知らずと言ったり、小磯首相のことを東条首相などと言ったり、まことに支離滅裂、悲慘の極みかな》(日記、十一月八日)

その同じ日。

《女学生が大勢来た。……彼女らは、勝つまでは頑張ります、なんて言っていたが、まさに欣喜雀躍として入り、トムソンのガスを吸って切齒扼腕して働くであろう》

《徳化がすべての根本だ。今日は、これ覇道の行われていると言わずして、何ぞ。心服するもの皆無。本心を叩けば、反感を抱くものばかり。

しかも、K「高官？」が枕を高くして寝られるは、実にグンのにらみあるのみ。これ無くして寝られぬ。

これ覇道なり》(日記、八月二十五日)

《駅前で応召の見送りありしが、人々の茶化し気分、お祭り気分、だれきった顔が目につく。

大理想は何か？ これがとても大理想を奉じて戦っている国民の姿とは思えなかった。老衰し切った姿、だれ切ったファイトのない姿ではあった》(日記、十月十四日)

外界は砂漠である。明善寮はそこにある唯一のオアシスであろうか。工場から寮に戻ると、彼は悲喜交々至るの感に打たれる。九月十日、葉は三年生の送別会に参加した。

《七時より大晩餐会あり。

白布で掩われた机に溢れんばかりの優待。皓々たる灯火の下、寮生の歌声は「数字分不明」魂となって発す。

感無量と拍手にて迎えられて入り来る三年生。もう一年は過ぎたのか、中島「正己」さん、

「佐藤」文正さんを送ったあの頃から。

そして今自分は、酸に侵されて、がさがさになった黄色い手をして工場に奮闘している。月日の流れは余りにも早い。

一年なりし我ら、今ここに後より来れる一年生と坐す。過ぎて早き一年なり。オバンチャン、オジンチャン、飯シ——のひびき、正に壯觀と言わずして何ぞ。赤誠旗の下、今宵の寮生の集い。げに美しく、思い深し。

「年々歳々花相似、歳々年々人不同」ただ尽きせぬは諸行無常、五乗輪廻の思い。ああ、



明善寮大晚餐会，昭和18年11月14日

我々と六カ月にして、また斯く去らんとするか。

一年前には歓喜のみに掩われてありたる。宴も、今宵は我が身には心淋し。移ろう時は昔にかえす由なし。げに悲哀の心にしむる宵かな。宴のさざめきの高けれど、やがては移ろう月日の影見えて、哀愁のしんと胸に泌みわたる。

されど男子一つ屋根に会し、そして今別れて行く。向かうところ怒濤如何に狂うとも、我に鉄石五尺のむくろあり。意志また巖をも貫ん。ああ、永劫の波路行く我々若人の姿にぞ、胸躍る。さっきまでの悲哀はやがて奮々たる氣と打って変わる。

最後に荻庭教授の速詩あり。

「壮士、今業を終え、国難に向かわんとす、

後輩のその行を壮んにす。星^{せい}旆高くひるがえるデニヤン島、健児、天下に先んじて憂う」

踏み分けてたどる陸奥、杜^{もり}深み……の中杉山分散歌は静かな、高らかな、悲痛な、奮々たる調べにとどろき、まばたく灯火に照り映ゆる健児が顔には、尽きせぬ名残の色見ゆ。……

一寮にても八室にて、真実を求める姿。石森さんのガダルカナル転進の勇士の詩をよむ。胸打たるものあり。

「……ああ、我ら命によりこの島を攻め、今また命によりてこの島を去る。ああ、我らこの島を去る」

今宵は人の真実の情けに打たれるなり。覚むれば虚偽に満ちたる現実。さりながらここは余りにも温かく、余りにも美しい情、情、真心。

あついあつい涙が、明日よりも過去のどんなことも、乗り越えて、忘れて、ただ涙がこみ上げて来る。我が夢見る美しい人の情に打たる。

夜中の汽車で下弦の月を見つつ荻野に帰る。ただ淋しい。永遠の美しき情にひたるの時は過ぎ、荒き現実の迫るをただ淋し（日記、九月十日）

昭和十九年十月二十五日、B 29が中国大陆から北九州を空爆し始めた。船岡の工場の片隅で、

葉と私はこのニュースを語り合い、二人とも興奮して、もう日本はこれで終りだと、杯を挙げて祝いたいほどであった。

二高——奥深き学び舎

葉は激しい寮生活の傍ら学業に励んだ。野口校長の署名付きの成績証明書によると、彼は理科乙八十三名中十番である。

葉は昭和二十年三月に二高を卒業して、四月に東京帝国大学医学部に進んだ。

二高生活はわずか二年であったが、彼の人格の形成に大きな影響を与えた。

クラス担任のドイツ語教授・平野孝一先生が、かつて葉と私にこう語ったことがあった。

「いつだったか、入試の口頭試問において、君はなぜ二高を受けたかとの質問に、二高は原始的だから、と答えて痛く阿刀田校長先生を感じさせた受験生があったそうな」(手記、昭和十八年十二月二十五日)

東京に出てから、葉はこう書いている。

「二高生は実に良い。純で、野性的。余は東京において、生活を共にし得るようなこういう人々を見出すことができない」(日記、昭和二十一年一月五日)

阿刀田元校長先生は「芋の子教育」を提唱された。二高生は皆「裸」になるように努力する。裸とは自分の一切を友にさらけ出すことである。異なる裸の男がぶつかりあう、芋の子のように、ごりごりに擦りあって、お互いに成長していく。そうしていくうちに、二高生は「脱皮」する。これが「芋の子教育」である。

葉曰く。

「『一部の教育者は』学生の悪いところ、悪いところを見出し、否定せんとするが、アテ公『阿刀田先生の愛称』は俺たちの良いところ、良いところを見出し、肯定していく生き生きとした『教育を施している』」(日記、昭和十九年八月五日)

葉は東京でこう回顧している。

「二高のコンパを思い出した。あの純真に世界観、人生観に悩み、感激した我らの生活は今でも最もよい思い出」(日記、昭和二十年十二月三日)

彼が処刑される一カ月前に書いた「自叙伝」には五年前の二高生活を簡潔ながら、生き生きと書き止めている。

「宮城の萩が咲いて、秋の深まると共に、夜、友と打ち連れて、^{えいせい} 盈々の月を見上げてトリンケン「飲酒」に出たり、同じふとんを被って友と語り明かしたり、そしてつくづく人を慕い、恋しがる気持ちが湧いて来るのであった。……

平泉の藤原氏三代栄華の跡を訪ねて、すすきの野に立ちて、しみじみと懐旧の情に耽ったのもこの頃である》

二高での友情は純潔なものであった。ここでは、

《友の憂いに我は泣き、我が喜びに友は舞う、という友情が結ばれた》(同上)

友との交わりには包容性と絶対信頼があった。あの「米鬼撃滅」「二億総蹶起^{げつき}」の昭和十九年の春に、私が級友・中島穰君に「日本は負けるに決まっている」と言っても、彼から非国民とも怒鳴られることもなかったし、特高に引つ張って行かれるようなこともなかった。

葉の日記と手記には至るところに、他人に対する思いやりと包容性について書かれている。恐らくこれは、彼が植民地人として、特に他人からの思いやりを求めていたことにもよるのであらうか。

《寮というものは、固い、柔らかい種々の性格の者を集めてやっていける所と思う。》

自分は、団体や国家というものは、これに相反する分子の存在は大切だと思う。それは常に反省の気運を与え、それが進歩発展の手立てとなるからである。……

我々の寮において、目指す目標が同一であるから、それに向かう道がどんなに違ってもよいと思う。……寮というところは個性を発揮し、一途な信念を持つとともに、人の言うことも理

解する広い腹がなくてはならぬと思う》(手記、昭和十九年二月四日)

二高生はよく先輩から「馬鹿になれ」と言われた。葉の言によると「馬鹿」とはこうである。

《常に心正しく、馬鹿正直に、光明正大に、そして常に馬鹿をみる、いわゆる損をする人間でよいのだ》(日記、昭和十九年十月六日)

もちろん、「馬鹿」には別の意味がある。天下、国家の大事に寝食を忘れ、衣服、習俗の小事に拘らない、という一点である。「天下の秀才を集めて、馬鹿になす所が旧制高校である」とはこの謂^いであろうか。

二高には東北武士の尚武の精神があった。特に戦時下にあつて、右翼的なものが頭をもたげた。しかし、それも最終的には長年根付いたりベラリズムに対抗することはできなかった。ユダ研の失敗がこれを物語っている。

教授は我々に学問のほかいろいろな事を教えてくださった。平野先生は「愛国」の美名で、二高の伝統的な部レースを取り消すことに反対し、こう言っておられた。

《それなら、一日中、朝から晩まで、護国神社にぬかずいた方が徹底する》(日記、昭和十九年四月十七日)

前述の国分大尉に学生が大きな不満を持っているのを、平野先生が耳にされて、教室で皮肉つてこう言われた「皆さん、あれが本当の軍人なのですよ」と。

教室での接触のみならず、我々生徒は校長先生、クラス担任の先生、その他の先生のお宅によく参上しては、深夜までいろいろとお話を伺った。当時の教員名簿には先生方の訪問時間が載っていた。これは学生の先生訪問に便宜を図ったものである。

物資欠乏の時期に、先生方の奥さんは大変困られたと思う。平野先生のご夫人は唐芋でケーキのようなものを作って我々を歓待してくださった。

後述するが、私は、戦後、日本を離れて北京に赴き「行方不明」となった。その私の卒業証書を、平野先生が大事に保管してくださり、三十五年後の昭和五十五年、私が三十七年ぶりに訪日したときにお渡しくださった。二十歳で戴くべきこの卒業証書を手にした私は、既に五十五歳の初老であった。その時、私は涙で、証書の字が読めなかった。

葉の日記にも所々に師弟愛に触れている。軍需工場での勤労奉仕のころのことである。

《扇畑「忠雄」先生が室に来て舎内のことについていろいろ話していかれた。本当に親身になって俺たちの事を心から思ってくれている。……

自ら率先して生徒と苦楽を共にせんとなさっておられる》(日記、昭和十九年九月十八日と二十一日)

勤労奉仕のために、二高では一年余りしか勉強できなかった。

《せっかく、良い教授がいたのに、かえすがえすも惜しい。このため数学、物理、化学はほとんど身に付かず、今でも残念に思っている。

ただ動物の木村「雄吉」先生は重点を実習においてくれたので、ガマ、ミミズ、カラスガイの充分なる解剖を一年で終えることができ、とくに冬の寒い日、ストープもなしに解剖のメスとピンセットを握って夕方暗くなるまで、我ながら良く頑張ったのは、最も良い思い出であった。これは私の生物学への興味を決定的なものにした》(自叙伝)

こういう二高に、葉が思いを寄せるのは自然であった。

《余に真理への愛、祖国、民族への愛を奮い起こし、余をして大なるRomanticist[ロマンチスト]たらしめた二高時代を、たといいわゆる学問の点においては得るところなかりしも、余は感謝を惜しまない。ある意味で、余の一生の方針を定めたと言ええると今は思っている》(日記、昭和二十年十月三十日)

師弟愛にも民族や国境の垣はない。昭和二十一年一月四日、台湾に帰る前に、葉は東京から仙台に戻って恩師に別れを告げている。

《山田善太郎先生、渡辺「源佐衛門」先生、扇畑先生がいた。山田先生と車中で、後で扇畑先生と語る。人間付き合いは国境を越えて良いものだ。余の故郷となってしまうような東北である。余は真のRomanticist[寝ぼけではなくて]として新しき使命に頑張ることを約して別れた》(日記、昭和二十一年一月四日)

東北は我が故郷

人間の心は、互いに矛盾した二つの感情を持ち合わせているようである。植民地の民はそれよりもっと複雑な感情の持ち主にさせられているのかも知れない。

我々は日本の敗北を望んでおりながらも、長く共に暮らしてきた日本人々と、そして長らく住み着いてきた日本の地とに無限の愛情を覚えていた。

葉は台湾人として、台湾に育ち、台湾の山川は夢路にしよつちゅう出てくる。さらに自分のルーツを探しては、中国にアイデンティティーを見出そうとして必死になる。

ところが、彼はこの十数年間、日本の教育を受け、ある意味では相当日本化されていた。とくに東北での二年は、彼にこの地への情念を育ませた。勤労奉仕で農村へ何回も行つて、葉は東北の素朴な農民を友にすることができた。

《村の人々、東北弁、人々のしきたり、人々の気持ち、それらは最早自分の心の中に解け合つていて何らの奇異を感じない。……

俺はもう相当に日本化され、日本人にされてしまった！ 生まれて以来、俺を取りまいたのは日本社会なのだ》(日記、昭和二十年十二月三十日)
東京帝大に入ると、仙台を離れなければならない。

《東北は純朴。……東京に行きたい気がまた鈍る》(同、一月七日)

《東京には行きたし、されど東北は去りがたし》(同、一月十七日)

《この自然、野生は余の性格にぴったりする》(同、十二月二十八日)

台湾人である葉にとって台湾は間違いなく故郷であるが、日本の東北は何であろうか。彼の内心を聞いてみよう。

《俺は道を歩きながら考えた。この東北で、三度の冬を迎え、そして真つ白な雪に覆われた田舎の山野、農家、もんべ姿の田舎の人々を見るにつけて、俺は生まれたときから、ずっとここにいたような気がする。一体、俺の故郷とは何だろう》(日記、昭和二十一年一月二日)

葉には二つの故郷があるのだ。台湾は第一の故郷であり、東北は第二の故郷なのである。

彼は二高一年生のとき、昭和十八年十二月に宮城県栗原郡志波姫村に勤労奉仕に行き、伊藤直志さんの家で同寮生の堀英一君と一緒に十数日、農作を手伝った。

伊藤一家はもともと大地主であったが、没落して、寂しい老後を送っていた。伊藤さんは文学の才能があり、農村詩人でもあった。

《この老夫婦には子がなく、弟の長男を家督相続にもらったのであるということを知って、

この年寄り夫婦の没落と子なき寂しい悲哀とには同情せざるを得なかった。誠に、それ人生においては、恵まれざること多し。人の心を推しはかるだに、哀れをもよおすなり。己、苦に会わば、そは己のみの苦にあらずして、己以上の苦を嘗める人のいかに多きかを思うべし。……

おばんちゃんとは本当に全てを尽くして歓待してくれた。……おばんちゃんより『ダンテ神曲、天国篇』などを頂いた。極めて丁寧なおばんちゃんの見送りを受けてその家を去った』(手記、昭和十八年十二月二十六日)

それからこの老人との付き合いが始まった。

その翌年、葉は寮の仕事で旧正月に志波姫村に行けなかった。堀君が訪ねていったが、その間のことを葉はこう記載している。

《旧の正月、志波姫村に行った寮生の言によれば、農家では二高生が来ないと肩身が狭いそうである。自分の家のもてなしが悪くて来ないのだ、と思つて肩身の狭い思いをするそうである。まことに農家の人々は純真である。

俺は部会で行けなかった。が、堀が行ってくれた。

信一ちゃん「伊藤さんのもらい子」が夕暮れの路の上を行ったり来たりして、待ちあぐんでいさうである。それで家に着く前に見付かつてしまったそうである。



葉盛吉がかいた絵と詩

もらった子供一人しかない年老いしおじんちゃん、おばんちゃんは寂しき暮らしに、喜んで喜んでくれたそうである。

全ては昨年末冬の日のアルバイトのままだ。……おじんちゃんと例の離れで寝たという。あのころ使った狸の襟巻をやはり使って。そして珍しいあめ餅を随分とご馳走になったことおまけに帰りに、紫蘇^{しそ}の葉と大豆の入ったしみ餅を堀に土産に持たしてくれた。それは我々二人のために特別に作ってくれたのだそうである。

そして堀が帰るときには、父子二人で築館まで送ってくれたという。

俺はこの春休み、暇を見て行き、しみりだべってみたいとそう感じた》(手記、昭和十九年二月十三日)

それから、葉は何度も伊藤さんを訪ねていった。葉が東京に出てからも、千里を遠しとせず、数回、志波姫村を訪れている。

《おじんちゃんは淳朴の限りだ。……おじんちゃんは毎夜必ず離れから、余の贈った本(今日)は『五重の塔』『風車小屋便り』を風呂敷に包んで囲炉裏端に持ってくる。そして、読まずにそのまま、また持って寝に行くのが日課だ。

おじんちゃんの心は実に美しい。この意味で実に偉大な人だ。

日頃、韻文だの、詩だのをつくられるが、農村文学として、私はこれが将来必ず世に出ることを信じている》(日記、昭和二十年十二月三十日)

信一ちゃんの妹の信子ちゃんも、その後、伊藤さんの家に移って来たが、東北の典型的な娘だった。

《信子は十三で小学六年。本当に可愛い、妹にしたいくらい。都会の女の子のもつ嫌味が全然ない。忍従の東北農村の女の子の可憐さが胸を打つ。

日頃の手伝い、食後の茶碗洗い、やさしい女の子らしさの溢れたる、埋もれた奥山に咲く一輪の花だ。その奥山の寂しい所に咲くところに、その花の本領があるのか。これを引きとって都会に植えたのでは立派に育たないものだろうか》(同上)

終戦後、葉が台湾に帰る前に、惜別の思いを胸にして、彼はまた志波姫村を訪れた。

戦後の東北農村は荒廃して、立ち直るに苦しみ、伊藤さんの暮らし向きは日々に悪くなっていった。

《余は現下の日本政府が何ら頼りにならざるを以て、生存上場合によっては、大いに闇をやるも可なりという意見を持ち、直志おじんちゃんにもこの事を言ったのであるが、どうも直志おじんちゃんには出来そうにもないことだ。

私は直志おじんちゃんを偉大と思う。東北の一淳朴な農村で、このおじんちゃんと知己になったのは、余にとって幸福であった。余の贈った『リッヒヤルト・ワグナー』チェンバレン著

を心から理解して読んでくれるおじんちゃん。そして、世界文学に親しみ、真と誠と正直に生きるおじんちゃん。

こういう日本の乱れ、道義の道にすたれた世にも、昔に変わらざるおじんちゃん。

雪深き東北農村の一つの光明である。

名残り惜しき最後の夜であった》(同上)

その翌日である。

《朝食済ませて、皆めいめい衣装を整えて、築館へ写真を撮りに。

おじんちゃんは余の荷物をつけて、信一ちゃんと先に、余とおばんちゃんと信子ちゃんからは後から。無口な信子ちゃん、上品なおばんちゃん。道は雪も大して解けていず、歩きよかった。

余の背中のリュックには、おばんちゃんに作っていただいた大豆、ミルク入りの餅に大豆のいつたもの、それに、懐かしき父への土産のくるみ、干し柿が入っていた。

左手に真っ白に雪頂ける栗駒の姿をおばんちゃんが指してくれた。美しかった。

この田舎に幾度来たことか。そしてもうすっかり馴染んでしまった余にとって、道行きつつ、今はただ故郷を去るに似た離別の情を感じるのみ》(日記、昭和二十一年一月三日)

東大進學と日本の敗戦

敗戦前の東京で

昭和二十年三月二十三日、葉は私の下宿で徹夜してだべり、翌日上京した。私は東北帝大医学部に入り、仙台に止まった。

空襲で東京から多く罹災者が地方に疎開して来たところに、葉は逆に焼け野原の東京に向かつて行った。東大は焼け跡に囲まれていたが、空襲の被害はなかった。

《あの落ち着いた、どつしりと威風堂々とした建物、銀杏の並木、時計台のある安田講堂、さすがは日本の最高学府である。

かさこそと踏みわけていくと、ああついに永年の望みは達せられたのだ。そういつた安堵の喜びが、こみ上げてくるのであったが、それには暗い敗戦の陰がさしていた》(自叙伝)

東大医学部で、思いがけないことに、台湾人の葉が、教練の中隊長に指名された。

《教練はまず駆け足。……最後に医学部全体の中隊長を命ぜられしは、いささか弱った。くだらん》(日記、昭和二十年四月二十七日)

その頃の帝大の教練は知れたものであった。

《教練は例によって、日向ぼっこだ。教官に米英軍の特色を聞く》(日記、五月十八日)



東京帝国大学学生証

医学部の最初の授業は四月十四日から始まったが、解剖学の西成甫教授からこう言われた。

《君たちの学力は昔の中学卒業程度であるから、医専程度のことしか出来ない。その上、時間短縮だから、まあ看護婦の講習程度のものだ、と言われていささか失望した》(日記、

四月十四日)

授業はいつ中断されてもいいように、しかも極めて急速に進められ、六月までにはGrund(基礎医学)の六科目を終えてしまった。

《書物が全然ないと、腹がへって勉強どころではなく、大切な解剖実習にもサボりがちであつた。しかし教授はしっかりしたもので、空襲警報下にも講義を続け、毎日五時までの講義は、腹にこたえてヘトヘトだった》(自叙伝)

四月二十九日の天長節には、学部長田宮猛雄教授のファイト溢れた話があつた。

《Eine ganze Welt gegen uns!——全世界を敵に回して戦わん!》と田宮教授は意気込んでいた。

終戦前に、葉は二回の空襲に遭い、帝都の燃える壮観を目の当たりに見た。五月になると切手すら買えなくなった。

《郵便局に行く。切手一枚、葉書一枚買えぬとは。しかも授業をサボってきているのに。何と不便な世の中か!!》(日記、五月一日)

東京では家はすっかり焼けていたので、先輩の下宿に居候したり、大学の取り壊しそこねた古い木造の病棟に住んだりした。

それでも、葉の向学心には切なるものがあつた。

《負けるものか。小生は緒方「富雄」教授の言に励まされるところ多し。あくまでやり抜かん。一にも二にも努力だ。林「宗義」先輩の言われるように、偉くなるな、地味なる努力を続けよ。一切を決するものは、あくまで実力である。周囲の者はいずれも考えが甘い。こういう連中には断じて負けまい》(日記、五月十日)

林宗義さんとは当時東大精神科にいた台湾人の先輩である。

五月にはドイツが無条件降伏し、日本の末路も見えてきた。ところが、葉は日本の為政者に対して、あまりにも甘い見方を持ち続けていた。五月十八日の日記にはこういうことを書いて

いる。

《ドイツの戦訓は我々に何を教えたるか。今こそ東のやり方に一大転換をすべきにあらずや。過去一切の否を否とし、肯を肯とし、一切裸にし、東亜一に結束し、奴隸化より東亜を守るべき血の結盟を今こそ、主観的にも客観的にも内外に宣明すべきにあらずや。

東亜には事実を以ちて示し、東亜を愛し、利己的を排し、奮起一番、立ち直るにおいては、馳せ参ずるの士、決して少なくはないことを確信する》

「悟れば極楽」と言われているが、侵略者に悟りを求めることは可能なのだろうか。葉の「ヒューマニスト」としての弱みが、ここに露出しているのではなからうか。彼には「お人好し」のところがあつたのだ。

七月十八日、葉は林宗義さんと語って大いに感動した。その日の日記にはこう記されている。《人類を目標とした、民族のための医学以外に医学はない。それは独占、偏狭を伴わざるものである。……

Wahrheit[真理]への愛、道義に生きる、これいかなる時と所に関わらず、我らの進む根本道であらう。

漢文！ 勉強にこれ努めよ》

彼は東大でJ O A K放送局(現NHK)に勤めていた曹欽源先生の福建語の講義や、魚返善雄

先生の中国語の講義にも出席していた。

彼の中国人意識はこの時期にますます高められていった。六月八日の日記にはこう書かれている。

《世界観的、純粹なる同胞愛に根差す夢は、あらゆる困難があつても、その実現に進む我々の責務であらうと思う》

六月二十三日から、日記のところどころに簡単な中国語の字句が見られるようになる。

敗戦前の四、五カ月間に、葉は一、二度仙台に来ている。また文通で私としよつちゅう連絡をとっていた。

五月二十三日に私からの第一信が届き、彼はこう書いている。

《中目兄よりの手紙に接す。猛然ファイト出る》

お互いに頑張ろう、などと私が書いたのであろうか。

五月三十一日の日記にはこんなことも書いている。

《何日汝再来!! 大陸に行きたい。友は仙台にあり》

六月三日の晩に、彼は親戚の葉秋源氏を訪ね、故郷のことや昔のことを語り、感慨無量だつ

た。その日の日記。

《我がRace〔人種、民族〕の強い力を今更のように感ずる。望郷の情、切なるものもあるも、自ら使命を感ずるまた深きものあり。

現在の余にとりて、勉強、科学的知識の吸収は絶対に必要なり。あくまで責務を感ず。

故郷を思い、葉家を思い、友中目兄を思い、中目兄の Vater〔父〕の言に感じて、小生の決意ますます確たるものあるを感ず。

確固として戦い抜く決意なり。自重すべきは自重し、熟慮、しかして断行は断^ツたるべし》

七月三十日の日記にはこんな記載がある。

《……中目兄を思うこと切なるものあり、夢にまで見て。夢に中目兄を見たるは、余の心に反省あり、また健全なるを思うと嬉し》

七月に夏休みとなり、葉は東北に疎開し、仙台にも足を止めて、私と数日を共にした。それは日本敗戦の十日ほど前のことであつた。

二人は文通では語れない問題を、数日かけて討論した。この時、我々はもう既に戦後の問題に関心を持っていた。

やがて来るであろう日本の敗戦の後に、米、英など資本主義国家が革命を経ずに、徐々に共

産化する可能性などが討論された。この意味では、英国労働党がこの年の七月に政権を獲得したのは、この変化のスムーズに行われ得ることを示すのか。

マルクスの本はさほど読んでいなかったが、階級闘争の観点からものを見るようにと努力し始めた。

中国の共産党はソ連共産党と同じ性格を持つているのか。将来、中国共産党は帝国主義の勢力を中国全土から排除する能力を有するか。

中国国民党と中国共産党のイデオロギーの相違はどこにあるのか。いずれにしても、中国の戦後の飛躍を、我々二人は疑わなかった。

日本帝国主義は破滅するであろう。戦後、日本に革命は起きるであろうか。いずれにしても、我々は日本の滅亡と日本の植民地化を断じて望まなかった。

徹夜に続く徹夜の討論で、昼間に横になることも多かった。

天下国家のほかに、私のプライベートのことで、葉は聞き手とならざるを得なかった。私の初恋のことである。

前記のように、私は仙台で石巻人として通していた。大学に入ってから、私は仙台のある有名なお寺に下宿させてもらっていたが、勉強の傍ら、お寺のさまざまな行事の手伝いに精を出

した。

方丈様はこの「日本」青年の私を心から愛してくださった。暫くして、私は方丈様のお嬢さんと仲良しになったが、彼女も私を台湾人とは知らなかった。

戦後にやっと「私は中国人ですよ」と打ち明けたとき、彼女はいささかも驚きの色を示さなかった。「いいえ、そんなこと……。ただ、あなたとなら……」と、とまどうことなく答えてくれたのだ。

《中目と朝からLiebe[恋人]について、まず彼に一つの懺悔話をきく。実に四時間。彼がLiebeに対してあれほどに真剣なのに打たれた。

彼は情に厚いと共に理性にも強い男だ。Liebeは人をして善に向かわしむ。Liebeの力は世界観的なものを覆していくほどの力あり》(日記、八月三日)

《午後には、avoidのことについて》

と日記に書かれているが、これは日本敗戦前に中国大陆に逃げ出す可能性を検討したのであった。関釜(下関と釜山)連絡船が既に利用できない当時では、その可能性はゼロに等しかった。

またもや別れの夜がやって来た。

《夜、トリンケン[飲酒]して大いに中目氏と語る。高校時代の思い出とリーベ[恋人]のことです。

最後に中国国歌を歌い、「何日君再来」を歌い、余に「我愛人類、而且愛我的中国」を示して乾杯す》(日記、八月四日)

葉は仙台から志波姫村に伊藤直志さんを訪い、そこで八月十五日の敗戦を迎えた。

敗戦後の東京で

八月十五日に、葉は熱を出していたが、《始終座して玉音放送を傾聴した》

《戦争は終了した。……日本は確かにドイツとは違う。あつさりうまく百八十度転回した。

……

自分の苦闘二カ年の高校生活をしのぶ。純な人々を思うにつけ、気の毒に不堪。鈴木英世、その他の人々。やがて共に我々と東洋平和に邁進してくれるであろう。……

さらに、同胞苦闘五十年の歴史を思い、感慨また無量なり。誠に栄枯盛衰は世の常とか》(日記)

十六日に彼は志波姫村を離れて仙台経由で東京に帰った。その晩は、私に引き止められて、一夜語り続けた。

葉は一九四五年十月十日(双十節)に発足した「新生台湾建設研究会」に参加し、「中華民國

旅日(在日)学生連盟」の渉外部員になり、一九四六年二月四日には推されて渉外部長になった。同年三月十二日には台湾同郷会で「中華民国国籍」の登録をしている。

この間に彼は全力を挙げて中国語の勉強をしている。日記も拙い中国語で綴り始めた。十一月二十五日の日記も中国語で書いているが、日本語に直すところなる。

《明治学院において、「漁光曲」を合唱、嬉しかりき。今や、日本の文化侵略に相対し、我が中国の歌を唱いて、祖国の文化に接するを得。また楽しからずや》(日記、一九四五年十一月二十五日)

「漁光曲」とは中国の有名な映画の主題歌である。

祖国中国の将来の発展を、葉は信じてやまなかった。

《八年の苦しい戦いをへて、祖国は今栄えある勝利に達した。我々はこの偉大なる努力の結晶が次の時代の飛躍力たるを信じて疑わない。

されど、我らの四面を見よ。数ある問題の中のわずかに一つが、解決されたにすぎないではないか。

とまれ。我らの祖国は自力を以て近代国家への発展に闘った。日本は自力によることあたわず、外力によって改革されつつある。

吾人は単に現在両民族の持つ生活水準を以て論ずるは、まだ足りない、いや、ほとんど本質には触れ得ないであろう。我らは底を流れる民族の動向をこそ見るべきである》(日記、一九四五年十二月三十一日)

葉はトルストイの『戦争と平和』を読んで大陸民族の根強さと唯物史観に触れている。

《戦争と平和》を読んで、その底に流れる、征服せられざる大陸民族、それは我が中華民族のごとく、——スラブ民族の漠としてつかみ得ざる深い根強さを感じる。

そして、トルストイのものの見方の中に、今日のソ連の行き方を暗示するものがあるように感ぜらる。

自由と必然とに対する見方こそは唯物史観の基礎をなしているように思う》(日記、一九四五年十二月十七日)

しかし、葉も中国と台湾の前途は茨の道と予測している。

《中国の前途、台湾の建設には幾多の困難があるう。しかしあくまで余は正気のために進まん》(日記、一九四五年十月十九日)

我々台湾人学生も戦後のインフレと食料難に悩まされた。親からの仕送りは絶え、生活の目処がつかなくなった。幸いにして、台湾人は連合国軍から時には特別配給品を貰っていたので、それを闇に流して、金を手にいれていた。大学生でありながら、農村から米を買って、プロー

カー並みのことをやったこともあった。

多くの台湾人学生は帰心矢のごとであった。「大和魂を太平洋にぶち込んで一日も早く帰国しよう」——彼らはこのような思いで、毎日遙かなる故郷の空を仰いでいた。

私はいささか異なっていた。あんな小さい島に戻って何になる、行き先は北京だ、と意を決していた。

「医学なんか止めてしまえ。帰国したら一番いい北京大学に入って、マルクスの言うがごとく、経済学を勉強しなくては、現代社会は理解しかねる」と私は考えていた。

二高の阿刀田元校長先生は「少なくとも大学を卒業してから帰国しては……」とアドバイスしてくださったが、私はそれに従わなかった。尊師の意に反したことは誠に申し訳なく、今に至るも心が痛む。

葉は相当迷った。台湾か、中国大陆か、アメリカか。

《近く俺を迎えんとする新しい生活はそも何ぞ。父母との対面、Heiraten「結婚」！ 台北大、中国行き、中国語の熟達、アメリカ行きなど……Romanticistたるべき》(日記、一九四五年十二月三十日)

《世界を知らねばならぬ。大陸へ行くぞ!!》(日記、一九四六年二月十五日)

葉は東大医学部で一年先輩の劉沼光^{りゅうしやうくわう}さんと知り合った。彼も台湾出身で、新竹生まれの客家、一高OBである。この人もあとで台湾大学に転校したが、そこで葉を中国共産党に引き入れたのである。東京滞在中に、劉さんが思想面でどれほど葉に影響を与えたか、日記には見られない。ただ一箇所にこう書かれている。

《東京に出てから特に丁氏、劉氏と接して鍛えられた論理的な欠乏よりの自覚が、余をして論理的に現実的に物を見せしむ》(日記、一九四五年十二月一日)

戦後間もなく、新聞でも、一般人との付き合いでも、我々はこんな言い分をししばしば耳にした——日本はアメリカには負けたが、中国には負けていない、と。これは単に日中両国の問題ではなく、日本の指導者が戦争責任をどう認識するかの問題であり、今後の世界平和に関わる大問題である。それ故、葉も私もこの問題を重大視した。

《中目先生来京。夜遅くまでだべり寝る。三つの問題について。1、将来の進路(医学? それとも社会科学?)、2、日本の指導者の中国に対する無反省、3、我々の生活問題。……日本の指導者は特に中国に対して全然反省しておらぬ》(日記、一九四五年十一月十八日と十九日)

葉はある日、電車の中で二高の蜂の校章を可愛い女の子に上げてから、彼の感想と見解をこ

う述べている。

《電車の中で十一歳位と七つ位の女の子がいた。大勢乗り込んで押されて倒れそうになったとき、姉の方が私と手をつないでやっと持ち堪えた。そのうちやっと席が空いて二人の可愛い姉妹はちょこんと座り込んだ。》

すると姉の方が私のボタンを見て「蜂、蜂、はち」と妹と顔を合わせてニコニコしていた。私はなんだか可愛くて、とっさに帽子につけていた小さな蜂章を取りはずして「ほら、はちだ」と言つて渡すと、姉妹は代わる代わる嬉しそうに見ていた。

返そうとした時に「上げるよ」と言うと姉妹は人懐っこい微笑を浮かべて、丁度電車が品川に着いたので「さよなら」と言つてにつこりした。

私はホームから暫く振り返ってみると、姉妹は寒そうにホームをかけて行つた。師走の朝風は冷たい。食糧の切迫した生活苦にあえぐこの日頃、何と可愛い子供たちだろう。

こんなに単純な、そして人のよい日本人を誰が一体こんな惨めな状態に陥し入れたのだろう。日に日に奈落に沈み行く人々、かつての美しき大和島根とうたわれたこの日本が、こんな惨状に陥つたことに一掬^{いっき}の涙を注ぐは、単なるセンチメンタリズムではあるまい。

七千万の大和民族の墮落は、決して大東亜の建設にとって幸(福)ではあるまい。我らは日本人をして反省すべき点は反省せしめ、正すべき点は正し、中日関係の禍根を除くはもちろん、

日本をその墮落より救わねばならぬ。

我らは日本の帝国主義を打倒した。しかし、我らは日本の滅亡を断じて望まない(日記、一九四五年十二月十六日)

プロレタリア尾行

葉は日本社会のどん底にある人たちにも接触しようとした。日記では、「プロレタリア尾行」として書かれている。

一九四六年一月二十三日のことである。午前中、先に電車の中で隣りに座っていた服装の悪い者に目を付けたが、尾行に失敗した。続いて三十歳前後のみすばらしい女性に出会ったが、これにも追い付いて行けなかった。

午後に新橋付近で三人の浮浪人に出くわして、接触に成功した。

《一人は十何歳かの少年、もう一人は二十歳の青年、そして四、五十歳の女。……》

私は尾行した。人通りの多い道を避けて、みすばらしい三人たちは元氣のない足取りで歩いて行く。

一時間ぐらいいしたろうか。電車通りに隣り合つた焼け残りのビルの陰に三人は入つて行つた。「三和組」の標札が目についた。

私は近くの石に腰を下ろして、『アカハタ』を読みながら、見るとはなしに彼らの挙動に注意したが、私の尾行を大して怪しむ様子もなかった。

少年は大丈夫だとささやいた。快活な美しい少年だった。彼らは藁縄を探し、焼け残りの板切れを盛んに集めて、それをくくり付けて、またとぼと歩き出した。

大通りを避ける。彼らの道程は相当に大回りである。でも、彼らの様子は電車に乗りそうもなく、また薪を背負っているところから、さほど遠方ではないという推論。余は尾行を決心す。一時間。ある焼け残りの小屋へ。余は蜜柑を十円買つてオーバのポケットへ。

「今日は、罹災こんちなされたのですか」私は聞いた。

彼らは精神的には健康だった。いずれも五月ごろの罹災者で、家のない転々たる浮浪人だった。なканずく、件の少年は一番立派で、善良で、心が美しかった。青年は少し抜けているようであり、女は少し狡猾そうであつた。……

1、少年二人、屋台店の水くみ手伝いして、一日に三十円（二人に）位収入が入る。外食券一枚 至2・50。しかし、その三十円はその日のうちに食つてしまつて残らない。三十円が彼ら一日の生活費としては決して多くはない。

彼らは飢えている。食わない日がある。それで金のある日は芋を買つたり、その他の物を食つたりして、使つてしまうのだ。三度三度のおまんまは彼らにはない。不規則な飢えと満

腹の交互が彼らを胃拡張にする。

彼らには配給の籍がない。浮浪者は町会でも手続きを厄介がつて入れないらしい。

彼らはもう宿命的に浮かばれない階級たることを感じ、あきらめて、官吏、町会に頼むような気力もなさそうだ。汚い格好で敬遠されることを彼らは身に染みて感じている。彼らは世の華やかな人々とは別人だと思つている。

2、彼らと同じ階級の浮浪者。進駐軍の残食物を貰う。弱肉強食。親分にがめられる。巡査も。巡査と親分の山分け。かつばらい。

一日に三回衣装の変更。しらみが多くなるまで着て、それを売り、新たにかつばらう。

3、少年の名は「三島守人」。余は保護されんことを祈り、名刺をやつた。

父に早く死なれ、みずばらしい家計のために働いて母は病死し、兄また肺病で、それを看護した妹も病で死に、件の少年学生は生き残りだ。彼は小学校を後二カ月で済むというときに勤めに出た。そのころは毎日毎日学校へ行きたくて仕様がなかつたそうさ。でも卒業証書はもらつた。中ぐらいの成績で。

我々は今日の日本の教育は選ばれた階級、ブル子弟の教育であることを知つている。我々は幾多の英才のうずもれていることを知つている。それは単に小学卒業のとき、成績の良くて上級学校に行かなかつた者のみを指すのではない。

私は今でもありありと同窓の何代林君を思い出す。いわゆる受験準備のときに、上級学校に行けぬ子の投げやりな、自暴自棄、単に卒業時、良成績の者のみではない。卒業後の彼らの生活苦。……教育の自由平等を！

彼は会社に住込みで勤めて、去年の五月罹災し、退職金で南京豆売りをやったが、ある疲れた夜、新橋地下鉄で寝てしまった日に、六百余円と南京豆一斗との全財産をガメラレタ。それ以来、住むに家なく、浪々の旅。上野はお巡りさんがうるさいが、新橋は良い所だ。巡査があまりうるさくない。

でも彼が汚い格好をして、何か露店に売るものを持って行くと、お巡りさんは、それはがめったのだからと言っては取り上げてしまう。聞けば、お巡りさんも気の毒な階級だ。

4、かつばらいはおつかなくて出来ない。毛布を干してあるのをかつばらって売り飛ばし、その金で食う。すると味を占めて、またかつばらう人々。

5、風の多いこと。家のないものはみな風を持っている。

余は少年に政治を説いた。これからの日本の政治は限られた民衆から遊離した人々によってなされるのではない。実にこの苦しみの中から、君たちがより鋭く現実を見詰め、やがて君たちの手によって政治を行うのである。選ばれた階級を恐れるな！

今次大戦中は民族戦線を作った。しかしファツショ、軍国主義は既に打倒された。我らは民

主戦線を作るべきの時なり。

余は共産主義者ではない。だが、現実の問題を学問的、科学的に解決する道を進まねばならぬ。

我々は常に困っている大衆の味方になり、彼らと共に悩まねばならぬ。大衆が何を考え、何を思い、何を欲し、どこに向かわんとするかを、我々はつかまねばならぬ。単なる理論から、あるいは学徒の潔癖性から、我々は大衆の動きに真っ向から反対することがある。しかしそれは大衆の恨みと反感を買い、かえってその反動を大にこそすれ、決して大衆を良い方向に指導していくものではない。

品川まで共に。米五升やる。ノートと鉛筆を。反省と記録は闘争の基礎だ』
葉の日記によると「尾行」はこの一回だけであった。

女性と

二高時代から大学時代にかけて、葉と私は異性愛についても多くを語った。

真理探究の過程において、一個人が異性問題をどう処理すべきか、または社会科学の学徒として、愛情の問題と男女平等の問題をどう認識すべきか。これらについて、深夜にわたって討論したことも、まれではなかった。ところが、それはある意味では空論であった。なぜなら、

二人とも恋愛の経験がなかったからである。

尚武の精神を貫ぶ二高時代でも、異性を求める心はもちろん我々にもあった。

《自分にとっては、心の奥底深く蔵されている異性を求める気持ち、異性の愛に飢えた気持ちが存している》(手記、昭和十八年十一月十六日)

ところが、真理の探究にひたむきな葉には、大学一年までは恋愛の機会もなく、「女」も知らなかった。

日本敗戦の翌年、一九四六年一月二十九日に、ある台湾の友達に鬼怒川に連れて行かれて、彼は初めて「女」に触れた。彼は詳細にその夜のことを記録している。

《Dotei に対する宗教的な考えのなくなった余にとって、行くことを防ぐ鎖はなかった。よ」という勧め、安全の保障、それに社会科学をせんとする余の学問の一環でもある。

しかも、その相手が Ebu な可憐なものであるのに引かれて、かかる一生に一大なることが、何の特異もなく平々凡々に行われたことは一大不可思議だ。

Dotei ということは余にとってはあまり問題ではない。

彼「彼女、以下も」は全く Ebu であった。去年の十二月に来たのだから、身の上はなかなか語るものではない。当然だろう。聞くのが過酷かも知れない。

しかし、家の生活に追われてきたものではなかった。まま母は何かの作用をなしたかも知れない。しかし、何にもまして、青森空襲に顔に負傷したことが、おとなしい彼の一生の転機となったことは、幾多の示唆と、幾多の問題を「数字分不明」知った。

しかし、宗教が何か崇高なものにすぎた更生の道を求め、一步一步神の道に近づかんとしなかったことは、彼に取って不幸であつたらう。

正しい清々しい生活への更生を余は勧めた。あまりにも Ebu だった。

そして、余と彼との間は、shobai-onna と kyaku の関係ではなくなった。少なくとも彼にはそうすることは、彼の社会では禁じられていることであるかも知れない。

しかし、彼は今日は気が変になったと言つて強く dakitsuite kia。余もまた今日一夜位は日頃と別の気持ちであつてくれと頼んだ。

余は妹か他の Ebu な musumesan に接するような気持ちだった。どうしてこんな純な、おとなしい、そして素直な onna が、彼の嫌な、媚びを売る、擦れ切った shobai-onna に思えようか。

余の社会科学に対する情熱は一生の問題だ。この瞬間にも余は学問の一環において人生の問題と闘っている。

気の毒だと思う前に「臉就是女人的生命」「顔は女の命」。運命の不思議に打たれざるを得ない。

しかし、彼一人を救うことはやはり若さから来る安価な sentimentalism[感傷主義]と heroism[英雄主義]以外のなんでもなからう。

我々は一人を救うにあらずにして、多くの人々と多くの力によって多くの無力な人々を救い、宿命的制度の殻を打破するにある。

余が dotei を破ったことを、彼は余に対してすまないと言う。しかし、余の dotei を破りし人が彼であったことは、余にとってある意味で不服はない。

余は今 Krankheit[病氣]は恐れるが dotei ということについては何とも思っていない。余にとつては dotei を神聖視するほど宗教的にはなれないし、また過去の情性にとらわれるほど保守的にもなれない。余は彼の気持ちを楽しんだ。本当に可愛く、そして気の毒に思われた。

余は彼を強く抱いて、その臉に余の臉を寄せた。かかる ubu な純な onna と始めて接することは余にとって不服ではない。

居れば居るほど借金がたまる制度、mi o utte しかも搾取される制度は彼らにとつて全くのろわるべき存在だ。泥沼だ。

夫や子を持たぬ老女がいかに惨めなるものかを余は語り、この泥沼より去ることを勧めた。

しかし、彼には自らここより去る能力はあるはずがない。憐れむべきかな。

もう私は shōjo でないのよ、と彼は言う。希望のないやけくそあるのみ。

余は寝られなかった。ただしんみり語りたかった。

あまりにも自然に何の気なしに余はここに来てしまった。

彼の名は T. S. だった》

その翌日である。「旅日(在日)学生連盟送別総会」が開かれ、葉も参加した。

《何と盛大なことよ。我らは今日かかる盛大な会を開き得ようとは夢だに思わなかった。昨夜、Joro して少し変な氣に余がなつていさえしなければ、今日の感激は更に大きかったかも知れない》(日記、一九四六年一月三十日)

さらに一日過ぎた。

《一日中無聊。Joro のことのみが頭にこびりつく。頭脳混乱して落ち着かぬ》(日記、一月三十一日)

もう一日たったが、彼は彼女に会いに行きたいとすら思った。

《思想混乱す。……Joro したことが、頭にこびりつく。何の気なしに、平々凡々に行つて、極めて自然に dotei を破つたようだったが、日のたつにつれて、そのことが頭に付き纏う。気の毒な S 子のこと浮かぶ。抱きしめた寝姿がいまだにちらつく。

今の俺にとつては、制し得られざるものは性欲ではない。情である。

帰国

前述のように、私は帝大を中退して、北京に直行する積もりであった。ところが、四方八方に連絡したが、大陸に行く船はない。私は遠回りの経路を選ぶしかなかった。すなわち、ひとまず台湾に帰り、そこから大陸に行くというコースである。

葉は私の意図を知って、彼も帰ることにした。
《余、中目氏の帰台を聞きて大いに帰りたくなる。アメリカにも行きたい。しかし、余はまず以て中国学生らしくなりたい。

今の余、及び中目氏にとって一大なる問題は実に医学に進むか、経済に進むか、もしくは他の学科に進むか？ 医学に一生打ち込むファイトはない！ しかし、手段として医学を修めよう。

台北に行くことにす（日記、一九四五年十二月二十六日）

配船の都合で、私が先に日本を離れた。一九四六年二月十日、上野の西郷さんの銅像の下で葉と会い、彼は東京駅のプラットホームまで見送ってくれた。

《一足先にと、中目氏は言った。「帰国の準備で忙しく、落ち着いて離日の心境を纏め得なかったのは残念だ。日本の古代文化発祥の地、大和奈良にもう一度行けなかったのも心残りす

る。これで日本を去るとは、どうもぴんと来ないね」と彼は言う。

「俺たちの理想達成のために、頑張ろう」と私は言った。

他去了!! 他去了!! 祈念他的海路平安!（日記、二月十日、原文は中国語）

船は横須賀港から出た。私は甲板から、夕闇に沈み行く日本列島を遠くに見やうて、感慨にふけた。もう一目、もう一目と名残惜しさに、私は一人で甲板に立ち続けていた。

二十年以上も全体主義に荒らされたこの国ではあるが、人は皆いい人だ。何といっても、ここは私の青春をはぐくんできた国だ、そして日本人の身振りで過ごした国だ。愛情は政治にはためにならぬというむごい考えで、私は初恋の人をここに残して、今や永別しようとしている。祖国中国への希望にあふれていた私ではあるが、やはり日本を去るのは悲しかった。

葉は四月二日に呉から出港した。日本を離れる前に彼はこう書いている。

《日本は「思想確立の故郷として永く余の心に残るであろう。余は romanticist なり。故に私は多くの美しい夢、思い出を残して日本を去ることができるような気がする》（日記、一九四六年一月二日）

出帆の日には彼は中国語でこう書いている。

《正午、出帆。日本の可憐の山河!! 再見!! 離別日本の感情很不能写在紙上》

ポルトガル人が麗しき島(Iha Formosa)と呼んだ私たちの故郷が、蔣介石の国民党政權によつてひどく荒らされていたとは、葉も私も、その他の多数の在日台湾人も、故郷に着く前は、全く知らなかった。

第三章 台湾で生きる

幾重もの苦難

失望

一九四六年四月八日、葉盛吉は五年ぶりで懐かしの故郷に帰ってきた。^{キシュウ}基隆港に着いた彼の第一印象はどうだったであろうか。

《埠頭にいる国軍「国民党の兵隊」は実力なし。幻滅的悲哀を感じず》(日記、原文は中国語)

一足先に台湾に帰った私も、同じような印象であった。遥かに台湾島が見えた時は、胸のときめきを抑えることができなかった。船が港に入り、埠頭のビルの屋上に「建設三民主義新台湾!」のスローガンが目に入ったときは「俺もこれからやるぞ」と意気込んだものであった。

ところが、上陸前に甲板から見たものは、ここが中国の地かと疑わさせるものだった。

立派な軍服を着た一人の中国軍将校が、シェパードを引っ張って岸辺を歩いて行った。数分後、なんと、この将校がアメリカの兵士に羽交い締め^{はが}にされて同じ道を歩かされて来たのである。私は自分の目を疑った。が、ここは夢境ではない、紛れもない中国の領土——基隆港なのである。

埠頭はアメリカ軍によって管理されていたのだ。中国の港が、なぜ外国によって管理されなければならぬのか。たとえ、戦争直後が故に、その必要があったとしても、中国の将校をアメリカの兵士が縛り上げて岸辺を歩かせるとは何事だ！

日本は戦争に敗れて、五十年も統治していた台湾を中国に返した。台湾人は中国への復帰を心から喜んだ、あたかも虐待された里子が実家に戻ったがごとくに。一九四五年十月、台湾人は大陸から来た中国政府の官吏とその軍隊を迎えた。その歓呼の声は空に轟きわたるほどであった。

ところが、蒋介石政府が台湾に送ってきた軍隊はみすばらしく、軍紀も悪かった。大陸から来た国民党の官僚は腐敗の極みを尽くし、日本が残した財産物資を「接収」して自分の懐に入れるに暇^{いとま}がなかった。

同じ中国人でありながら、大陸から来た、いわゆる「外省人」は、あたかも征服者のごとく

振る舞い、「本省人」の台湾人を虫けらのように取り扱った。要所のポストはほとんど外省人に占められてしまった。物価はうなぎ登りに上がり、生活は日に日に苦しくなっていた。

葉は台湾社会をこう批評している。

《社会は退廃とサボタージュ。貪汚と姦淫。Alcoholismus[アル中]に豚》(日記、一九四八年

一月十日)

「貪汚」とは汚職のこと、「豚」とは外省人にたいする蔑称で、「豚」が台湾に溢れていることを指す。

葉も私も台湾大学(元の台北帝国大学)の医学部に転入した。しかし私は大陸行きに奔走し、ともに医学を学ぶ気になれなかった。私の父は終戦後、旧満州で消息不明になり、親からの仕送りは全く絶えてしまった。幸いに、日本人と結婚した叔母が台北にいたので、助かった。葉は親から送金してもらっていたが、それはわずかなものであった。この生活苦を乗り越えるために、私たちは帰台して間もなく、いろいろなアルバイトをやらざるをえなかった。

葉が帰台して一カ月もたたない五月七日に、彼と私は台北開南商工学校(中等職業学校)の校長先生を訪れ、代用教員として雇用してもらえよう、お願いした。何のコネもなかったのに、快く採用してくれた。彼は動物課を、私は植物課を教えることになった。台湾大学医学部での

授業中に、教室の後ろの窓から逃げ出して、開南商工に行く日が続いた。ところが、アイスクリーム一個が十元に暴騰したのに、中学教員の時間給は何と十五元で、一銭も上げてくれなかった。これでは代用教員をやっても何の足しにもならない。

二人で露店を開いてシャツを売ったこともあった。食っていくためには大学生のメンツも何もあったものではない。台湾大学医学部の一年上の胡秀山さんは、我々の良い友達で、一高、熊本医大に学び、同じく日本帰りである。彼の父がシャツの縫製工場を開いていたので、そこからシャツを分けてもらった。

《七時より、二人でゴザを出し、児玉町に並べる。安いが、購買力無きせい、さっぱり売れない。しかも、我々の露店は末のほうで、照明としては微かに店より伝わってくる明りぐらいだ。しかも、並べているシャツも種類少なく貧弱だ！》

ちやうど、医学部の先輩が通りかかったので、頭を下げて買ってもらった。

《李さんが「Frau」奥さん」と来た。無理やりシャツ一枚買わず。……十一時半まで並べて、nachlos「気が抜けた」。氷を飲んで引き上げる》(日記、一九四八年七月三十一日)

書生が商売をやるのは何といっても無理なことである。二日目はこんな調子である。

《今日は「日曜日なので」午後から木陰に並べる。シャツのほかに本も並べる。シャツはさっぱり駄目だ。本を二千元ばかり売る。シャツ一ダースを小売りに売る。二百円しかない利！

もうシャツの露店は止めた！》

葉は手元にある医書売って飢えをしのごとも再三あった。

《金がなくて昼抜き。夕方、古本を売ってやっと露店のメシにありつく》(日記、一九四八年二月十四日)

《金乏症に悩む。……本を売るために東奔また西走》(日記、一九四八年三月二十二日)

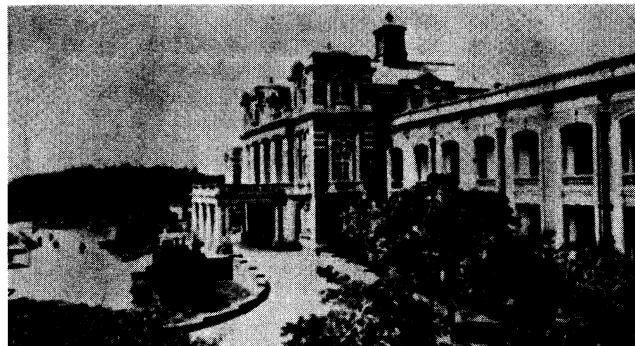
彼の身なりは質素そのものであった。いつも、あのただ一着の制服に運動靴。大学の小使いさんに間違えられたことが何度かあった。

生活苦のほかに、国民党の政治に対する不満も台湾社会に漲っていた。葉も私も、もちろん例外ではない。

《何もかも思う通りにならぬ。結婚問題、生活問題、社会現状、すべて難題なり》(日記、一九四六年七月二十四日、原文は中国語)

後で述べるが、結婚問題とは、彼が東京で知り合ったH女史とのことである。

一九四五年九月三日、重慶で行われた戦勝式典の一周年記念日に葉はこう書いている。



40年前の台湾大学付属病院

「台湾は一体どんな所なのであろうか。戦勝と言っているが本当なのだろうか。台湾は勝利の喜びを享受しているのだろうか」(日記、一九四六年九月三日、原文は中国語)

我々が転入した台湾大学は葉の言によれば、

「一番悪い、最も非民主的な大学になり変わっている」(日記、一九四六年十月二十三日、原文は中国語)

多くの日本人教授は帰国し、授業のレベルは低下する一方であった。

このように、葉は生活、社会、政治、大学、異性などの問題が、ことごとく自分の意にならないので、台湾に帰ってきたことを後悔した。帰台して十日ほどしかたつてないのに、既に悔やんでいる。

「理想は達せられず、人生はことごとくに錯綜し、万事

不順、心晴れず。東京より帰りしことを後悔す」(日記、一九四六年四月十九日、原文は中国語)
彼の姉がマニラから台湾に戻っていたので、マニラに行くことも考えた。アメリカ行きも考慮した。東京に戻ることも頭に浮かんだ。彼も私のように中国大陸にも是非行きたいと思っていた。五月二十四日の日記にはこんな事項を並べてある。

《東京、北京、マニラ、医学、語学、Liebe[恋愛]、Health[健康]》

台湾から離れたいという思いは、帰台後一年近く持ち続けた。一九四七年二月十六日の日記に、日本帰りのクラスメートがコンパを開いたとあるが、席上「日本行きを議す」と書かれている。

彼がこの島から出て行くには、もちろん幾多の問題に直面するが、決心さえつけば、実現できないものではなかった。だが、葉には優柔不断の一面があった。もし彼がこの時点で躊躇せずに離台しておれば、その後の人生行路は大いに変わっていたろうし、若い命をこの島で落とす悲劇は起こらなかったに違いない。

葉も、私のように理科から文科に転向しようかと、相当迷ったが、医学を捨てる決心はつかなかった。それでも文科の勉強をしなくてはいと、彼は台北の延平学院(台湾が中国へ復帰した後、台湾有志者によって創設された夜間単科大学)で社会科学の講義を聴講し始めた。

一方、私は北京留学の官費生のチャンスをつかんだ。台湾省政府が百名の公費生（官費生）を募集し、大陸の国立大学に派遣すると広報した。学費も生活費も保証してくれるし、願望の北京大学にも行けそうだし、これは、生活に困っていた私には僥倖（ようひん）であった。

公費生の試験の成績は、私がトップ・クラスだった。受験生の中で帝国大学二年生まで行った人は、私一人だけだったからである。すなわち、私は他の人より二、三年も多く勉強していたのだ。

それで、私は第一志願から第三志願まですべて北京大学とした。これは「私の意思を尊重せず、他の大学に回したら、絶対に行きません」という堅い意思を台湾省当局に表明したのである。主管の台湾省教育庁副庁長は三つの志願と同じ大学を書いた者がいる、と非難めいたことを言っていたが、それでも、私の希望通り、北京大学経済学部に行かせてくれた。

《今日の正午に、楊君「私」が基隆から発つ。九時半、医学部の細菌学教室で別れる。彼は黒い冬着の中山服「人民服」を着ていた。小雨が降っていた。

彼に英文の履歴書を持っていつてもらった、私も北京に行きたいので。彼とはこれで二度目の離別だ。一回目は東京駅のプラットホームだった（日記、一九四六年十二月五日、原文は中国語）

北京に着いて、私は幾つかの大学の医学部に打診したが、レベルは台湾より劣るということであった。社会科学を勉強するならともかくも、自然科学を専攻するのなら、大陸には来ない方がいい、と私は葉に返事を出した。

私は友の情に涙する思いがある。葉盛吉も、前述の一高、熊本医大に学んだ胡秀山さんも、私が台湾に残した老いたる外祖母と十一歳の妹の面倒をよく見てくれた。私が離台して間もなく、葉は淡水を訪れ、私の外祖母と妹を見舞いに行ってくれた。

《……私はおばあさんにこう言った。楊君とは兄弟並みの付き合いをさせてもらっていますので、困ったことがありましたら、どうぞご遠慮なく私に言い付けてください、と。……美津子「私の妹」は淡水駅まで見送ってくれた。「汽車賃はとても高いから、旧正月は「台南」に帰省しないで、必ず淡水にいらしてください」と美津子は別れに言ってくれた（日記、一九四六年十二月十五日、原文は中国語）

旧暦の正月の二日に葉と胡秀山さんは淡水を訪れている。

《おばあさんはいろいろご馳走を用意し、盛んに勧められて腹一杯食べさせられた。……午後はおばあさんと郊外の一農家まで行き、そこから、海？ 淡水川が、霧雨の中に望まれた。そこでも、若い人たちが年寄りを囲んで、トリンケン「飲酒」をしていた。辞退もきかず、無理

やり勧められてまた少しトリンケンする。……後で、美津子にお年玉をあげる」(日記、一九四七年一月二十三日)

胡秀山さんは一九四八年に葉と一緒に大陸旅行をした中で、二人は良い友達であった。

胡さんは一九九〇年に亡くなられたが、私が台湾に帰れなかったこの四十数年間に、兄貴分として、私の妹の面倒を見てくれた。妹の進学、求職、生活——ありとあらゆる問題で相談に乗ってくれ、援助してくれた。

私は一九八九年の天安門事件の後に、北京から暫時イギリスに移ったが、当時、重病でアメリカで治療を受けていた胡秀山さんは、何回もロンドンに国際電話を掛けてきて、私の安否を気遣い、生活に困っているだろうとて、イギリスに大金を送ってくださった。

旧制高校と大学時代に、胡秀山さんや葉盛吉君のような幾多の親友を持ち得たことは、神の恵みであると、私は今でも心から感謝している。

思想の左傾

人間というものは、絶望的な境地に追いやられると、思想が過激化するのは当然なのである。終戦後の日本でも同じく、過激思想が一時頭をもたげた。

ただ、帰台後、葉の思想がいかに左傾したかは、日記では読み取れない。台湾に帰ってから、日記はもうメモ帳のようなものになっている。二高時代に丹念に書いた「手記」は、このころは、もう書かないようになった。独裁政権のもとでは、このようなものを書くのは避けた方がいい、と彼は考えたのであろう。

台湾大学の四年間の読書は多岐にわたっている。日記と読書手記には、次のような書名が見られる。

『罪と罰』ドストエフスキー著

『復活』トルストイ著

『純粹理性批判』カント著

『国家と革命』レーニン著

『東大戦没学生の手紙』

『人類への奉仕』南原繁著

『マルクス主義と基督教』矢内原忠雄著

『若きニーチェ』

イブセンとドーデの作品など。

これはもちろん読書のごく一部で、葉がどのようにマルクス主義を研究したかは、これだけ

では分からない。

当時、多くの進歩的學生は、決して『資本論』や『反デューリング論』をかじって左傾したのではない。彼らは理論からマルクス主義に入ったのではなく、現実から入ったのである。言い換えれば、マルクスやレーニンの著作の理論的、学術的探究よりも、毛沢東や劉少奇の現実的、政策的なパンフレットを読んで感銘を受けたのである。

総じていえば、国家の前途を憂え、社会の正義を樹立しようとする当時の進歩的な學生は、マルクスの理論を抜きにして、ただ漠然と「搾取と圧迫のない社会主義社会」を理想境と見なし、その実現へと、ぐいぐい引かれて行ったのであった。

そして現に、国民党ファッショ政権に立ち向かっている共産党勢力が、大陸に存在している。この勢力はマルクス主義を掲げ、確かに国民党政府打倒に成功しつつある。

特に一九四八年ごろから、共産党の人民解放軍は大陸の大都市を北から次々と占領し、国民党軍の崩壊は間近に見えてきた。こういう情勢の下で、インテリが中共に傾いたのは、ごく自然な成り行きであった。わが葉盛吉も例外ではなかった。

台湾のインテリと學生の多くは、「二・二八事件」といわれる一九四七年の大暴動に参加した。日本敗戦後、台湾の統治者となった国民党政府は、腐敗の極みをつくし、台湾人に対して

暴政をほしいままにした。この一年半あまりの悪政に、台湾人民は自然発生的な暴動をもって応えたのであった。積もりに積もった民衆の憤懣は、瞬く間に台北から全島に広まった。この暴動は、最後に国民党政府の軍隊によって鎮圧され、一万人以上の人が殺害された。二・二八事件以後、インテリと學生の国民党に対する激憤は、自然と共産党に対する左袒に成り変わったのである。

当時、国民党と共産党のほかに、第三党というものが存在していたものの、その勢力は極めて微弱でゼロに等しかった。換言すれば、当時、葉のような憂国の士は、右か左かの二者択一しかなかったのであった。腐敗し切った国民党に与して、民衆の嘲的となるか、それとも共産党に味方して国民党を打ち倒し、富国強兵の「新中国」を打ち立てるか、このどちらかを選ぶのみで、いわゆる「第三の道」はなかったのである。

それ故に、共産党の傘下に馳せ参じたインテリの中には、マルキストのみならず、いわゆるヒューマニストやリベラリスト、それにナショナリストまでも含まれていた。共産党もこの実情を知っていて、彼らの参加をも歓迎したのである。「恐るるに足らず、入ってきてから思想改造(洗脳)すれば良いのである」と、共産党は「洗脳」の威力を信じていた。

こうして、真摯な葉は、中国の将来性を国民党にでなく、共産党に見出したのであった。ただ、大陸に住んだことのない葉盛吉たちは、共産党の実情を知る術がなかった。彼らはた

だ共産党の宣伝小冊子と共産党の大陸での戦果から、共産党を見ていたのであった。それ故に、彼らの中共観は相当観念的なものにならざるを得なかった。

台湾大学での活躍

虚偽を排し、真理を探究しようとする彼の意欲は、このような悪社会でますます高められた。暗黒を拒んで、光明を見出そうとする彼の意志は、このように歪められた社会でいっそう強められた。実行家として、彼は二高時代と同じく、台大の学生自治会の各方面で活躍した。台大の全校の学生自治連合会の理事、医学部の学生自治会の常務理事、クラスの代表、学生寮の幹事などと、葉は多くのポストを受け持った。

葉が帰台した一九四六年の十二月の末に、北京の女子学生・沈崇（ちんそう）が米軍兵士に強姦され、北京市の学生たちは十二月三十日に大規模な反米デモを行った。私たち台湾省の公費生は北京に到着して間もなかったが、大部分の人はこのデモに参加した。

私は生まれて初めて、中国学生のデモ行進に加わり、大いに感奮した。北京大学の女学生が激昂して、市内の広場で反米演説をしているのを見て、私は深い感銘を受けた。生け花や琴の稽古をしている日本女性ばかり見てきた私は、女性に対する認識を高めた。

北京のこのデモをきっかけに中国全土で学生のデモが起こり、翌年の一月九日に、台北の学

生も立ち上がった。ところが、台湾大学医学部は試験を前に控えているとの理由で、大した反応がなかった。葉は日記でこれに対する見解を述べている。

《北京大学女学生強姦事件で、各地に起こった対米デモが、台北にも及んだ。

医学部の多くの者が相変わず超然たる態度でいるのは全く残念だ》（日記、一九四七年一月九日）

この時分では、葉はまだ学生自治会の仕事を受け持っていなかった。

それから一カ月、前述の台湾人の暴動——「二・二八事件」が起きた。

日記によると、葉は直接この蜂起に参加していないが、二・二八事件が彼に与えた思想上の影響は大なるものであった。この時から、彼の国民党反対の態度は、決定的なものになったと思われる。

この間の日記は、一日わずか数行であるが、生々しい記録である。まず事件発生の二月二十八日。

《ついに来たるべき日は来た。記念すべき日なるかな！

夜八時より、戒厳令布かる》

《医学院でも集合あり》（三月一日）

《午後出て、町を回る。戒厳令は解かれたるに、なお町には武装せるゾル〔兵隊〕とケイサツのトラックが回っている。専売支局、最もひどくやられる》(三月二日)

《X氏より自転車を借りて町をぐるり》(三月三日)

《午前九時、中山堂で学生大会》(三月四日)

《一日中、雨で外へ出られぬ。夜中、銃声猛々し》(三月八日)

《今日より再び戒厳令布かれ、一日中銃声ものすごく、外へ出られぬ》(三月九日)

《依然として戒厳令。Wさんの所ぐらしか行かれぬ》(三月十日)

《やはり戒厳令。

少しは人も歩くようになった。

朝、児玉町へ出てみる。店のガラス壊れ、路上に死体あり。

午後、飛行機ビラをまく》(三月十一日)

《午後、Wさんと城内に行く。B〔外省人〕のみ歩いていて、若い人はあまり見当たらぬ。

死体目に付く。》(三月十二日)

《なおまだ戒厳令。道行く人は山ばかり》(Bはドイツ語 Berg〔山〕のイニシャル、山とは外省人に対する蔑称) (三月十三日)

《午後、北投に行く。憲兵多し》(三月十八日、原文は中国語)

《午前、法学部で白崇禧国防部長〔国防相〕学生に訓話あり》(三月二十七日、原文は中国語)

この二・二八事件の八カ月後に、光復(台湾の中国への復帰)二周年記念の官製デモがあった。それを見た葉は、日記にこう書き留めている。

《午後三時ごろより、仮装行列始まる。大したものなし。人出ばかり多い。

貧富の差、昨年より顕著。一方では仰々しく着飾り、一方ではボロをまとい、旗など持つ子供たちの多いこと。

人々の顔は憂鬱そうである。光復はどこへ!!

今日ここに集まったこの無表情の群衆よ。かくも多く集まるということは恐ろしい。

またいずれの日にこうぞろぞろと集まるだろう。その時こそ凄いだらう。

今度何かあれば深刻に違いない》(一九四七年十月二十五日)。

葉が学生自治会の理事とクラス代表になったのは一九四七年の末ごろのようである。

彼は一九四八年の七月三十日に『クラス通信』第一号を出している。彼自身がガリ版を切っていた。

廃刊になっていた『台湾大学自治報』も彼の頭に浮かんできた。

《自治報復活のことを考えしも、林憲と論じ、時期のいまだ熟せざるを知る》(一九四八年八月七日)

同年の十二月十一日には、自治会の理事会でパンフレット『医訊』発行が決議されている。これも葉の仕事である。その翌日には、

《一日中、『医訊』発行に忙殺さる」と記されている。

医学部の寮では『東門』という月刊の同人雑誌が出ており、彼は日本語で書いた「内地」大陸『旅行記』と中編小説「焰^{ほのお}」をそれに投稿している。彼は『東門』の十七期から編集の責を負っている。

《『東門』第十八期を出す。評判がいいようだ》(日記、一九四九年四月四日)

『東門』は彼の卒業前に二十期まで編集されたが、もう探し求められない。それ故、小説「焰」の内容は今になつては知る由もない。

一九四七年一月九日の日記によると、彼は

《創作「希望」を一気に書きなぐる。一万字ぐらいとあるが、これも保存されていない。

二高時代に、文語体で「冬の日」という自伝体的ものを書いたが、これは残っている。立派な日本語で六高受験前後のことを小説にしている。

自治会では、彼は主に文化部の仕事を受け持った。彼は医学部の講堂を利用して、二、三週間に一度、映画を上映し、安い入場料で市民と学生に見に来てもらった。主にフランスやドイツの古いフィルムで『白鳥の死』『面影』『別れの曲』『消え行く灯』などが上映された。

《夜、大礼堂の『Waterloo Bridge』映画名『哀愁』をやる。大当たり》(一九四八年十月二十三日)

自治会の文化幹事・顔世鴻さんがこの映画鑑賞会でも精を出した。顔さんに関しては後でまた詳述する。

映画の上映は自治会の財源を増やし、安い入場券で市民や学生に他の所では余り見られない映画を鑑賞してもらい、そしてまた学生たちの交流の機会を作った。

ところが、後で、営業税のことで税務方面から横槍が入り、当局から映画鑑賞会当分中止の命令が出た。

葉は学生自治会の幹部として、他の分野でも重要な役目を果たした。例えば、一九四八年八月に台湾大学と『自由新聞』の間に紛糾が起きたが、葉はその解決に奔走した。また、その年の秋に、莊学長が辞意を表明し、飛行機で大陸に戻ろうとしたとき、葉はこういう記録を残している。

《朝、五分の差で学長を松山飛行場より呼び戻す》(日記、一九四八年十一月四日)

寮の幹事として彼の活躍も多岐にわたっていた。

《夜、婦女会の謝娥女史と寮生六十名ばかり、寮の食堂で座談会を行う》(日記、一九四九年一月四日)

謝娥女史は台湾の有名人で、東京女子医専出身の医者であった。

葉はまたいろいろな読書会をも組織した。例えば、「The Growth of American Thought」(アメリカ思想の発展)の読書会は一九四九年の年初から四月四日まで前後七回にもわたって開かれた。

彼の多忙ぶりは卒業の年の一九四九年三月二日の日記に見られる。

《組、自治会、寮のことが錯綜して疲れる》

葉の人格と才気は台大で広く認められていた。台大の同窓生の林丕煌^{りひかう}さんはこう言っていた「葉盛吉以前に葉盛吉なし。葉盛吉以後にも葉盛吉は出てこないであろう」と。

当時の中国では、どの大学でも学生自治会は左翼の学生によつて握られていた。中共は学生自治会を通じて学生運動をコントロールしていたのである。葉は自治会で多くの左翼学生と接触していた。

私との再会

一九四八年の七月に、私は夏休みで北京から台北に帰省し、二年ぶりで葉と再会した。日本留学時代の旧友たちは、私を心から歓迎してくれた。

《午後、老楊「私」と Bolero「喫茶店」へ。胡「秀山」氏も来る。涼しい扇風機の下でだべる》(日記、七月二十五日)

私と葉との徹夜の「だべり」は何度も続いた。テーマは例のように政治問題であったが、今回はポスト国民党の新中国の建設問題が、我々の関心事であった。当時国共両党は大陸で死に物狂いの武力闘争を続けていたが、蒋介石の失敗はもう目に見えていた。私たち二人は、東の地平線に旭日が昇りつつあるを眺めて、希望に胸をふくらませていた。

一カ月あまりの滞在はあつという間に過ぎさつた。別れの晩に、二人でもとの菊元デパート付近を歩いていたとき、彼が私に言った一言が一生忘れられない——「正しい道を俺は死を賭しても歩き続けるよ」と。

《午後六時、中目、胡と Bolero で落ち合う。涼しい所だ。

後、円環「又は円公園、台北の有名な盛り場」でビールを飲みつつだべる。中目氏の送別だ。

胡氏はどんなに環境が変わっても付き合ひ得る人だ》(日記、八月三十一日)

別れの日が近づいてきた。

《夜帰ってから、十二時ごろまで中目氏とだべる。彼は二日に天津への直通で行くことになった。

別離再び近し。思えば名残惜しき哉。System I(日記、八月三十日)

これが私と彼の永別となるとは！

友情はとこしえである。が、個体は暫存の運命から逃れることはできない。

ところで、この日の日記の最後に書かれている System という一語は何の意味であろうか。

この字には組織、系統、機構の意味があるが、党の組織を指すのであろうか。それに感嘆符も付けられている。この符号は彼の決意を示すのであろうか。

死刑判決書には、彼の共産党入党は九月となっているが、この System という字は八月三十日に書かれている。時間的に見ても、この字を「党の組織」と解釈するほかにはないようである。彼は自分の入党の意思をこの字で現していたのであろう。そして、その意志の堅さは、感嘆符に見られるのである。

大陸旅行

一九四八年の九月一日から二十五日まで、葉と胡秀山さんなど医学部の学生五人が、上海、

杭州、南京、蘇州を訪問した。大陸の大学医学部の視察と、医学研究者との交流がその目的で、旅費は医学部と付属病院から出してもらっている。

葉が中国大陸の地を踏むのは、これが初めてであった。

《異国に行くような感じ》(内地旅行記)

と彼は基隆港から船出するときの気持ちをこう書いている。中国から五十年も隔離された台湾人は、中国大陸に赴くときに、皆そう感じるのであろう。

一カ月足らずの大陸滞在では、表面的なものしか見られなかったが、それでも、彼は中国社会の貧富両階層の厳存を身に染みて感じた。

《金持ちにとっては、世界のどこにもない、あらゆる便利と享樂の得られる上海。貧乏人にとっては、実に不便な、そして実に住みにくい上海。

前者より上海を見れば、中国は天晴れ世界一流の文明国であるし、後者の目よりしてみれば、中国はなお数世紀も遅れたる未開の国である。

時代を異にすべき二つの世界が、同一空間を占め、同一時間に存在しているところに、上海の持つ畸形的、奇怪なる性格がある。あらゆる階級に選り分けられて、その一は互いに他を知る由もない》(同上)

ここで葉は上海と台湾を比べている。大陸には階級の問題があり、台湾には階級問題がいわ



大陸旅行、上海中山医院の前で、後列中央が葉盛吉、1948年9月4日

ゆる擬似民族問題に隠されている、と彼は言う。
《台湾において、我々は過去において日本人を犬といい、現在ではまた外省人を山といって、憎悪の対象としているが、こちらにくると山なんてことは、もう一笑だにもしない。

すなわち、こちらではあらゆるclass「階級」の人が集まって、一つの社会構成をなしている。そこには貧乏人、乞食もあり、人力車夫、三輪車夫、物売り、難民、ハイヤーに乗るもの、ポリ、商人、門番など、あらゆるものがある。そこにはただclassの問題はあっても、race「人種、民族」の問題は介在しない。

しかるに台湾では、生活の多少の相違からくるものが、たやすくraceの問題とからんで、ひいてはrace間の憎悪を醸し出すのは、いわゆる外来のものが一つの統治、ないし支配階級を形成し

ているからである。外来者自体では一つの社会構成を持たない。

そこにおいては、必ずrace間の憎悪はclass間の憎悪に先立つものだ》(同上)

葉がここで言っている問題は、古くて、新しい問題である。この問題の解決に、台湾人は今でも異なった意見を持って、お互いに論争し合っている。そして、大陸の中国人にも異なった意見が存在している。

葉は三週間余りの滞在で、大陸の空気を思う存分に吸い、中国人の計り知れぬエネルギーに圧倒された。

《中国社会の底には、我々のわからに知り得ざる深刻なる潮流が渦巻いている》(同上)

そして彼は中国の将来に目を向けてこう書いている。

《中国人は実にエネルギーで強い国民だ。

しかしながら、そのエネルギーは自らの民族の中における生存競争のために、お互に磨り減らされつつある。そしてそのエネルギーは、ついに外部に向かって発散をしない。

しかしながら、このエネルギーの自らなる摩擦が止んで、それが外部に発散される日は、中国民族が世界の歴史にその光輝を放つ日である。

政治的統一と安定の日、そして並びにその繁栄を、我々は歴史に例を求め得る》(同上)

大陸旅行で、葉の視野は飛躍的に広げられた。自分の目で見てきた中国大陆の現状が、彼のその後の思索に大いに役だつたに違いない。

葉たちは上海で中秋の節句を迎えている。

《今日は中秋。各自行動をとる。胡氏と一緒に出る。……中山公園は整理なく、草ぼうぼう。……草の上に寝ころぶ。雲が矢のように飛ぶ。……威理「私」のこと、彼女のことを思う。もう台湾を出て二週間余りになる》同上

彼と私は台北で別れたばかりである。友が、自分のこの寝転んでいる同じ陸地にいる。彼は感慨ひとしおであつたのであろう。

九月二十三日、船は上海港から離れて台湾に向う。彼は、また友に思いを寄せている。

《淋しく帰省し、そして淋しく遠く北京へと去つて行つた威理のことを思う。会つたかと思うとまた直ぐ別れ別れになつてしまつた》同上

先ほどの「彼女」とは日女史のことである。内地旅行記には、また二カ所に彼女のことが書かれている。

《もう秋だ。万目秋冷をおぶ。旅愁更になけれど、彼女を思う》同上

《十一時過ぎ、電車で帰る。彼女のことを思う》同上



『台湾大学学生新聞』に発表された葉盛吉の大陸紀行文「内地归来」。
1948年11月27日

H女史と

葉が日本から台湾に帰る前に、偶然、新宿でHと知り合ったことは、第二章の末尾で述べた。

帰台後、葉はHを連れて、故郷の新宮に戻ったが、彼の父母はこの二人の付き合いに反対し、Hは翌日、新宮を離れざるを得なかった。彼の両親は、葉に彼女との絶縁状まで書かせた。

それでも、葉とHの交際は絶えなかった。二人は台北で、一週間に一、二度は会っており、この状態が二年ほど続いた。彼女の家に泊まることもしばしばあった。

一九四六年に、Hから彼に送られた手紙が、三通残っている。その中にはこう書かれている。「……お互いに信じ合い、慰めて下さるものは貴方一人だけです。……その後、ご両親様の御機嫌、いかがでしょうか。何となく気にもかけますが、一方私たちを理解して下さらない情け無さに、気がいらいます。……今はすべて貴方にお縋^{すが}りするほかございません。どうか早く物事が円満に運べるよう待っております。この問題は貴方様の意思一つで解決できると信じます」(五月四日)

「私はもう貴方の許から離れられないことは事実です。……どうか希望に生きて一生懸命、勉強してくださいませ。海外へ飛び出すなんて言わないでください。お願い申し上げます」(八月十八日)

彼の日記には、毎回の出会いは、《涙》《可憐なるか》《彼女不機嫌》《気分悪し》と書かれていて、愉快な事一つも記されていない。

《彼女は独身を決心、余にも独身でいてくれと言う。正午、別れる！ これで最後だ！ 憐れな彼女よ！ 涙流るる》(日記、一九四六年七月十九日、原文は中国語)

最後の離別といいながら、翌日、あるいは数日後にまた会っている。こういう「最後の別れ」が何回も続く。

《俺は彼女を愛しているのであるか、自分でも分からぬ》(日記、八月十一日、原文は中国語)

この年の旧暦大晦日の晩、彼はこう書いている。

《今夜、この大晦日に、僕に行くことを待っているところが四カ所ある。

まず第一にH、第二、大正街の家[葉の実父]、第三に淡水の楊君[私]の所、第四は新宮の家[葉の養父]。

そして、結局はどこへも行けず、下宿で寂しい寂しい年の暮れを送る》(日記、一九四七年一月二十一日、原文は中国語)

彼は彼女にゴールド・リングを買ってあげたり、彼女の妹が店を開くというので、医書を買

って金を工面したり、彼の例の達筆で彼女の似顔を描いてあげたりしていた。

二人の仲は第三者の深く知るところではない。ただ、父母の強力な反対さえなければ、ことは進んでいったと思われる。Hとの二、三年の付き合いは、彼に喜びを与えず、かえって深刻な悩みを負わせた。

台湾に戻ってから、彼は幸運に恵まれていない。国民党政府の政治圧迫、エゴイズムの台湾社会、恐ろしいインフレ、耐えきれぬ生活苦、非民主的な台湾大学、加うるに、このHとの悲劇——彼は心身ともにくたくたになってしまった。

二人の関係は一九四八年になるとだんだん途絶えていく。

《旧の正月。……午前、大正街に行く。Hは久しぶりに何となく美しくなったようだ。ただ壁あるを感じることは、限りなく淋しかった。なぜだろう?》(日記、二月十日)

その年の夏、彼が私と一緒にシャツの露店を開いた晩である。

《偶然にも、彼女と彼女の母親、妹、弟などの来るのにつづかる。あとは気付かぬようだったが、彼女は隣りの子供の石鹸売りまでは気付かなかったらしく、長いこと石鹸を見ていたが、歩こうとしたとたんに視線が合った。一寸赤らんだ、狼狽した顔をしてスタスタと過ぎていった》(日記、一九四八年七月三十一日)

《Bus stop「バス停」で彼女に会う。八月の初め、中目と児玉町でシャツを売って以来のこと。双方とも無言》(日記、十月十七日)

彼女との最後の対面は日記によると一九四九年九月五日である。後述するが、この時、葉はもう既に台南の郭淑姿女史と婚約していた。

《夜、久しぶりに彼女に会い、いろいろ話しする。感奮興起》

入 党

葉盛吉が共産党の地下組織に参加したのは、前述のように、判決書では一九四八年の九月となっている。

台湾大学医学部の共産党の細胞は最初四人で、責任者は劉沼光氏であった。彼は東大で葉の一年先輩で、東京で既に葉と接触があり、思想方面で葉に影響を与えていた。二人が台湾大学に転入してからも、接触は頻繁であった。葉の入党は、彼自身の思想によるのは言わずもがなであるが、劉氏の大きな働きかけがあったのも確かである。

一九四九年の八月下旬、劉氏は命からがら大陸に逃れた。憲兵が玄関に押しかけて来たときに、彼は裏庭の垣根を乗り越えて逃亡したそうである。

劉氏がなくなつて、葉が医学部の細胞の責任者となつた。一九五〇年に葉が検挙されたとき、この細胞のメンバーは三人だけで、小さな組織であつた。

中国共産党は台湾に中共台湾省工委を作り、その責任者は蔡孝乾^{さいこうけん}、または蔡前^{さいぜん}であつた。中共の台湾での組織は一九四七年の二・二八事件のときは、わずか七、八十名の黨員しかいなかったが、事件後三年で九百数十名に膨れ上がった。これらの黨員は百近くの地下組織を作り、そのうちの一つが学生工作委員会、主に各大学で地下工作をしていた。葉は共産党の最末端組織の責任者であつたのである。

彼が一体どんな非公開の活動をしたのか、もちろん日記には何も書かれていない。当時の状況から推測して、恐らく葉は学生自治会の公開活動を通じて、周りの学生に働きかけたのである。真理探究のためにいろいろな読書会を開き、刊行物を発行し、それによつて学生たちに現実社会をより良く見詰めてもらうように努力したのである。

これらの活動は学生たちの政治意欲をあまり、国民党政府に恐怖感を与えていたに違いない。葉は自分の活動が台湾の民主化運動に一役を買うことができると確信していたのである。それ故に彼は前述のごとく「死を賭しても」やり続けたのであつた。

一九四七、四八年、大陸では、共産党軍が国民党軍に対して攻撃を強め、次々と大戦果を挙げていた。あたかもこれを支援するがごとくに、大都市では学生たちが国民党反対の連続的なストとデモを敢行し、非軍事手段を用いて、国民党政権の崩壊に拍車をかけていた。

台湾も孤島ではない。大陸の学生運動が漸次台湾に波及してきた。北京は一九四九年一月、共産党軍に占領され、三月に入ると、首都南京はもう風前の灯であつた。この時期に、台湾の学生運動は最高潮に達した。

三月二十九日の夜、台北市の大学、高校、中学の学生たちは、台湾大学法学部の運動場に集まり「青年節」の祝賀大会を開いた。そして会場で「台北市大、中学校(高校を含む)学生連合会」の成立が宣言されたのである。台湾の全学連ともいえるこの組織の成立に、台湾当局は驚愕した。

台湾省主席・陳誠は四月六日に台湾学生運動の中枢・台湾省立師範学院(旧台北高校、現国立台湾師範大学)の授業停止を命じ、学生的大量逮捕を敢行した。その他の学校も数日間、憲兵によつて包囲された。これが「四・六事件」といわれるものである。

葉がどの程度この事件に関与したかは、日記では判断できない。下記はこの数日間の日記か

らの抜粋である。

《正午、台大と師範〔学院〕は第一回のデモを行い、警察本局を包囲、警察の学生殴打に対する五カ条要求を総局長に提出し、答應せしめた。ピケットは必須なり》(三月二十一日)

《青年節祝賀の夕べ、法学部のグラウンドで。ストームあり》(三月二十九日)

《学生逮捕始まる。各宿舍 Sol〔兵隊〕に包囲せられる》(四月六日)

《病院にはなお Sol の警備。登校する者少なく、人心落ち着かず》(四月七日)

《寮生八十名ぐらいい帰省す。なおも逮捕ありのウワサ飛ぶ》(四月八日)

《早朝、父、今次の事件で心配して「台北に」来る》(四月十日)

《正午、本部にて学生大会あり。本四・六事件も一段落す》(四月十二日)

二人のヒューマニスト

葉の二年下の医学部学生に顔世鴻^{がんせいこう}という人がある。彼は一九五〇年一月に葉の紹介で共産党に入党した。

顔さんは英、独、仏、日、中、ラテン、ギリシャの七カ国語を学び、中国の古典に対する造詣も深い。博学多識の士で、文才に^た長け、医学部で異彩を放っていた。一九四八年十一月二十三日、葉は下級生たちとだべった後に、特に顔さんについて日記にこう書いている。

《顔世鴻氏は面白い男だ》

その後、顔さんは自治会の文化幹事として、自治会理事の葉と行動を共にすることが多かった。

彼は葉とほとんど同時に逮捕されたが、懲役十二年の判決を言い渡された生き残り組である。顔さんは、日本統治時代に既に有名になっていた、重罪人を監禁する火烧島に、何年も拘禁された。ちなみに、こんな場所を国民党政府は「緑島」と改名した！

顔さんは一九八二年に中国語で約三万字の獄中の回顧録^{した}を認め、一九八八年には、これに「霜降」という題をつけて、約十六万八千字に加筆改稿した。この稿の最初に献辞が載せられている。

「S. Y. に捧ぐ」

「S. Y.」とは葉盛吉(Shengchi Yen)のイニシャルである。

顔さんはこの稿を本にして出版する積もりはないと言われ、そのコピーを送ってこられた。

「『葉盛吉伝』の著述に十分利用できれば」との有り難い意向である。以下の叙述は「霜降」からの借用が多い。

この回顧録に顔さんの入党宣誓式の様子が書かれている。

時は一九五〇年一月二十三日の夜、場所は台北の某地。顔さんは「私はもともとアナーキズムの信奉者で、ボルシェビキや毛沢東とは縁もゆかりもなかったのだが、葉さんの人格にほれ込んでしまい、また人生体験の上で彼にどうしても及ばなかったというだけのことで、彼に弟子入りをしてしまった」と回顧している。

ところが、宣誓式で顔さんは、中国共産党が旧満州と華北での土地改革で、地主階級に対して血の粛清を行ったことに異議を唱え、立ち会っていた上司の党員陳水木氏(仮名「老張」と一時間にわたる激論となった。結果的には顔さんが相手を論破したが、この論争で葉は始終、顔さんに与したという。

葉と顔さんのともにヒューマニストなる一面がここでも見られるが、それと同時に、二人の中国共産党に対する無知があらわに出ている。前述のように、大陸に住んだことのない台湾人は、中国共産党の実態を全く知っていなかったのである。

前にも述べたが、葉の日記には地下活動の事は書かれてない。ただこの晩の宣誓式についてだけは

《夜Sui Piあり》

と記されている。

Sui Piとは間違いなくC Pであり、Communist Party(共産党)の略称である。これは日付けが顔さんの回顧録と一致しているので確定できる。

顔さんの回顧録にこんな一段もある。

顔さんの父親は古いに長けていた。ある日、葉が彼の家を訪れたが、帰っていった後に、彼の父親はこう言った。「何と惜しいことよ。彼は最高の人材だ。ただ喉元から鬼の声が聞こえてくる。行く先は長くない」と。

台湾大学を卒業して

葉は一九四九年の六月に台湾大学を卒業している。

卒業論文のテーマは「Psychiatric Approach to Nietzsche(ニーチェに対する精神医学的考察)」で、サマリーは中国語で書いているが、本文は日本語である。

論文の結論はこうである。

《ニーチェの作品の全体を通じて流れる高い調子、暗示的内容、奇妙な表現法などの跳躍的性格は、やはり病気の問題を考慮しなくては理解できない》

卒業論文の指導教師は精神科主任の林宗義先生である。林先生は葉の東大の先輩で、帰台後、台湾大学で教鞭を執っておられた。

卒業後、葉は台湾大学付属病院第一内科に勤めたが、無給であった。勤めていく内に、彼は臨床医はつまらんとつくづく思った。

《医者となることが、ますます詰まらなく感ぜられる》(日記、一九四九年十月十六日)

《雑務に追われる詰まらない医者の生活》(日記、一九五〇年一月十八日)

葉の日記に、大学卒業前後の台湾社会を反映している箇所が若干ある。

一九四九年四月二十三日、首都南京はついに共産党軍の手に落ちた。

《戦況、盛んなり。物価三倍に暴騰す》(日記、四月二十五日)

同年十月一日、中華人民共和国が北京で成立、十一月には共産党軍は台湾の対岸のアモイ、広州を占領し、惨敗の国民党軍の一部は台湾に逃避して来る。

《光荣ある大捷の(?)国軍負傷兵二百名が当病院へ来るそうだ!》(日記、十一月二日)

中国大陆を失った国民党は、その兵力の一部の補充を台湾人に頼るほかはなかった。ところが、台湾人の兵隊さんが歌っていたのは、何と戦前の日本の軍歌であった。

《入隊本省籍兵士歓送のデモあり。その歌う曲「天に代わりて、不義を討つ……」に同じ》

(日記、一九五〇年一月十二日)

中国語を知らない、もしくは習いたての台湾人は、軍歌といえば日本のものとならざるを得なかった。

一九五〇年一月ごろに、軍医徴用の話が出た。軍医を一カ月やって台湾大学に戻れば、有給医師にしてくれる、ということである。行く先は台湾の南部高雄の付近の鳳山市^{ほうざん}で、台湾防衛司令部・軍官訓練班の医務所である。

葉は鳳山に一カ月いた。日記には、その医務主任が左傾していると思われる、と書いてい

る。

《この二晩、続いて徐州会戦の話を医務主任より聞く。現代三国志。Linkverschiebung? [左傾]》(日記、一九五〇年一月二十八日)

《主任はLinkverschiebungかな?》

(日記、二月二十一日)

中国共産党軍が既に大陸を制圧したこの

何より暇な人。
軍医が本國より来た。居る。葉も
大分。有る。有る。
2月21日(星3) 晴
最後の夜。
朝。は。は。は。サイン。Bork。は。は。は。
書。は。は。は。病。房。は。も。Mikro-
scope。の。を。は。は。は。に。な。つ。た。
主任は Linkverschiebung
かな?
2月22日(星3) 晴
朝。風。は。は。は。入。る。短。い。一。月。
夜。の。手。傳。は。は。は。の。か。一。番。
面白。い。
サイン。Bork。は。は。は。
2月23日(星4) 晴
台北。の。主。張。の。通。路。は。は。は。
空。中。に。は。は。は。の。通。路。は。は。は。

葉盛吉の1950年2月
21日~23日の日記

時期には、国民党の軍隊内部までも、左向きの傾向が見られたのであった。

二月二十三日、葉は鳳山を去り、台湾大学付属病院に戻った。確かに有給の職は与えてくれたが、彼はそれを友達に譲って、自分は台南の南にある潮州のマリア研究所に行った。研究所の所長・謝猷臣氏の招きに応じたのであるが、葉は臨床医よりも医学の研究がしたかったのだ。潮州に着いたのは三月の末ころであった。

結婚

卒業して間もなく、一九四九年七月二十七日に、彼は台南の郭淑姿かくしきさんと婚約した。

郭さんは前年の十月二十四日、台北に来て、葉に会っている。来訪の目的は、郭さんのお兄さん・郭朝三氏のことを葉から聞きたいためであった。

第二章「浪人二年」の一節で述べたように、郭朝三氏は葉と台南一中で同窓、中学卒業後、二人は一緒に東京で二年の浪人時代を送った。郭朝三氏は旧制一高の受験に失敗し、後、海軍に入り、昭和十九年、サイパン島で戦死した。

郭淑姿さんに会った翌日、葉は日記にこう書いている。

《郭氏の妹に手紙、はがきなど二十七枚渡す》(日記、一九四八年十月二十五日)

この手紙とはがきは、日本留学時代に葉と郭朝三氏を取り交わしたものである。
葉の「自叙伝」にこの間のことを詳しく書いている。

《一九四四年一月、郭氏は海軍軍属として南方に発った。私は激励の信を送った。東京生活に行き詰まった彼の開いた活路だったが、そのまま帰らなくなるとは、神ならぬ身の知る由もなかった。彼はラバウル(?)おそらくトラック島へ行ったのだろう。

その春に、彼が防空壕の中で、もれ入る薄明りの下でしたためた手紙が、二度届いたきりで、行方不明となった。

それには、東京の空をどんなにか懐かしんでいたかが、良く表れていた。

彼とのこの尽きない思いを込めた便りは、
後年不思議な因縁を結んだ》



郭淑姿女史と結婚、1949年12月24日

縁談は郭淑姿さんの来訪から始まった。
郭さんの父・郭孟揚氏はキリスト教会の長老で、台南の知名人であった。この教会は台南基督教長老教会に属し、今は台南民族路教会と呼ばれているが、九十年の長い

逮捕

赤狩り

いわゆる宗教とか信仰にすぎること、祈ることは、私には非常に困難なことです。……《一九四九年十二月七日》

一九五〇年一月三十一日、中国人民解放軍総司令部は、チベット以外の中国本土全域を占領した、と発表した。「民心を失わば、必ず天下を失う」と言われているように、国民党の敗北は、その独裁と腐敗に根本原因を求めることができよう。一九四九年十二月八日、国民党政府は台北に遷都し、蒋介石は十二月十日に重慶から命からがら台北に逃避せざるを得なかった。中国大陸を制圧した共産党軍は、一九五〇年、一年内に渡海して台湾を解放すると宣言し、着々と作戦準備を整えていた。一方、台湾に逃れた国民党は、この島を反共と「反攻大陸」失地回復の根拠地にしようとして、いろいろの手を打ち出していた。そのうちのひとつが赤狩り、すなわち、島内の共産党の地下組織の撲滅である。

この年の六月二十五日に、朝鮮戦争が始まった。それにともなって、反共活動がアメリカで活発となり、いわゆるマッカーシズムが一九五〇年から一九五四年まで横行した。共産主義の



車で結婚式場に赴く、1949年12月24日

歴史を持っている。

郭淑姿さんは葉より二つ年下で、当時、土地銀行の台南分行に勤めていた。

婚約してからも、葉はもちろんだれにも自分が共産黨員であることを口にしていない。ただ、郭孟揚氏夫妻宛ての手紙で以下のような注目に値することが書かれている。

《……しかし、もっと重要な問題(それは現時局においては、十分説明申し上げにくいことですが、けれども)が伏在しているのであります。かかるより根本的、より必須的な問題は、たとえ現在表面化しなくても、将来かならず一度は遭遇することでしょう。……

台北における宿舎は別考慮にしましょう。明年中にいかなる大変動が起きるかも、予想できませんから。……

脅威が誇張され、「赤狩り」によってアメリカの多くの著名人と団体が弾圧された。

国民党の「赤狩り」は一九五〇年から一九五三年までがそのピークであり、時間的にマツカーシズムと一致する。これは決して偶然ではなく、アメリカはグローバルな反共政策の一環として、台湾をもその前哨基地として措置していたからであった。ここにアメリカ政府と国民党政府の利害の一致が見られる。

一九五〇年五月十三日、台湾の国防部総政治部主任・蔣経国は中国共産党の地下組織八十余単位を摘発し、中共台湾省工作委员会の最高責任者・蔡孝乾^{さいこうけん}らを逮捕した、と発表した。

歴史とは変転極まりないものである。蒋介石の長子である蔣経国は、若い時にソ連に留学し、ソ連の共産党員であった。その彼が、今や共産党弾圧の総指揮者になっているのだ。

一方、中国共産党の内務部長と中央委員にまでなっていた蔡孝乾は、今回逮捕されて間もなく、寝返りを打ち、強制されたのであろうか、国民党の手助けをし、「赤狩り」に一役買ったといわれる。彼は一九五〇年一月二十九日に逮捕された後、台湾にある共産党の地下組織を白状し、五月三十一日の晩には、ラジオを通じて、台湾省と大陸全土に向けて「反共声明」を発表した。

共産党員的大量逮捕のニュースを、葉盛吉は五月十四日に台南の南にある潮州で知り、急に

で台北に戻った。

《Geld[お金]が来たので、それに昨日のnewsも面白かったので、今夜上北してみることにした》(日記、五月十五日)

台北であちこちに当たってみたが、確かな情報は得られなかったようである。

《Dr. Yen[顔世鴻氏]に会って、big newsをや。》

General Hospital[台湾大学の付属病院]が魔の殿堂のように見えた》

と十六日の日記に書かれている。

葉は、魔の手が既に付属病院に伸びて来た、と言いたかったのであろうか。なぜなら、三日前に既に付属病院の第三内科主任・許強氏^{きょうけん}と眼科主任・胡鑫麟氏^{こきんりん}が、五月二日に外科の助手・郭琇琮氏^{かくしゅうそう}などが逮捕されたのである。彼らはみな地下の共産党員で、葉の恩師と先輩であった。

潮州に帰る前に、彼は台南で久しぶりに妻と会ったが、これが最後の対面と彼は予感したであらうか。この時、彼の唯一の遺児は、既に母親の体内に宿されていたのであった。

二十一日に潮州に戻ったが、台中でもここでも《So[兵隊]の多いこと》に彼はびっくりしている。

それから一週間後、五月二十九日の午後四時に、彼は潮州マラリア研究所で逮捕された。謝

献臣所長の強い要求で、憲兵は致し方なく所内では手錠と足かせをかけさせなかったという。葉はそこから台北の刑警総隊に連れて行かれた。

葉盛吉たちが逮捕から逃れるには、淡水と布袋の二つの漁港から、大陸に脱走する方途があったが、この年の四月にはもうこの二つのルートは途絶えてしまっていた。

葉とほとんど同時に逮捕されたのは「学生工作委員会案」(学委案)の四十四名であった。その大部分は大学、高校で活躍していた共產黨員である。

摘発された案件(単位)は百近くあり、台湾島内の共產黨員がほとんど一網打尽となった。

前述のように、蔡孝乾は中共台湾省工作委员会の総責任者であったが、逮捕されてからは、他の黨員に「白状しなさい。三カ月の感化教育で終りだよ」と唆したといわれる。

蔡は台湾人であるが、大陸に二十五年以上も滞在していた。大陸の事情を知らない多くの黨員は、彼のこの一言を信じた。

中共台湾省工作委员会委員兼宣伝部長の広東人・洪幼樵は記憶力抜群で、全台湾島の九百数十人に及ぶ黨員の名前と百近くの支部の責任者を覚えていた。

転向したこれらの最高指導者の何人かは、蔡孝乾を含めて、死なずにすんだが、多数の中級と下級の黨員は命を落とした。銃殺されたのは、共產黨員と見なされた人を含めて、四千人を

上回るといわれている。その中には我が葉盛吉も入っている。

獄中で

「学委案」で逮捕されたものは十八歳から三十一歳までの学生で、大部分がエリートである。彼らはあちこちの監獄を引き回されて、一九五〇年九月二日に台湾省保安司令部軍法処の監獄に移された。ここは日本統治時代の台湾軍司令部経理部の倉庫を改造したもので、道路の向かいには台湾大学の医学部である。

葉の台湾大学同窓の顔世鴻さんほとんど同時に逮捕されたが、彼の回顧録によると、二十平方メートルの牢屋に三十人余りの犯人が入れられて、夜寝るときは大変であった。一日二食で、飯の量は制限されていなかったが、副食はスープ一碗のみ、中身は野菜ばかりで、肉や魚は絶対に入れてくれない。時にはガラスの破片がその中に混ざっていた。

毎朝の洗面と嗽は室外に出て、何十人もの人が五分以内に終わらなければならない。これはまったくの張り合い競り合いの「戦い」である。顔さんは葉のこの時の動作をこう描いている。

「私は檻の節目から毎日葉さんを見ることができた。彼は顔を洗いに行くときは、毎回例外なく一番最後に牢屋を出て、一番早く戻って来た。他の人のように一分一秒を争うことはなかった」

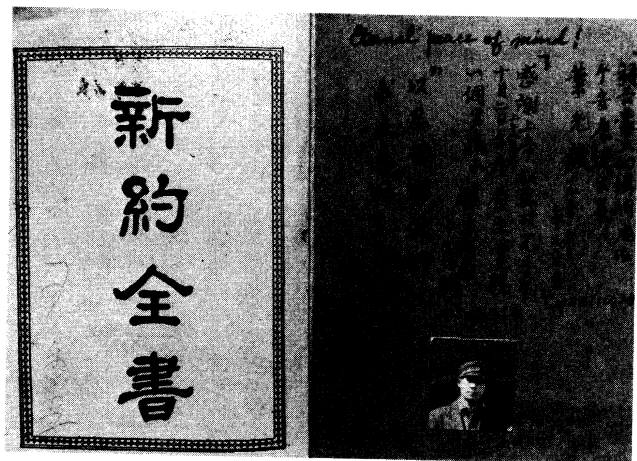
軍法処に移される前に、保密局の南所という監獄に繋がれていたが、その牢屋の壁には、所々に小さい穴が開いていて、それを使って他の獄室と通話ができた。獄吏はそれを知っているが、大してとがめもしなかったそうである。葉も一度この穴を使って顔世鴻さんと話をした。顔さんはこう回顧している。

「穴口に耳を当てなさいと、葉盛吉さんから通話があった。もちろん格別なことは話せない。ただ、例の、心こもった声に、何か甘さが含まれているのが感じられた」

葉たちは九月ごろから家族との週一回の文通が許された。差し入れはできるが、面会は許可されない。夫人、父母、岳父母宛ての手紙が二十通余り残されているが、最後の一通は処刑される二日前の十一月二十七日の日付けであった。

クリスマスチャンである岳父母は、一通目の手紙で「聖書を読み、祈禱し、悔い改めなさい」と勧めている。それからは、葉は返事を書くごとに、毎日聖書を読んでいると伝え、神に祈っていると書き、結語は必ず「アーメン」となっていた。

これは他人を思いやる彼の気持ちの表れであって、決して彼が獄中でキリスト教を信仰し始めたのではない。入獄前の日記には彼が宗教に傾いたという記載は全然なく、また、当時の国民党政府の監獄には教誨師もいなかった。



1950年11月29日処刑されたとき、身に付けていた小さい聖書

葉夫人は九月十九日の一通目の手紙でこう書いている。

「神の愛に心から感謝いたします。この三カ月、あなたの行方がさっぱり分からなかったのですが、九月十六日の午後四時、思いがけないことに、あなたからの手紙が届きました。全家族の喜びは言語に尽くせないものでした。……

毎週水曜日の午後八時に、全家族があなたのために祈禱いたしますので、あなたもそこで同じ時刻に祈禱してくださいませようか。神があなたを守ってくださいませようと。

……〔原文は中国語〕

葉はその返事に自分も必ずその時刻に祈禱すると書いている。

差し入れは、主に台北にいた義妹・郭春恵（かくしゅんけい）

さんが、毎週のようにいろいろなものを監獄へ持って行った。

葉が要求していたのは、主として書籍と薬であった。本は英和辞典、医書、微積分学など、薬はビタミンB₁、皮膚病薬であった。

旧暦の八月十五日は中秋の節句で、中国の習わしでは、月餅グヱンと呼ばれる、丸い焼き菓子を食べる。その日は月を眺めて、遠くにある身内の人をしのぶ日でもある。その晩、葉の夫人への手紙にこういう件くだりがある。

《今日は中秋。朝、春恵さんが月餅、ゆで卵、缶詰、おかず、ドロップスなど、沢山持ってきてくれました。同室の人たちも大変喜んでいました。本当に有り難う。

差し入れはもうしないようにと、春恵さんに伝えてください。必要な物はもう充分ありますから。人に迷惑ばかり掛けて、心苦しいです》(一九五〇年九月二十六日、原文は中国語)

転向せず

葉盛吉は自己の信念を守り続けて、転向しなかった。十月二十三日に彼は獄中の顔さんに一通の手紙を書いた。下記はその全文である。

《こういう結果になってしまったことは実に残念で、君にも実に済まなかったと思っている。しかし、まあ仕方がない。

こちらに来てから、手紙が出せるようになったので、僕は毎週、父母、岳父母、家内に手紙を出している。彼らには恐らく僕の事情を良く知らないと思う。それが気掛かり、心残りのする点である。

特に岳父母、家内はクリスチャンであるために、僕の心情を理解させてくれないし、またそれでもできない事情にあった。いかにして彼らを安慰しようかと、毎度気を配って手紙を書いている。今のところ、せめて彼らが安心をしてくれたら、と念願するのみである。

しかし、君に銘記していただきたいことがある。僕の今の気持ちは過去一年余り、君と語り合ったあの気持ちで変わりはない。そのことは君がよく知ってくれるだろうし、また僕の周囲のごく近い友人たちも知ってくれるはずである。

詳しい僕の今の気持ちは書かないが、ただ一つお願いしたいことは、将来僕のこの気持ちを良く私の家族に話し伝えていただきたいこと、それから友人にも良く事情を説明していただきたいということである。

こうした環境にあつては、あまり書き残したくもないので、簡単にこれだけ書く。今の僕たちのこの事情は将来、君たちが十分に検討する機会があるはずと思うから。

身体に気をつけられて、必ず最後まで元気でいられることを祈る《

この手紙で見られるように、彼はもう最悪のケースを考えていた、が、転向の意志は毛頭な

かったようである。

遺書と自叙伝

一九五〇年十月二日に男の子が生まれた。義妹の郭春恵さんが、四日に監獄に赤い卵の差し入れを持ってきた。葉はこれを見て、男の子が生まれたのだ、と直ぐ分かった。中国の習慣では、男の子の誕生には、赤く染めた卵でお祝いするのである。

この報に接し、彼は何もかも忘れてしまった。自分が牢中の人であることをも忘れた。自分が死線をさまよっている人であることをも忘れた。一条の光が彼の頭上に輝いた。赤子の写真が彼の手に届いたその日の夜は、一睡もできなかった。

彼は岳父母にこう書いている。

《……神に深く感謝申し上げます。神は私の罪を許してくださいました。神の恵みと加護によりまして、^{しよくし}淑姿「葉夫人の名前」は無事に神が授けてくれました赤子を生みました。

私は涙を流して、神の偉大なる恩典と深き摂理に感謝致します。

今、私は前途に輝ける道を見出しました。私は一切をイエスさまに捧げ、神の愛に感謝致します。私は信仰への道にさらに一歩進み出しました……》（一九五〇年十月九日、原文は中国語）

同じ日に夫人に書いた手紙にはこういう一句がある。

《……僕の胸は希望に満ち溢れている、僕は獄中の人であることを忘れたかのごとくに》（原文は中国語）

子供は祖父によって「光毅」と名付けられた。光明に向かつて毅然と進め、という意味であろう。

十一月十八日の奥さんからの手紙では、こう書かれている。

「日々に寒くなつてまいりましたが、その後いかがでございましょうか。セーターなどをを送り致しましょうか。

私は神のおかげで、毎日無事に過ごさせてもらっています。両親も神に感謝しつつ、日々つつがなく暮らしています。

光毅ちゃんも見ると太ってきました。ただ、よく泣くもので、なぜお父ちゃんが戻ってこないの、と泣いているように思えてなりません。……」（原文は中国語）

母親は光毅ちゃんの代わりに、葉にこういう手紙を書いている。

「パパハ？ ドコニ イツチャッタノ？ ボクハ マダ パパノ オカオヲ ミテ ナイノ ダヨ。ボクハ ナイテバカリ。オトウチャン！ ハヤク カエツテ ボクヲ ダイテネ！」（原文は中国語）

十月十四日と十一月十二日に、彼は光毅に手紙を書いている。父性愛溢れた手紙である。幼児語で書かれているこの手紙は、あたかも彼が赤子の側で話しかけているがごとくである。

《カワイイ 光ちゃん

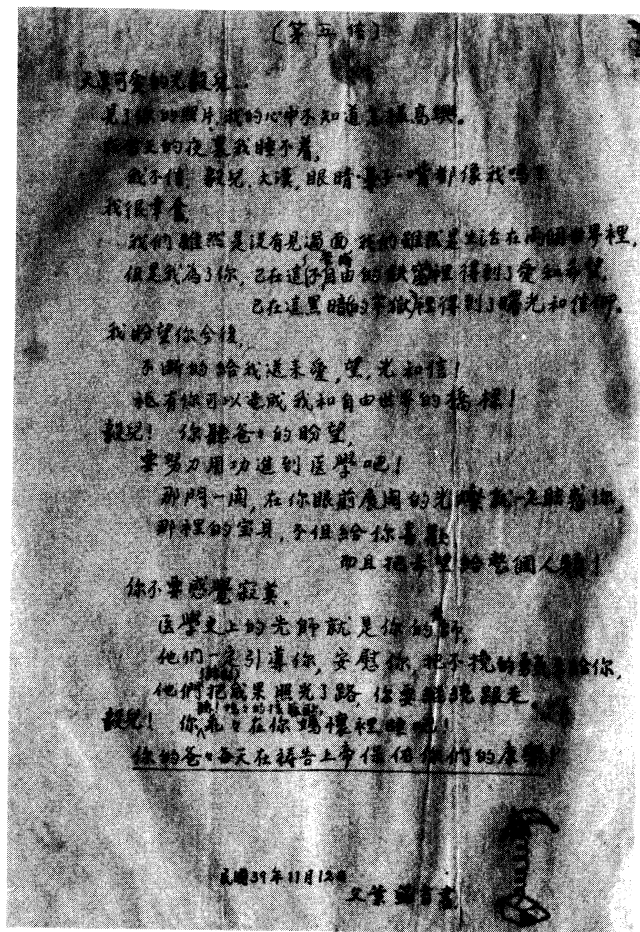
キミノ シヤシンヲ ミテ、オトウサンハ トテモ ヨロコビマシタヨ。アノバン オトウサンハ ネムレナカッタノヨ。

光ちゃんノ オオキナ カラダ、メ、ハナ、クチ、ナニカラナニマデ、オトウサンニ ニテイルトカ。ホントウニ ウレシイナア。……

オオキクナツタラ ヨク ベンキョウシテ イガク「医学」ヲ ヤリナサイネ。……オカアサンノ ムネニ ダカレテ ナカナイデ スヤスヤト ネテネ……》(一九五〇年十一月十二日、原文は中国語)

彼はこの小さい息子に将来、自然科学を勉強し、できたら医者になってくれ、と励ましているのである。

文末には彼の手による素晴らしい漫画が付けられている。男の子の好む漫画で、びっくり箱から人形が飛び出ている。この十二日付けの手紙は、彼が銃殺されたときに、ネクタイと一緒に自分の体に縛り付けられていたそうである。彼の遺児・光毅さんはこの手紙を父親の遺書と見なしている。



獄中で書かれた遺児・葉光毅さんへの遺書、
びっくり箱の漫画が描かれている、1950年11月12日

死刑の二日前に書かれた手紙では、彼はクリスマスのプレゼントに何が欲しいかと、光毅ちゃんに問うている。

「光ちゃん、クリスマススノ プレゼントハ ナニガ ホシイノ？ オトウチャンニ オシエテ チョウダイ。タイホク「台北」ノ オバチャンニ オネガイシテ タイナン「台南」マデモ ッテイツテ アゲルカラネ」(十一月二十七日、原文は中国語)

葉はついに自分のこの子を目も見ることなくして、この世を去ったのである。

彼は十月二十四日から二十七日にかけて、「Autobiography 自叙伝」を日本語で書いている。二万字に近い長いもので、美しい日本語で終戦までのことを回想している。彼は死を予期していたのであるう、自分の短き一生を書き残しておきたかったのだ。結婚後一年にも満たぬ若き妻に、そして永遠に見ることもできないわが子に。「自叙伝」の最後に「忍苦の淑姿及びまだ見ぬ可愛い光毅に父はこれを送る」とし、署名はローマ字で S. Yeh と書かれている。

葉が「自叙伝」を書いたこの間の事情を、顔世鴻さんは回顧録「霜降」でこう回想している。「十月二十四日、この日は韓国の第六師団が、雪山で中共部隊の待ち伏せ攻撃を受けた日である。

葉さんはこの日に第二十七号獄室で自叙伝を書き始めた。

彼は奥さんが男の子を生んだことを、既に知っていた。ところが、こと自分の生か死かについては、彼自身は判断もできない。生の機会を見逃す人は一人もいない。が、客観情勢はだんだん自分に楽観を許さないものがあるように見える。

たとえ、この自伝を書き残しても、この子の手元に届くか、これも予測は出来ない。それで、彼は慎重に微妙な問題を書くことを避けた。

自叙伝は遺書と見なすこともできよう。が、そうだとすると、自分の志を述べることを避けることはできない。してまた、字句の使い方にも気をつけないと、軍事裁判官の怒りに触れることもあるう。

自叙伝は日本語で書き始められた。

彼の獄室は、入り口から数えて二列目にあり、そんなに明るくはない。それでも、廊下に近い方からはわずかな光線が入ってくる。

彼は一万字前後のものを書く積もりであったのだろう。

明日はちょうど、彼の二十七歳の誕生日である。子供は十月二日に生まれた。しかも難産であった。

この自叙伝はできるだけ早く書き終えなければならぬ。もしかすると、書き終える前に、この世を離れざるを得ないかもしれないから」

「自叙伝」は日本時代については、相当客観的に書かれている。日本から台湾に帰った後の事は書かれてない。顔さんの言うようにこの時期は微妙な問題ばかりである。葉は次のような一句でこの「自叙伝」を結んでいる。

『日本の敗戦と中国の勝利、そして台湾の光復「中国への復帰」は、我々に主観的にも、客観的にも非常に深刻な影響を与え、それは今日もまだ継続中である』

葉の「自叙伝」は、日本の教育を受けた台湾の一知識人が、死の直前に日本語で書き残した貴重な記録である。

判決

軍法処での開廷は九月三日のただの一回であった。そして一人が約二、三十分の短時間、それも北京語と閩南語ミンナンの通訳を含めてである。

この日に葉は顔世鴻さんと廊下で擦れ違った。「一切合切、僕のせいにくれ」と彼は顔さんに囁いた。

判決は九月十六日に下されているが、本人に知らされたのは処刑の寸前である。

葉ら「学委案」の死刑囚は秋涼の十一月二十九日に銃殺された。四十数名の犯人の中で、死

刑を宣告された者は十一名、懲役十五年が七名、懲役十二年が顔さんを含めての六名、懲役十年が十四名、懲役八年が一名、懲役五年が五名、無罪一名となっている。

有期刑の罪状は反乱組織に参加した、とだけになっているが、死刑は「協力して非合法の手段を用い、政府を転覆するの意図あり、またその意図を実行に移し始む」となっている。

ところが、この十一名の中で初めて出てくる五名の罪状は詳しく書かれているが、後の六名のは二、三行だけである。葉の罪状は中国語で三行だけで、日本語に訳すところなる。

「被告は既に逃亡した共産党学生工作委员会委員劉沼光りゅうしやうこうの紹介で、一九四八年九月に入党、台湾大学医学部の細胞の責任者となる。一九五〇年二月、顔世鴻を入党させ、この細胞を再建し指導した。一九五〇年三月、台湾大学を離れた後は活動なし」

顔さんが回顧録で推定しているが、後の六名は最初の判決では死刑でなく、無期懲役であった。後で上の方が一律死刑に変えたのである。罪状のいかんにかかわらず、細胞の責任者は例外なく極刑、ということになったのである。判決書でも葉は台大を離れた後は活動なしと認めている。それなのに死刑とは！

顔さんは一九五〇年の一月の下旬か、二月の初めごろに入党し、六月に逮捕されたのだから、党内には四カ月しか留まっていなかった。それに「二月から党の活動を停止すべし」と共産党上級

機関から指令があり、顔さんは共産党の活動には何一つとして関わってない。それでも十二年もの懲役である。赤狩りがいかに狂気じみたものなるかは、これでその一斑を知るに足る。

この三、四年間の赤狩りで殺されたのは、およそ四、五千人、無期監禁と有期監禁は八千人から一万人といわれている。この小さい島にとっては莫大な数字である。その中には葉盛吉のような英才が多数含まれていたのである。

国民党と共産党はこの数十年、中国大陸で血なまぐさい闘争を続けてきた。一九四九年十二月に大陸から追い出された国民党は、この闘争の舞台を台湾に移した。葉はこの血の闘争で犠牲者となったのである。

葉は処刑される二日前、十一月二十七日に獄中から家族への手紙で、

《私には政府を転覆する意図はありませんでした》

と書いているが、私は、これは彼の本音だと思う。

彼はこの社会に不満を持ち、良い社会が造られることを望んでいた。この願望は暴力に頼つてのみ実現されるとは限らない。彼はロマンティストで、同時にヒューマニストである。こういう人をも容認できず、ギロチンにかけなければならぬ政権が当時の台湾に存在していたので

あった。

千古風流の人物

処刑

当時、台湾政府は「反乱罪」に対しては起訴書も作らなければ、弁護士も付けてくれない。一審判決で、上訴の権利は皆無であった。

死刑囚の銃殺は、明け方まだ薄暗いときに執行される。昼間に呼ばれるのは尋問で、数十分すれば、また牢獄に戻って来られる。夜明けに呼ばれるのは、間違はなく、もう帰ってくることはできない。

死刑囚は犯人本人に間違いないことを確かめられ、高粱酒一杯に饅頭一つを与えられて、これが最後である。判決文をだらだら読むようなことはしない。そして憲兵第四団に引き渡される。犯人は二人の憲兵に押さえ付けられ、がんじがらめに縛られて、有蓋トラックに押し込まれる。獄吏と憲兵の動作は手慣れたもので、死刑囚を牢獄から呼び出してここまでやるのに、二十分もかからない。トラックは薄闇の、人通りもない台北市街をフル・スピードで処刑場に向かう。そこは台湾大学付近の水源地の川端で、日本時代は馬場町と呼ばれていた。

顔さんは前述の回顧録「霜降」の中で、彼が知り得た幾人かの臨終の姿を描いている。以下は主に彼の回顧録による。

大量銃殺は九月三十日から始まった。その日は、謝瑞仁医師、蔡国礼医師、張木火教員が処刑された。

翌十月一日は、大陸の中華人民共和国の建国記念日である。この日に処刑された九人は、台湾新竹出身の江徳興博士のほかは、みな大陸出身の人である。その中には国民党の郭秉衡少佐、劉全礼参謀少尉が含まれていた。彼らは国民党員でありながら、共産党の地下組織に参加していた。この九人はあらかじめ取り決めたかのように、一人残らず、立派に身なりを整えて処刑場に向かった。郭少佐は背広姿だった。「今日はまあ天気はいいようだね」の一言が獄中の友との別れの言葉であった。

身なりに構わず、死に向かう人もいた。中共の台湾工作委员会の最高責任者に直属していた無線通信士で、羅という人。朝早く、獄吏が彼を呼び出しにきたが、十月末の台北はもう薄ら寒いのに、羅氏はパンツひとつで、しかも裸足で出ていった。身の回りの物などは全部他の人に残していった。看守が物は要らんのか、と聞いたら「君が欲しいのは僕の体なんだろう。僕の物をどうするなんて聞いて何になる」との答えである。彼は敢えて微笑することもなく、大

声でスローガンを叫ぶこともなく、悲しい顔付きも見せずに、あたかも散歩に出かけるようにして処刑場に赴いた。

十月十四日、基隆中学(高校を含む)の校長鍾浩東氏が銃殺された。鍾氏は台北高校と明治大学に学んだ人である。人格者で知名人でもあった。日本時代に大陸に渡って、反日のゲリラ戦に参加した。共産党に入ったのは、日本敗戦の翌年で、台湾ではベテランの革命家である。

同時に処刑されたのは基隆市工作委员会の委員の李蒼降氏と基隆郊外の汐止支部書記の唐志堂氏である。

その朝の様子を、顔世鴻さんは回顧録でこう書いている。

「牢獄の二階に囚われている奥さんに、別れを告げるかのように、李さんはわずかばかり頭を上げた。言い尽きぬ無言の頼みごと。限りなき離別の情。この寂寥の時刻と空間に、そして彼のまなざしに溢るるはこの情であった。

私の視力は当時、二・〇であった。……ほかの人に見えないものを、私ははつきり見ることができた。が、見えても、私にどうすることができよう。

弱々しさもなく、悔いもなく、かくも自然に溢れ出づる情。鍾校長先生も全く同じであった」

鍾先生は獄中の一人一人と握手した後、彼の愛唱歌『幌馬車の歌』(山田としお作詞、原野為二

作曲)を歌いながら、悠揚として処刑場に向かった。

台中商業卒業の施部生氏は新聞記者を勤めた後に、中共の台湾武装工作委員会の一員となった。憲兵に追われて足を撃たれ、跛足となった。牢獄で足の手術を受けたが、麻酔薬も使わずに、裁判官と碁を打ちながら、顔色ひとつ変えなかったという。十月二十七日、刑場に赴くあの時刻は、まだ薄暗かった。彼は友の檻を叩いて「A君、一足先に……」と言って悠然と出かけて行った。

同時に処刑された呂煥章氏は、誰に対しても長者のごとく振る舞う人である。人に優しく、さりとして諍(へつ)まない。例の朝、彼を呼びにきた獄吏に「ご苦労さま」と言った。その自然極まる一言は数分後に死を迎えている人の言葉と思われない。刑場で彼は後ろに立っている死刑執行人の憲兵にこう言った「お願いだがね。慌てないでくれ。心臓めがけて一発だと有り難いな」と。

有期刑の顔さんたちは、十一月一日に軍法処の監獄から別の所に移された。この移転の人たちの中に、顔さんは恩師・許強先生と先輩・葉盛吉さんの姿を見出すことができなかった。彼は涙を流すだけだった。

顔さんはいろいろな資料に基づいて、許強先生、葉盛吉たちの今際の時をこう書いている。葉の恩師・許強先生は葉より一日先に処刑された。

許強先生は台北高校、台北帝大医学部の出身で、逮捕される前は台湾大学付属病院の第三内科主任で、間もなく教授に昇進するところであった。赤狩りで台湾は消化器系統のオーソリティーを失ったのである。

許先生と同時に処刑されたのは郭琇琮氏、呉思漢(本名、呉調和)氏など計十四名である。郭琇琮氏は葉の台湾大学の先輩である。彼は戦時中、反日の地下組織に参加し、そのために三年も投獄された。日本敗戦後、あの二・二八事件で、彼は「学生聯盟」の指導者として国民党に立ち向かった。その後、共産党の台北市工作委员会の書記として大いに活躍した。

呉思漢氏は台南二中、台北高校の出身で、京都帝大医学部在学中に、鴨緑江を渡って旧満州に入り、そこから重慶にたどり着いた。千辛万苦の旅である。「祖国慕いて千里近し」の一文に彼の愛国心が溢れている。国民党に愛想をつかした彼は、終戦後台湾に帰って、共産党に参加し、今回の赤狩りで命を落とした。これまた台湾人エリートの悲劇である。

この十四人は監獄を出ていくときに、許強先生のリードでスローガンを叫んだ。そして有蓋トラックの中で、あの悲壮な「インターナショナル」を合唱した。

見せしめのためか、この十四人の遺体は、その日、収容させなかった。翌日、葉たちが処刑

場・馬場町に連れて行かれたとき、葉は恩師と先輩がそこにさらされていた惨状を目にしたのであった。

十一月二十九日、初冬の台北は、朝からこぬか雨が降っていた。薄暗い明け方に、葉を含めての十一名が呼び出された。彼らは台湾大学、台湾省立師範学院などに学んだエリートで、三十一歳の一人を除いては、皆二十代の青年である。

葉は最初に呼ばれたのではない。彼は同室の李さんに寄りそって、息を殺して待っていた。

「葉盛吉！」

この声を耳にしたとき、彼はゆっくりと立ち上った。そして靴を履いて、出て行った。

一分ぐらいしたであろうか。彼はまた獄室に戻って来た。呼び違いかと思つて、同室の人たちは彼に祝いの言葉を交わさんとした。ところが、彼は李さんに「私の身の回りの物を顔世鴻さんに手渡ししてください」と言付けて、また出て行った。

法廷で、この十一名が本人であるかを確かめられてから、判決が下された。判決文の本文だけが読まれたが、「死刑、死刑、死刑……」と法廷の小さい部屋にこだまするのみであった。

監獄から出ていくときに、スローガンが叫ばれた。昨日のような事が起きないようにと、憲兵たちはあらかじめ用意していた。ガーゼのようなものがすぐさま一人一人の口に荒々しく詰

め込まれた。

処刑場の馬場町は、台北の西南部を流れる新店溪の川端にあった。ここには相当大きい砂浜が広がっている。遥かに、もとの菜市場さいしやうが見られるが、現場は昼間でも人影のない、薄気味悪い所である。

葉盛吉たち十一人は、馬場町に着くやいなや、トラックから押し出されて、あつという間に最後の息を引きとった。

朝湿りの河原に鮮血がほとばしる。その時、東の空はまだ薄暗く、銃声の後の静けさは、鬼神をもおののかす。

台湾のエリート、愛国者、台湾民主化運動の活動家、日本を第二の故郷と見なしていた葉盛吉は、かくして二十七の春秋を終えたのであった。一九五〇年十一月二十九日黎明六時のことである。

蘇東坡が「大江東に去り、浪は洶あつい尽くせり、千古風流の人物を」「赤壁懷古」と詠んだのが、正にこれである。

その後

葉盛吉が処刑されたその翌日、彼の岳父は出張の途中、ある国民学校で新聞を見た。葉たち十一名が処刑されたニュースが目に入った！ 驚愕した岳父は、すぐさま新営市に引き返し、台北にいる葉の実父に電報を打った。その電報は今でも残されている。

「阿貴已死、請回來、死体代為火葬。新営電信局、十一月三十日、十五時二十五分送信」

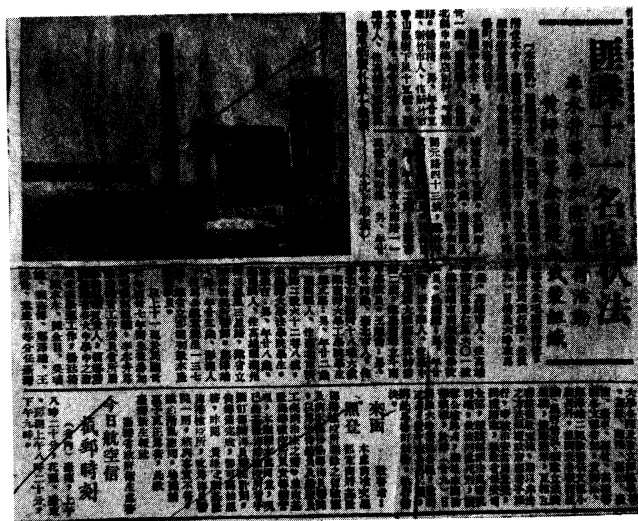
「阿貴」とは葉の幼名である。電文は「阿貴既に死す、死体を火葬して頂き、遺骨を台南まで持ち帰ってもらいたい」と読みとってよいのだろう。

岳父はその日の夜に、台北にいる自分の娘・郭春恵に詳しい手紙を書き、遺体受領の委細を言付け、とくに誤認しないよう注意を促している。

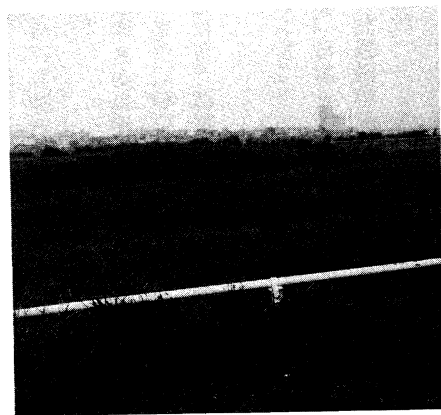
養父母も台南に来て、善後策を相談した。皆、泣き崩れて、特に葉盛吉夫人の悲しみは見るに堪えないものであったという。

台湾の国民党政府は一九四七年の二・二八事件で、戦後の、台湾第一代の英才を多数葬り、今回の赤狩りで、またその第二代の英才の血をむさぼるように啜ったのであった。

銃殺の翌日には、新聞に「中共のスパイ某某が処刑された」との記事が載り、さらに台北駅の表玄関と軍法処に、処刑の公告が貼り出された。台湾は恐怖の島になり変わった。



葉盛吉たちの処刑を伝える台湾の新聞



処刑場、台北市馬場町

台北にいる葉の実父、姉の葉彩英^{ようき}さん、それに郭春恵^{はるゑ}さんは、まず軍法処に行つて、死体領収書を書き、葉盛吉の遺物を受けとり、それから林森北路の極楽斎場に赴いて、遺体を確認した。

葉彩英さんの回顧によると、葉は青いセーターと長ズボンを穿いていた。顔世鴻さんは回顧録で、葉は靴を履いて牢獄から出て行つたと書いているが、遺体は裸足であつたそうである。全身、血まみれ、泥まみれで、見るに忍びないものであつた。看護婦を勤めたことのある葉彩英さんは、丁寧^{ていねい}に葉の全身を調べてみた。弾丸がうがつた孔は、左胸に一つしか見付からなかったが、火葬した後に、頭骨に弾丸が打ち入れられたと思われる孔が見付かった。

死者の腰に一本のネクタイが堅く縛られていた。剥がしてみたら、中から小さい聖書、葉の写真、それに夫人の写真が出てきた。多くの死体から自分のそれを早く確認できるようにとの、彼の事前の計らいであつた。びっくり箱の漫画が描かれている、遺児・光毅さんへの遺書も、その中であつた。

遺骨は台南に持ち帰り、郭家の大広間に祭られた。

国民党政府の特務(日本の特高に相当)の劉振東という者が、わざと郭家の向かい側に住み込んできて、長年、郭家を監視していた。私服の特務は二、三カ月ごとに「訪問客」として郭家



葉盛吉の骨箱を捧げ持つ夫人と遺児、1952年11月23日



葉盛吉の遺骨埋葬前に、父と最後の別れをする遺児、1952年11月23日

に現れ、うるさく付き纏った。致し方なく、葉の遺骨は奥の部屋に移された。

葉の遺品は、二十五冊の日記、手記などを含めて、夫人によって家宝として簞笥の中に入れられ、一番乾燥した場所に保存された。この四十二年の間、三、四回も引越しがあつたが、紙切れ一枚、メモ用紙一頁も、無くすことはなかった。

葉の遺骨は処刑された二年後、一九五二年十一月二十三日、台南市の西南部郊外にある公共墓地に埋葬された。

○二五平方メートルのささやかな墓石である。もの寂しく、草むらに囲まれて、彼はここで永眠している。墓石は「故葉盛吉之墓」と中国式に赤い字で刻まれている。

エピソード

一九四八年の夏休みに、私は台北に帰省し、葉盛吉と再会した後、また北京大学に戻ってきた。私も彼と同じく、国民党ファッショ政権反対の学生運動には積極的であつた。北京大学のストライキとデモに、私が姿を見せないことはなかった。特に台湾と関わりのある事件には、我々台湾人学生は全力を投じた。共産党が政権を握れば、台湾の未来に希望が持てる、と我々は確信していたからである。

一九四八年の初冬に、私は商人^{あきんど}に扮して北京を離れて、共産党の統治区(解放区)に入り込んだ。そして翌年の初めに、人民解放軍と一緒に北京市に入城した。

軍紀厳しい解放軍に感服しない北京市民は一人もいなかった。共産党幹部の廉潔に敬服しない庶民も一人もいなかった。「新しい中国の建設が今から始まるのだ」とみな中国共産党に未来を託していた。一九四九年十月一日、私も北京市民と一緒に中華人民共和国の建国式典に参加し、涙を流してこの新しい共和国の誕生を祝つたのである。

台湾の革命家たちは、台湾人の将来は中国共産党によって約束される、と信じて大陸に渡ってきた。一九四七年の二・二八事件に参加した台湾の著名女性革命家・謝雪紅も、事件失敗の後、香港に逃れて「台湾民主自治同盟」を組織したが、一九四九年の初めに北京に馳せ参じて、新中国の建設と台湾の解放に献身することを表明した。

謝雪紅は、日本の植民地であった台湾の歴史的、社会的特徴を強調していたものの、中共の指導を前提とした台湾の高度の地方自治制を主張した。私はこれに賛意を表し、一九四九年に「台湾民主自治同盟」に参加した。

中央政府の指導下の台湾地方自治は、台湾独立の主張とは明らかに一線を画している。ここ数年、鄧小平が打ち出している「一つの国家、二つの制度」の主張によると、大陸は社会主義制度を堅持するが、台湾は資本主義制度を維持してよい、というものである。してみれば、鄧小平の意向は謝雪紅の地方自治の主張よりはるかに柔軟で、謝雪紅の方がより革命的である、とさえ言える。

ところが、謝雪紅が大陸にきて二、三年ほどした一九五二年から、台湾の地方自治の主張は台湾独立運動の一変種であるとして、批判され始めた。一九五七年の反右派運動に至っては、謝雪紅はついに台湾独立を煽動した右派（人民の敵、非国民）として断罪されたのである。台湾の著名革命家・謝雪紅はあつてなく、これで完全に政治生命を絶たれてしまった。類似の運命

に遭遇した台湾人革命家は、謝一人のみではなかった。

若き葉盛吉と私が求めてきたのは、帝国主義の支配を台湾から排除すること、それが達成されてからは、中国諸民族の自由平等民主を獲得することであった。一九四五年、台湾は日本の植民地統治から解放されたが、今度は同じ漢民族でありながら大陸から台湾に來た外省人が、台湾人を不平等に取り扱った。それに堪えきれず、台湾人はついにあの二・二八事件といわれる大暴動を引き起こしたのである。

謝雪紅たちが主張していた台湾の地方自治は、もちろん中国諸民族の内部の平等を前提としている。それなのに、地方自治を唱えただけで、「人民の敵」とされるとは、彼女自身も夢想だにもなかったことであろうし、他の台湾人にもショックであった。

彼女はかつて日本共産党の古参党员であり、その前に中国共産党にも参加していた。謝雪紅には性格上の欠点と人間関係上の錯誤があつたとはいえ、それをもって彼女を国事犯と決めつける証拠はどこにもない。法治制度の欠如が悲劇をもたらしているのである。

本書では葉盛吉の寛容性と包容力に対する見解を所々で述べてきたが、ここで一九四四年二月四日の彼の手記を再度引用させてもらおう。

《自分は、団体や国家というものは、これに相反する分子の存在は大切だと思う。それは常

に反省の気運を与え、それが進歩発展の手立てとなるからである」

私は謝雪紅の追隨者と見なされて、一九六六年から始まった文化大革命では本格的に批判され、「台湾独立分子」「祖国分裂主義者」「右派」「人民の敵」などのレッテルを張られた。私が本当に台湾独立派であるならば、日本敗戦後、台湾に止まっておればよいのに、なぜ北京まで駆けつけて来たのか。私の経歴そのものが、私の思想をはっきり証明しているのではなからうか。この「葉盛吉伝」でも見られるように、学生時代から葉と私は中国にアイデンティティを求めるに必死ではなかったのか。

私は「人民の敵」のレッテルを一九七二年まで張られて、村八分の待遇を受けた。もちろん台湾独立派なる証拠はどこにもあるはずがなく、名譽は回復されたが、損害賠償のようなものはなかったし、私にもそういう要求を出す考えすらなかった。

謝雪紅は一九七〇年に失意の内に北京で死去したが、それから十年も経ってからやっと名譽が回復された。台湾のベテラン革命家が二十三年余りもの長い間、非国民扱いされたのである。もちろん、台湾人のみではない、大陸の革命家も同じ運命に遭遇したのである。一例にすぎないが、国家主席の劉少奇も文化大革命で非業の死を遂げたことは良く知られている。

大陸と台湾の長期間の対立は、共産党にも国民党にも相互不信と神経過敏症を引き起こした。私の身の上にこんな事もあった。一九五九年、私はルーマニアで開かれる学術会議に参加することになっていたが、中共中央の人事部がそれに難色を示した。この男がルーマニアから台湾に逃げて帰ったら困る、と言うのである。訪問団の団長・姜椿芳氏きょうしんほうが「私が保証する」と太鼓判を押してくれて、やっと私の出国が許可されたのであった。

私の台湾籍は文化大革命でも厄介なものになった。上記のように台湾独立派と見なされたのみならず、台湾の国民党のスパイとしても疑われた。国民党の諜報機関が、私に北京解放後も台湾に戻らずに、大陸に長期潜伏せよ、と指令を出したというのである。文化大革命で私も家宅搜索されたが、オルガンは分解されて、その中に無線発信器が隠されていないかとまで調べられた。

日本に留学したことがあるので、日本のスパイの容疑もかけられた。これも珍しいことではない。外国の留学歴を持つ人は、ほとんど例外なく自己の潔白を証明するに困った。ただ、私は一回り大きい、日本と国民党の二重スパイというのである。

文化大革命の十年は四十歳から五十歳までの働き盛りの年であった。ところが、軟禁、強制労働、島流し、豚飼い……と明日知れぬその日その日を送った。幸いにしてまだ体力があった

ので、命だけは取り止めた。

以上のもろもろを新政権の試行錯誤と見なしたいのは、中国国民の善良な願いであろう。私もまたそのうちの一人である。

振り返ってみれば、中国の為政者が国民を武力で弾圧した悪例の一つが、台湾の二・二八事件である。これも国民党政権の試行錯誤であったのか。我が若き葉盛吉を殺したのも試行錯誤に数えられるべきなのか。

中国の為政者が自国の民を武力で弾圧した実例は、枚挙にいとまがない。彼らが用いた手段は青竜刀、鉄砲、拳銃、機関銃、大砲、戦車、飛行機などさまざまである。清朝滅亡以来、八十年の方、いろいろな為政者が中国の政治舞台にデビューしたし、今でもデビューしているが、彼らの一切の所業所為をただ単に試行錯誤と見なして良いのだろうか。

葉盛吉は大学卒業後、間もなくして銃殺された（一九五〇年）。私は大学卒業後、大陸で生き延びて、そこに一九八九年まで滞在した。大陸には職業の自由選択はなかった。「革命の需要に応じて」「党の任務に応じて」各人に仕事を振り当てるのが正当視されていた。もちろん、職業の振り当ては党の人事部門が決めるものである。私に与えられた職業はこの四十年間にた



葉盛吉の台湾大学同窓・顔世鴻さん(右)と私の弟・陳博仁、
葉盛吉の墓前で。1991年1月8日

だの一つ——図書館長であった。それで、二十四歳から六十四歳の退職まで「万年館長」を勤めたわけである。ほかに大学で客員教授の教職にあったのは別であるが。

私が中国大陸に残した足跡は二つしかない。「中央編訳局図書館」と呼ばれる社会史の専門図書館を一館建てたこと、それに本を何冊か書いたこと、それだけである。

四十年の歳月を重ね、幾人かの司書の協力を得て、私は百万冊近くの中、日、英、独、仏、露、スペインなどの社会史関係の本を蒐集して、この図書館を建てた。

文化大革命で、私は「ブルジョア館長」として批判されたが、マルクス主義の書籍と非マルクス主義の書籍を同等視するリベラルな図書収集方針と、読者に一切の便宜を与える経営方針

とを、私は曲げることはなかった。今後、戦禍や天災を被ることさえなければ、この専門図書館は引き続き中国の学者に大いに活用されるに違いない。

私の著書『西洋図書館史』は中国出版界の老舗・商務印書館から出版され、大学の図書館学部の学生諸君に今でも読まれているそうである。書誌学に関する本はドイツ語にも訳されて学術研究の参考書として使われているようである。

私のこの四十年の歩みは、天によって定められたものかも知れないが、中国の民主化に直接なんらの貢献をもし得なかったのは、私の最も遺憾とするところである。

友・葉盛吉が生き残ってくれていたなら、中国の民主と自由の事業に多くの貢献を成し得たと私は信じて疑わない。

私は定年退職後、日本にきて三年近くになるが、引き続き日中の文化交流に微力を尽くしたい心算でいる。本書も日本、台湾、中国大陆と関わりのある人物をテーマにし、相互の理解と友好に多少とも裨益することあらばと願って筆を執った次第である。

葉盛吉資料目録

葉盛吉資料目録	
1	日記(1)
2	日記(2)
3	日記(3)
4	日記(4)
5	日記(5)
6	日記(6)
7	日記(7)
8	日記(8)
9	日記(9)
10	日記(10)

一九四〇年十二月二十九日より一九四一年十二月三十一日まで
一九四二年一月一日より一九四二年十二月三十一日まで
一九四三年一月一日より一九四三年九月二十九日まで
一九四三年九月三十日より一九四四年一月二十九日まで
一九四四年三月六日より一九四四年六月一日まで
一九四四年六月二日より一九四四年九月二十七日まで
一九四四年七月二十日より一九四四年十二月二十九日まで
〔日記(6)と(7)に日日の重複あり〕
一九四四年十二月三十日より一九四五年八月二十四日まで
一九四五年八月二十八日より一九四六年七月二十四日まで
一九四六年七月二十四日より一九四八年三月二日まで
〔一九四六年七月二十四日の日記は二度書かれている。一九四七年四

11	日記(11)	月十一日から同年十一月二十四日の日記は欠けている」
12	日記(12)	一九四八年三月三日より一九五〇年一月二十一日まで
13	手記(1)	一九五〇年一月二十三日より一九五〇年五月二十八日まで
14	手記(2)	一九四三年七月一日より一九四三年十一月二十一日まで
15	手記(3)	一九四三年十一月二十三日より一九四四年一月二十九日まで
16	手記(4)	一九四四年一月三十日より一九四四年五月十二日まで 一九四四年三月十六日より一九四四年十月二十七日まで 「手記(3)と(4)は日日が重なっている。手記(4)の巻末に創作「冬の日」あり」
17	読書手記(1)	一九四五年十二月前後
18	読書手記(2)	一九四八年十二月より一九五〇年三月五日まで
19	医学生手記	
20	内地旅行記	一九四八年九月一日より同年同月二十五日まで
21	卒業論文と漫画	
22	書簡集(1)	「巻末に「自叙伝」あり」
23	書簡集(2)	「巻末に死刑判決書あり」
24	我が子の歴史	「葉盛吉の結婚、子息の誕生と成長などの記録」
25	成績表と証書	

あとがき

本書は雑誌『世界』一九九二年三月号に発表された「二つの故郷——ある台湾知識人の悲劇」をもとに、改めて書き下ろしたものである。

「二つの故郷」は立教大学・戴国輝教授の推薦で、台湾の作家・陳映真氏により中国語に翻訳され、台北の『中国時報』に連載された（一九九二年六月一日～十七日）。

その後間もなく、戴教授と岩波書店の米浜泰英氏よりお勧めあり、再び筆を執って葉盛吉氏の詳伝を書く意を決したのは、梅雨明けのころであった。それに続く二カ月余りの夏休みをフルに使って稿を脱した。

葉盛吉氏は二十五冊にわたる資料を残して、この世を去った。日本の教育を受けた植民地の一知識人が、戦争と動乱の時代をいかに真摯に生きてきたか、これらの資料はかけ替えのない証言である。

この膨大な資料の整理と出版は、すぐに実現されそうもないので、先ず本書によって、そのエッセンスを公開することにした。

それ故、この葉盛吉伝では私自身の記述よりも、葉盛吉氏本人の資料をより多く引用することにした。すなわち、できるだけ「葉盛吉氏自身に語らせる」ようにした。

引用文には特に《》を付け、仮名遣いは「現代表記」に改め、私が付けた注釈は「」の中に入れてある。

史料に忠実であるべきは、歴史家の必須の条件である。本書で引用している葉盛吉氏の資料には、全部出所を注記している。ところが、史料の選択、配列、分析などには、必ず作者の主観が入ってくる。この本で「語っている」のは葉盛吉であるが、何を、どこで「語らせる」のかは私である。この意味では、ここで書かれているのは、あくまで「私の見た葉盛吉」である。全面的な、客観的な伝記は存在しないとは、この意味であろう。

本書の出版には実に多くの方々のご指導、ご協力を頂いた。

葉盛吉夫人と葉盛吉ご子息・葉光毅教授は、四十二年間の長きにわたり、この貴重な資料を保存され、しかも快く私にその使用を許してくださいました。

葉盛吉氏の台湾大学の同窓・顔世鴻氏は、未公開の回顧録のコピーを提供してくださいました。顔氏のほかにも、蘇友鵬氏など多数の方々から台湾大学時代と獄中の資料について助言を頂いた。

戴国輝教授はアメリカ出国前の多忙の中、初稿を詳読されコメントしてくださいました。

旧制二高のクラスメート中島稜病院長は激務の寸暇を盗んで初稿を通読し、忠実に歴史的資料を書き残すようにと、再三注意を促してくれた。彼の忠告と叱咤なくば、私の筆は進まなかつたに違いない。

今回、日本に来てから知り合いになった「新^{シン}朋^{ポウ}友」・丸山善平氏は、私の忘れかけた日本語にあまたの朱を入れてくださり、また忌憚なき意見を述べて頂いた。氏のご指導とご協力には感謝のほかはない。

岩波書店の米浜泰英氏、小野民樹氏、山口昭男氏、山崎貢氏、及び校正、印刷、製本、営業担当の方々には心から御礼申し上げます。

その他、お世話になった多数の人々にも厚く感謝いたしたい。

一九九二年十月十日

楊 威 理

ある台湾知識人の悲劇

定価はカバーに表示してあります [同時代ライブラリー 137]

1993 年 2 月 15 日 第 1 刷発行

1993 年 5 月 15 日 第 2 刷発行

著 者 よう いり
楊 威理

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
同時代ライブラリー編集部 03-5210-4136

編集協力・アルク出版企画 印刷製本・精興社

© Iri Yo 1993

ISBN 4-00-260137-4

Printed in Japan

本書は、同時代ライブラリーのために書下されたものである。